

東青地域住民の仕事と 生活に関する調査報告書

2015年11月
弘前大学人文学部

弘前大学特定プロジェクト教育研究センター

地域未来創生センター

— Innovative Regional Research Center —

はじめに

本研究は、青森市から委託を受けて、弘前大学地域未来創生センターが行ったものであります。青森市を中心としている東青地域にお住まいの皆さまの働き方や現在の生活状況について調査し、今後の地域振興、特に若者の地域定着やUJIターンを促進する政策の提案を行うべく、2015年8月に実施した『東青地域住民の仕事と生活に関する調査』の結果をとりまとめたものであります。

人口減少問題は、この地域にとって解決が急がれる最重要課題の一つであります。当センターで今まで行ってきた人口動態に関する研究によって、人口減少の最大の要因は社会的な移動にあることが明らかになりました。この地域で出生した各世代の3～4割が20代前半までにこの地域を離れています。このような若者の流出を食い止めることも大変重要な政策であります。もう一つの観点はこの地域を離れてさまざまな経験をした人々が喜んで戻れる地域づくりやUJIターンの環境を整えることも重要な政策であります。

本研究は、UJIターンについて地域内の社会経済環境のみならず、個人の属性や個別的な社会経済環境に注目し、そのような環境が移動の選択にどのような影響を与えているのかを分析しました。この地域の有効なUJIターン促進策を考える上で貴重な基礎資料として一助になれば幸いです。

この調査にあたり、ご協力いただきました皆さまや関係機関などに、心から感謝申し上げます。

2015年11月

弘前大学特定プロジェクト教育研究センター
地域未来創生センター長 李 永 俊

目 次

はじめに

第1章 調査の概要	1
1 調査の背景と目的	1
2 調査方法	2
3 調査結果の概要	3
4 報告書の構成	5
第2章 東青地域住民の仕事と生活実態	8
1 はじめに	8
2 仕事の状況	8
3 所得からみる生活実態	12
4 就業形態と性別からみる生活実態	14
5 中核市部と周辺部との仕事と生活実態の差	17
6 小括	18
第3章 UJI ターン者の仕事と生活実態	19
1 はじめに	19
2 UJI ターンの定義	19
3 仕事と生活実態	24
4 賃金関数の推計	31
5 小括	32
第4章 UJI ターンの理由とそのきっかけ	34
1 はじめに	34
2 移動時期	34
3 移動元の都道府県	36
4 UJI ターンの理由	37
5 移動にともなう変化	40
6 小括	44

第5章 UJI 者の社会関係	45
1 はじめに	45
2 地元関係の検討	46
3 居住年数と地元関係	50
4 祭、青年団、ボランティアでの関係性	54
5 祭、青年団、ボランティアでの関係性と居住年数	56
6 近距離のサポート・ネットワーク	59
7 遠距離のサポート・ネットワーク	74
8 集団加入	82
9 社会関係のまとめ	84
第6章 東青津軽地域の UJI ターンとジェンダー	87
1 はじめに	87
2 現在の生活状況について	87
3 移動経験の概要	92
4 青森県内で生活することへの意識	94
5 UJI ターンの理由や条件について	96
6 小括	98
第7章 夫婦の出生順位は UJI ターンに影響したのか	100
1 研究の背景および目的	100
2 分析結果	100
3 小括	109
第8章 東青津軽地域住民の仕事と学歴について	111
1 はじめに	111
2 分析結果	111
3 地域移動の理由について	119
4 小括	121
付 録	123
回答者集計表	123
回答者用質問紙	139

第 1 章 調査の概要

李 永 俊

1. 調査の背景と目的

人口減少問題は、本県にとって解決が急がれる最重要課題の一つである。国立社会保障・人口問題研究所の「日本の地域別将来推計人口」によると、青森県の人口は 2025 年には 116 万 1 千人、2035 年には 100 万 9 千人で、25 年後には確実に 100 万人を割ることが見込まれている。これは、ピーク時の人口（152 万 9 千人（1983 年））から三分の一が減少する結果となり、地域の持続可能性を脅かす最重要課題となっている。

人口の増減は、自然動態（出生数－死亡数）と社会動態（転入－転出）の合計で決定される。自然動態の推計を見ると、少子高齢化の影響で 1999 年からは死亡数が出生数を上回って自然減となっている。以降は一貫して、減少幅が拡大している。一方、社会動態は、本県は大都市圏、主には東京圏に優秀な労働力を供給していたので、戦前から一貫して転出が転入を上回る社会減となっている。特に高度成長期からバブル経済がピークだった 1990 年代前半までは、年間 1 万 3 千人前後が社会減となっていた。バブル崩壊後、東京圏における景気低迷によって一時的に社会減が減少したが、景気回復に伴って転出が再び増加している。

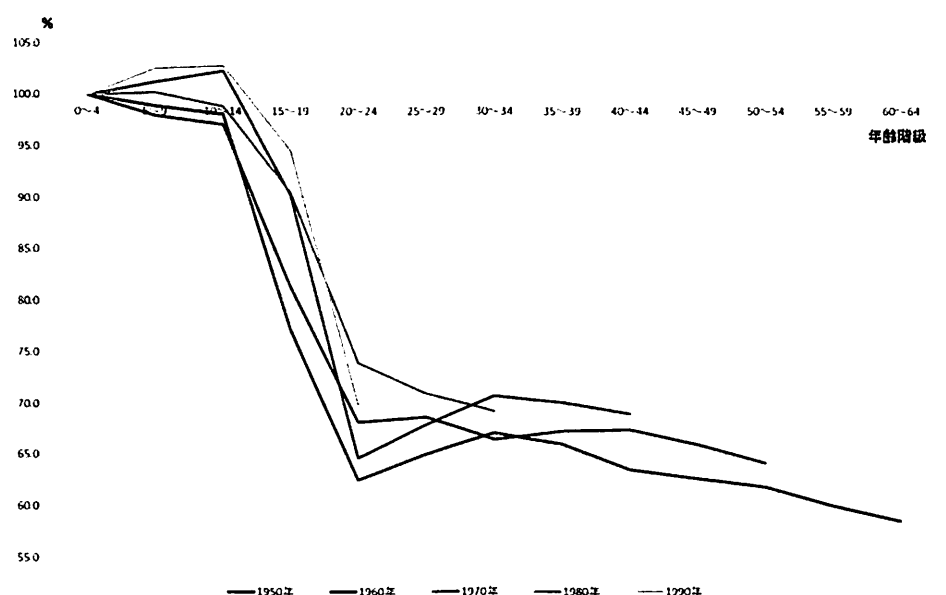
転出者の多くは、就職や就学期にあたる 18 歳から 22 歳の時期に本県を離れる。このような若い世代の県外への流出は、域内の消費の低迷を招き、消費の低迷は生産活動の縮小につながり、雇用の場が失われ新たな転出を招くようになる。このような外部不経済の存在によって人口減少が止まらなくなるのである（玄田・大井・篠崎（2005））。また、域内の経済活動だけでなく、婚姻率の低下や出生数の減少に拍車をかけ、本県の人口再生力を低下させる。

図 1 は、国勢調査を用いて、出生時の人口が時間の経過とともにどのように推移しているかを図示したものである。図から、すべての世代において、3 割強から約 4 割までの人口が 15～24 歳までに流出していることがよく分かる。また、樋口（1991）などは近年の少子化によって若者の地元志向が強くなっていると指摘しているが、1980 年の 0～4 歳層までは流出が減少しているものの、1990 年生まれには流出が増加しており、少子化の影響で県外への流出傾向が縮小しているとは必ずしも言えないことがわかる。また、流出した人口の回復についてみると、15～24 歳までに 0～4 歳層人口の 3 割強から約 4 割までに流出した人口は 40 代の半ばまでに徐々に回復していることがわかる。しかし、回復する人口は 0～4 歳人口の 1 割に満たなくなっており、すべての世代において十分に人口が回復されないま

ま、老年期を迎えることがわかる。このような流出は、婚姻人口の不足、出生数の減少へとつながり、累積的に人口減少スピードを加速する要因となっている。

このような人口減少スピードを減速させ、将来的に人口を回復させるためには、流出者を県内に留めることと、流出した人口のUターンやJターンを促進させること、そして県外からの流入者を増加させることが政策的に考えられる。県内に若者を留めるためには、流出要因が何かを明らかにして、その要因を取り除くことや、県内に留まるインセンティブを付加することが有効である。県外への流出の要因については、李（2013）で詳細な分析を行った。UJIターンについては、当初の調査計画が東日本大震災の影響で中断されたために、調査が遅れ、今になってしまった。本調査報告書は、UJIターン者の社会経済生活と彼らの移動要因を明らかにすることで、より効果的なUJIターンの促進策を考える上での基礎資料を提供することを目的とする。

図 1-1 出生時人口の推移



出所：総務省『国勢調査』より作成。

2. 調査方法

調査方法の概要は以下のとおりである。

・調査地点と回答者数

調査対象地域は、青森県東青地域県民局管内の市町村、青森市、平内町、今別町、蓬田村、外ヶ浜町である。調査地点は、市町村で層化し、母集団の人口比に応じて対象者を配分した。

・対象者と抽出方法

2015年7月現在で対象地域に在住する20～70歳の男女を、各市町村の住民基本台帳から等確率法の確率比例抽出法で抽出した。

・調査法

郵送による質問紙法を用いた。

・調査期間

2015年7月～8月

3. 調査結果の概要

3-1 回収状況

対象者からの回答は1302名だったが、集計後に明らかに年齢が対象外だった回答者9名と現在在住地が対象地域外だった5名を取り除いて、有効回答は1288、有効回答率は1288/3000で42.9%だった。

3-2 回答者のプロフィール

表1-1 回答者の性別

	人数	%
男性	761	59.1
女性	526	40.8
不明	1	0.1
合計	1288	100

表1-2 回答者の年齢

年齢	人数	%
20～29	122	9.5
30～39	270	21.0
40～49	364	28.3
50～59	448	34.8
60～70	84	6.5
合計	1288	100.0

表1-3 回答者の学歴

最終学歴	人数	%
小・中学校	41	3.2
高校	572	44.4
短大・高専	152	11.8
大学・大学院	303	23.5
専門学校	216	16.8
不明	4	0.3
計	1,288	100.0

表1-4 配偶者の有無

	人数	%
結婚している	857	66.5
離別・死別	116	9.0
未婚	314	24.4
無回答	1	0.1
計	1,288	100.0

表1-5 子供の有無

	人数	%
いない	439	34.1
いる	848	65.8
無回答	1	0.1
計	1,288	100.0

表1-6 回答者が同居している家族

	人数	%
夫や妻	805	62.5
自分の父	220	17.1
自分の母	343	26.6
舅(夫や妻の父)	44	3.4
姑(夫や妻の母)	116	9.0
兄弟姉妹	105	8.2
息子	414	32.1
娘	399	31.0
祖父	20	1.6
祖母	46	3.6
孫	35	2.7
嫁・娘婿	25	1.9
その他	35	2.7
一人暮らし	122	9.5

注：複数回答である。

4. 報告書の構成

第2章では、調査対象地域である東青県民局管内の仕事と生活実態をデータから概観した。仕事の状況においては、青森市は全国平均並みに雇用状況が良好であることが確認できた。しかし、健康寿命において重要な要因と考えられている高齢者の就業状況においては、正規雇用者の割合が低く全国と比較して就業状況が劣悪であるといえる。高齢者層に多様な働く場を提供することが重要な課題であると思われる。所得においては、正規雇用者の年収が非正規雇用者の2倍以上となっており、雇用形態間の所得格差が大きいことが明らかになった。また、青森市と周辺地域との就業状況の差が大きく、広域生活圏を実現するために、都市部と周辺地域とのバランスの取れた成長を目指すべきであると思われる。

第3章では、移動パターン別に仕事と生活実態を比較分析した。第一に注目されるのは、UJIターン者の割合である。Uターン者が29.8%、Jターン者2.8%、Iターン者8.9%で全体の4割弱に上っているという点である。また、県内の他地域からの流入者も含めるとこの地域の全人口の約6割が他の地域への居住経験をもっていることがわかる。このことから東青地域の人口の流動性が高いことが確認できる。これは、執筆者たちが行った中南津軽地域を大きく上回る数値で、県都である青森市を有している東青地域の大きな特徴といえる。UJIターン者の特徴としては、定住者より高学歴者の割合が高いということがいえる。ただ、就業状況や所得においてはUJターン者と定住者間で統計的に有意な差は見られなかった。他方、所得においては、Jターン者を除くすべての移動者に純粋な賃金プレミアムがあることが確認できた。このことは、この地域内の若者が一時的に地域外に流出することの経済的な合理性を与えるもので、今後より詳細な検討が必要であると思われる。

第4章では、UJIターン者に分析対象を絞って、移動の動機ときっかけについて分析を行った。最初に注目したのは移動の時期であった。中南津軽地域とは異なり、景気動向を示す東京の有効求人倍率とUJIターンとは正の強い相関が見られた。これは青森市が全国規模で展開する企業の支社・支店・地域子会社が集中する支店経済都市としての役割を果たしていることの現われであると思われる。

また、UJIターンの主な理由としては、「実家に戻ったから」などの家族関係の理由と答えた人の割合が高く、次に「仕事場・通学先が近いから」などの仕事関連の理由となっていることが興味深い。一方、UJIターンの決め手となった直接のきっかけは、「転勤や配置転換」や「仕事を自分から辞めた」などの仕事関連であることが分かった。また、UJIターンを可能にした条件としては、Uターン者は「実家に住むことが出来た」をあげているのに対し、Iターン、県内の他の地域からの流入者は「勤務先に、支店や支部があった」を挙げており、出身地であるか否かによって移動の条件が異なっていることが良くわかる。本章から、UJIターン希望者の属性に応じたきめ細かな支援政策が求められていることが良くわかる。注目されるのは、就業先が決まらないまま移動したものが4割に上っている点である。UJIターンの促進策などにおいては、働く場作りが何よりも重要であ

ると議論される場合が多いが、移動しているものにとっては移動決定の最重要要因にはなっていないことがデータから分かる。

第5章では、東青地域住民の社会関係について分析した。特に焦点となるのは、中南津軽地域での調査と同様、地域への流入者の社会的統合である。東青津軽地域の中核都市である青森市の都市度が大きいと、青森市定住者の社会関係が量的に乏しく、地域的な活動も少ないなど、中南津軽地域とは異なる様相もあったが、全体としては、地域外からの流入者が、近隣社会にサポート源となる社会関係を確保できていないことが明らかとなった。ただし、地域活動そのものの時間は、青森市定住者よりも流入者のほうが多い傾向にある。中南津軽地域よりも、流入者を社会的に統合する努力が必要とされていると考えられる。

第6章では、男性と女性で地域移動の経験にどのような特徴があるのかについて分析を行った。まず現在の生活状況について、女性の移動パターンで際立った特徴がみられるのはIターン者であり、正規雇用の比率は高くないが高学歴で専門・技術職についていて、生活の満足度も高い。そのやや逆に近い傾向を示すのが女性のJターン者であった。次に、UJIターン者の移動経験について、引っ越す以前の青森県で生活することへの意識は、女性は男性に比べて青森で生活したいと思っていなかった人が多い。その理由は、男女に関わらず仕事への懸念が高かった。逆に青森で生活する希望を持っていた人は、親の近くにいることの安心を上げるものが男女ともに圧倒的に多かったが、加えて男性は家の継承の志向が強くみられ、女性は友人・恋人・親、子どもなどの人間関係を考慮した志向が強かった。最後に、UJIターンの理由や条件について、男女に関わらず圧倒的に実家の影響が大きいと、加えて男性は自分の仕事の都合の条件を、女性は夫や家族の条件をあげる傾向が強かった。

第7章では、夫婦の出生順位に着目し、夫婦の出生順位とUJIターン地域移動との関係を明らかにした。第1に、夫婦ともに長男・長女の場合、2~30代の約3割は妻の親と同居しているが、約7割の女性は自分が長女であっても夫の親と同居していることが確認できた。夫婦ともに長男・長女の場合には、夫の出生順位が優先されると推察される。第2に、夫婦の出生順位と年齢階層別にみる青森県内に引っ越してくることを可能にした条件をみると、夫婦ともに長男・長女の場合、年齢階層に関わらず「実家に住むことができた」ことをあげた人が最も多く、男女でも共通している結果であった。他方、夫婦ともに長男・長女でない2~30代の女性の16.7%が実家から支援があったことを条件としてあげていて、夫婦の出生順位は、世代間支援において支援する側、支援される側という方向を決定する要因として作用していることが伺える。第3に、夫婦ともに長男・長女である場合、2~30代の男性では「家業を継ぐため」という回答も12.5%であり、また、夫婦ともに長男・長女である場合の2~30代の女性は、「親の近くにいたほうが安心だから」という回答が71.4%を占めていることが分かった。長男はお家を継承するという意識があるとみられるが、長女は親との情緒的関係を重視している様子が伺える。最後に、2~30代で「青森でやりたい仕事があった」と回答した男性は12.5%、女性は19.1%であることに注目したい。生活の安定のためにもっとも重要な要因として働く場が必要であるが、さらに、やりがいがある仕事があったと

の回答は今後のU J I ターン促進政策を考える上でポイントになると考える。

第 8 章では、地域移動が東西津軽地域のさまざまな学歴層の住民について、地域移動と労働環境との関係について注目して分析を行った。予想とは反対に、移動後、労働形態や収入が悪化するの、高学歴層ではなく低学歴層である。また、仕事に関する満足度についても、高学歴層は「ほぼ満足している」「満足している」の割合が全体的に多かったのに対し、低学歴層では「あまり満足していない」や「満足していない」と回答する割合が多くなっている。満足度が高い者は、移動を理由が家族における理由よりは仕事の理由によるものが多く、この傾向は高学歴層ほど明確である。今後、同県他地域と比較し、分析することで、青森県のU J I ターン者の現状と特徴を理解し、U J I ターン移住を促進するための教育補助政策や仕事を決定するタイミングによる支援策など、政策検討を促すことができるのではないかと考えられる。

【参考文献】

玄田有史・大井方子・篠崎武久（2005）「地域別に見た労働市場－労働移動と賃金格差の視点から」『経済社会の構造変化と労働市場に関する調査研究報告書』、雇用能力開発機構・統計研究会。

日本創成会議人口減少問題検討分科会（2014）「ストップ少子化・地方元気戦略」、
<http://www.policycouncil.jp/pdf/prop03/prop03.pdf>

樋口美雄（1991）『日本経済と就業行動』東洋経済新報社

第2章 東青地域住民の仕事と生活実態

李 永 俊

1. はじめに

本章では、東青地域住民の仕事と生活実態について述べる。地方の小地域において、その就業状況や生活実態を統計データから知ることは困難である。その理由は、国が行う調査の多くが地域ブロック単位（東北や関東など）の集計に留まり、地方の小地域についてのデータが存在しないからである。

国が行っている大規模かつ詳細な調査として、国勢調査や就業構造基本調査があるが、5年に一度行われるということもあり、きめ細かく住民の仕事と生活実態を知るには不十分となっている。このような意味からも、今回の調査は東青地域の住民生活を知る上で貴重なデータである。

2. 仕事の状況

(1) 全体の状況

最初に、サンプル全体の仕事の状況を概観しよう。調査対象は20～70歳の者であるが、住民の仕事と生活実態を知るために、在学中の15名をここでの分析対象から取り除いた。雇用形態を(1)会社役員、(2)正規の職員・従業員、(3)パート・アルバイト、(4)派遣社員、(5)契約社員、(6)家業の手伝い、(7)自営業または会社経営、(8)その他、(9)無業者、の9つに分類することにする。サンプル全体で見た就業状況は表1の通りである。

表 1 就業状況の概観（全体）

就業形態	度数(人数)	構成比(%)	構成比(就調)
会社役員	18	1.4	3.6
正規の職員・従業員	562	44.8	39.6
パート・アルバイト	210	16.7	15.6
派遣社員	10	0.8	1.4
契約社員	84	6.7	3.5
家業の手伝い	18	1.4	1.2
自営業または会社経営	83	6.6	5.5
その他	19	1.5	2.8
無業者	251	20.0	26.8
計	1,255	100.0	100.0

有業者に注目すると、正規の職員・従業員が最も多く、全体の 44.8%を占めている。続いて、パート・アルバイトが 16.7%、契約社員が 6.7%、自営業または会社経営が 6.6%、会社役員が 1.4%、派遣社員が 0.8%という順になっている。無業者は全体の 20.0%を占めている。

全国調査である就業構造基本調査（平成 24 年＝2012 年）から、今回の調査とほぼ同様に 20 歳以上 70 歳未満にサンプルを絞って、就業状態を見たものを図表 1 の右端に掲示した。調査時点の違いに留意しつつ、この全国平均の値と比較して分かることは、自営業または会社経営（5.5%）もパート・アルバイト（15.6%）も比率的に大きく変わらないということである。

逆に、比率に違いが見られるのは正規の職員・従業員で、東青地域は全国平均より 5.2 ポイントも高かった。また、東青地域の無業者の割合は全国平均よりも 6.3 ポイント低いことが分かる。青森市は県内の他地域とは異なり、全国と比較しても良好な雇用状況にあることがわかる。

今回の調査では、分析対象として年齢層が高い者や有配偶の女性が多く含まれている。そこで、一般的に労働力として期待されている層に注目してみよう。年齢を一般的な定年年齢である 60 歳以下に設定し、有配偶の女性を除いて就業状況を概観する（表 2）。

表 2 就業状況の概観（60歳以下、有配偶女性を除く）

就業形態	度数(人数)	構成比(%)	有業者比率(%)	有業者比(就調)
会社役員	16	2.2	2.5	4.2
正規の職員・従業員	433	59.3	67.3	70.8
パート・アルバイト	65	8.9	10.1	9.9
派遣社員	7	1.0	1.1	2.0
契約社員	58	8.0	9.0	4.3
家業の手伝い	10	1.4	1.6	0.5
自営業または会社経営	54	7.4	8.4	6.2
その他	11	1.5		
無業者	76	10.4		<13.5>
計	730	100.0		

（注）右端の値は就業構造基本調査（平成 24 年）に基づく。カッコ内の値は、20 歳以上 60 歳未満で有配偶女性を除いた者に対する無業者の割合で、それ以外は有業者に対する各雇用形態の者の割合である。

分析対象を 60 歳以下で有配偶女性を除く形で絞ると、東青地域における無業者の割合は 10.4%となった。ほぼ同様の条件（20 歳以上 60 歳未満で有配偶女性を除く）で、就業構造基本調査（平成 24 年）の全国平均（13.5%）と比較すると、無業者の割合は 3.1 ポイント低いことになる。この結果は予想を上回るものである。その理由については次のようなものが考えられる。

第 1 に、比較時点に差があることが挙げられる。ここ最近では、アベノミクスと呼ばれる経済政策が功を奏して、全国的な景気回復が見られている。比較時点に約 2 年の差があり、不況時である平成 24 年の全国調査と比較することに限界がある。また、その 2 年間に東青地域においても景気回復の影響が見られたのかもしれない。第 2 に、先程のサンプル全体の概観でも見られたように、東青地域では無業率は低く、積極的に就業しなければならない理由があることも考えられる。

次に、有業者に注目して特徴を確認していこう。正規の職員・従業員の割合は 67.3%で、有業者の約 3 分の 2 を占めている。全国平均（70.8%）と比較すると 3.5 ポイント低い値となっているが、本県の他地域とは異なり、ほぼ全国平均水準に達しているといえる。パート・アルバイトの割合は 10.1%で、全国平均（9.9%）よりもやや高い。比率に違いが見られるのは自営業または会社経営で、東青地域は全国平均より少し高かった。契約社員の割合も高く、東青地域は全国平均より 4.7 ポイント高かった。

（2）高齢者の就業状況

続いて、高齢者の就業状況を確認してみよう。分析対象については、有配偶女性を除いた上で、60 歳以上 70 歳未満の者に限定し、高齢者の就業状況をまとめたものが表 3 である。

表 3 高齢者の就業状況

就業形態	度数(人数)	構成比(%)
会社役員	1	2.2
正規の職員・従業員	6	13.0
パート・アルバイト	7	15.2
派遣社員	1	2.2
契約社員	5	10.9
家業の手伝い	1	2.2
自営業または会社経営	9	19.6
その他	0	0.0
無業者	16	34.8
計	46	100.0

60歳以上70歳未満で有配偶女性を除いた者に限定すると、無業者の割合は34.8%で、3割強の高齢者が仕事を持っていないことになる。ほぼ同様の条件(60歳以上70歳未満で有配偶女性を除く)で、就業構造基本調査(平成24年)の結果と比較すると、全国平均(41.5%)で、全国平均より5.2ポイント低くなっている。

ただし、就業者のほとんどは、自営業または会社経営(19.6%)、パート・アルバイト(15.2%)で、全国平均と比較すると高齢者を取り巻く東青地域の雇用環境は劣悪な状況にあると思われる。高齢者の就業は高齢者が健康で有益な老後を過ごすために重要な要素となりうる。高齢者の就業環境の整備が求められる。

(3) 有配偶女性の就業状況

有配偶女性に注目して就業状況を見てみよう。分析対象を60歳以下の有配偶女性とする。有配偶女性の就業状況をまとめたものが表4である。

表 4 有配偶女性の就業状況

就業形態	度数(人数)	構成比(%)	有業者比率(%)	有業者比(就調)
正規の職員・従業員	128	26.9	40.5	34.9
パート・アルバイト	136	28.6	43.0	45.7
派遣社員	3	0.6	1.0	2.3
契約社員	22	4.6	7.0	4.3
家業の手伝い	7	1.5	2.2	2.7
自営業または会社経営	19	4.0	6.0	3.8
その他	8	1.7		3.6
無業者	152	31.9		<35.6>
計	475	100.0		

(注) 右端の値は就業構造基本調査(平成24年)に基づく。カッコ内の値は、20歳以上60歳未満の有配偶女性に対する無業者の割合で、それ以外は20歳以上60歳未満の未婚ではない有業者に対する各雇用形態の者の割合である。

有配偶女性全体(60歳以下)に占める無業者の割合は約3割(31.9%)となっている。全国調査(就業構造基本調査)では、有配偶女性(20歳以上60歳未満)の無業者割合は35.6%であることから、全国平均と比べると無業者の割合は低いことが分かる。

有業者に注目して就業形態を見てみると、有配偶女性全体(60歳以下)の有業者のうち、正規の職員・従業員は40.5%、パート・アルバイトは43.0%であった。全国調査では、未婚ではない女性有業者(20歳以上60歳未満)のうち、正規の職員・従業員は34.9%、パート・アルバイトは45.7%である。この地域の既婚女性の正規の職員・従業員の割合は全国平均よりも5.6ポイントも高くなっていることがわかる。以上から東青地域の既婚女性を取り巻く就業環境は全国平均と比較するとやや良好であると評価できる。

3. 所得からみる生活実態

就業形態別の年間所得(年収)を通して生活実態をみる。所得については、平均値のみで所得分布の全体像を捉えることは困難である。なぜなら、分布が低所得層に偏っている、あるいは高所得者が少数存在するだけで、平均値が上下してしまうからである。そのため、年収の低い順に並べたときにちょうど中央(50%点)に位置する中央値と、低い順に並べたときの百分位点(%点)について、5、10、25、75、90、95%の各点を確認する。

就業形態を3区分で表した上で、年収にどのような差があるのか見ることにする。ここで、就業形態の3区分は、(1)正規雇用者(9区分における1および2)、(2)非正規雇用者(9区分における3,4,5,8)、(3)自営業・家族従業者(9区分における6および7)、の3つとする。

表5は、正規雇用者(以下、正規)、自営業・家族従業者(自営業)、非正規雇用者(非正規)の所得分布を比較したものである。平均値で見ると、正規雇用者が391.5万円で最も高

く、次は自営業・家族従業員が 326.0 万円、最も低いのは非正規雇用者が 141.6 万円となっている。正規雇用者と自営業・家族従業員との差が 60 万円以上とやや差があるのに対し、正規雇用者と非正規雇用者との差は約 250 万円と雇用形態によって大きな格差があることがわかる。

分布の散らばりを表す標準偏差で見ると、自営業・家族従業者 (291.0 万円)、正規雇用者 (218.3 万円)、非正規雇用者 (90.4 万円) の順で大きい。自営業・家族従業者では事業のリスクもリターンも大きいことから、平均値の散らばりも大きくなることが確認できる。ただし、標本数が小さいことも標準偏差を押し上げる要因になる。一方、非正規雇用者では平均値は低く、散らばりも小さいことが分かる。

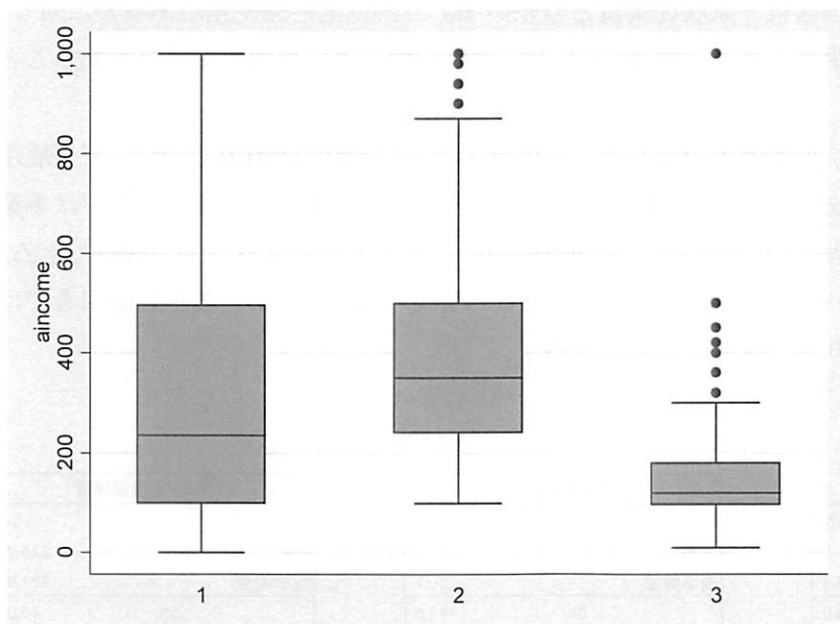
表 5 就業形態と年収

正規雇用者		非正規雇用者		自営業・家族従業員	
N	584	N	326	N	94
平均	391.5	平均	142.5	平均	326.0
標準偏差	218.5	標準偏差	90.7	標準偏差	291.0
5%	120.0	5%	54.0	5%	40.0
10%	168.0	10%	70.0	10%	70.0
25%	240.0	25%	96.0	25%	99.0
50%	350.0	50%	120.0	50%	240.0
75%	500.0	75%	180.0	75%	500.0
90%	660.0	90%	240.0	90%	700.0
95%	760.0	95%	300.0	95%	1000.0

(注) 単位は万円である。

分布の特性を示す中央値 (50%点) で比較すると、高い順に正規、自営業、非正規となる。上位 10%点 (90%点) で比較すると、自営業と正規はあまり変わらないが、非正規は大きく下回り、その差は約 400 万円を越えている。逆に下位 10%点 (10%点) で見ると、自営業と非正規は差が見られないが、正規はそれらよりも約 100 万円高くなる。

図1 就業形態と年収（グラフ）



(注) 1 自営業・家族従業者、2 正規雇用者、3 非正規雇用者、

図1において、太い帯の両端はそれぞれ25%点と75%点で、その中央にある線は中央値(50%点)である。細い線で示された上限と下限は分布の幅を見る目安である。それぞれ75%点と25%点から四分位レンジ(75%点と25%点の差)の1.5倍離れた値に最も近い観測値で定義される。黒い点は外れ値を示している。この図を見れば、正規と非正規の所得水準の極端な違い、自営業の所得の大きな散らばりなどがよく分かる。

4. 就業形態と性別からみる生活実態

次に、就業形態別および男女別に、年収と週間労働時間を見ることにしよう。

(1) 正規雇用者

男女別正規雇用者の年収と週間労働時間について、詳しい値で見たものが表6、図示したものが図2である。正規雇用者の年収について、平均値は男性444.2万円、女性316.5万円であった。中央値(50%点)で見ると、男性400万円、女性275万円で、いずれで見ても男女間の所得格差は約100万円以上であった。年収の標準偏差は男性の方が大きく、散らばりがより大きいことを示している。

正規雇用者の週間労働時間について、平均値は男性50.2時間、女性44.7時間であった。

中央値（50%点）で見ると、男性 48 時間、女性 40 時間である。男女間の労働時間の格差は週 3～5 時間で、散らばりについても男性の方が大きいことが分かった。

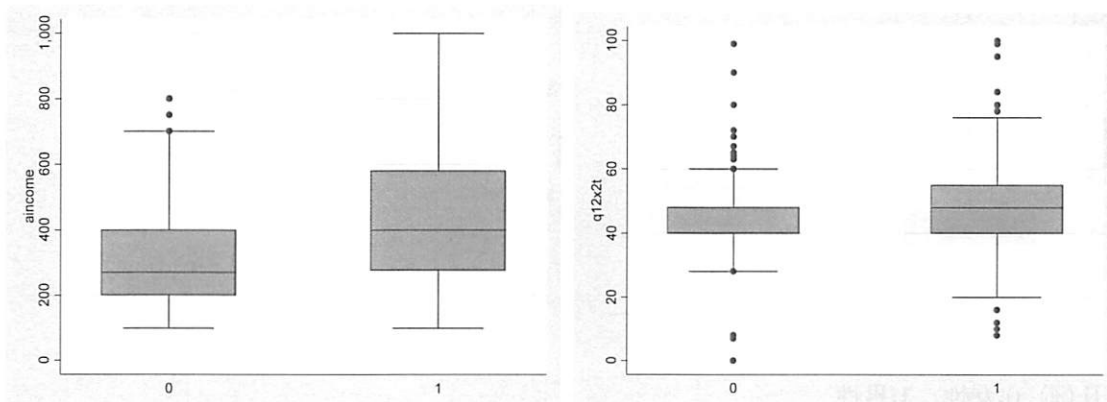
表 6 男女別正規雇用者の年収と週間労働時間

年収	(単位:万円)		週間労働時間	(単位:時間)	
	正規雇用者			正規雇用者	
	男性	女性	男性	女性	
N	343	241	N	343	241
平均	444.2	316.8	平均	50.2	44.7
標準偏差	222.3	189.5	標準偏差	13.7	14.1
	5%	156.0	5%	39.0	32.0
	10%	204.0	10%	40.0	35.0
	25%	280.0	25%	40.0	40.0
	50%	400.0	50%	48.0	40.0
	75%	600.0	75%	55.0	48.0
	90%	700.0	90%	77.0	56.0
	95%	870.0	95%	78.0	67.0

図 2 男女別正規雇用者の年収と週間労働時間（グラフ）

①年収

②週間労働時間



(凡例) 0:女性、1:男性

(2) 非正規雇用者

男女別非正規雇用者の年収と週間労働時間について、詳しい値で見たものが表 7、図示したものが図 3 である。非正規雇用者の年収について、平均値は男性 205.9 万円、女性 126.4 万円であった。中央値（50%点）で見ると男性 180 万円、女性 110 万円で、中央値で見た男女間の所得格差は 70 万円であった。年収の標準偏差は男性の方が大きかった。

非正規雇用者の週間労働時間について、平均値は男性 43.4 時間、女性 32.1 時間であった。中央値（50%点）で見ると、男性 40 時間、女性 30 時間である。非正規雇用者における労働時間の男女間格差は週 10 時間以上の開きがある一方で、散らばりについては女性の方が大きいことが分かった。男性非正規雇用者の労働時間では約 8 時間、年収では約 250

万円も異なり、雇用形態によって大きな格差があることが確認できた。

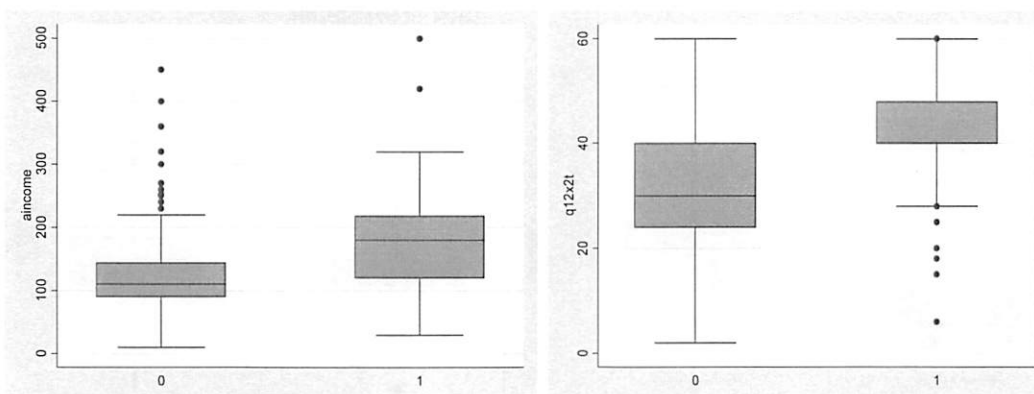
表 7 男女別非正規雇用の年収と週間労働時間

年収	(単位:万円)		週間労働時間	(単位:時間)	
	非正規雇用者			非正規雇用者	
	男性	女性		男性	女性
N	66	259	N	66	259
平均	205.9	126.4	平均	43.4	32.1
標準偏差	138.3	65.2	標準偏差	12.6	14.0
	5%	70.0	5%	25.0	12.0
	10%	99.0	10%	30.0	18.0
	25%	120.0	25%	40.0	24.0
	50%	180.0	50%	40.0	30.0
	75%	230.0	75%	48.0	40.0
	90%	300.0	90%	54.0	45.0
	95%	500.0	95%	60.0	50.0

図 3 男女別非正規雇用の年収と週間労働時間 (グラフ)

①年収

②週間労働時間



(凡例) 0:女性、1:男性

(3) 自営業・家族従業員

男女別自営業・家族従業員の年収と週間労働時間について、詳しい値を見たものが表 8、図示したものが図 4 である。自営業・家族従業員の年収について、平均値は男性 425.4 万円、女性 191.9 万円であった。中央値 (50%点) で見ると、男性 350 万円、女性 114 万円で、いずれを見ても男女間の所得格差は約 150 万円もあり、大きな格差が見られる。ただし、年収の標準偏差は男性の方が大きいことが分かる。

自営業・家族従業員の週間労働時間について、平均値は男性 49.5 時間、女性 42.3 時間であった。中央値 (50%点) で見ると、男性 48 時間、女性 40 時間である。中央値で見た男女間の労働時間の格差は週 8 時間である。散らばりについては女性の方が大きいことが分かった。自営業・家族従業員については、年収において男女間に大きな格差があることがわ

かる。

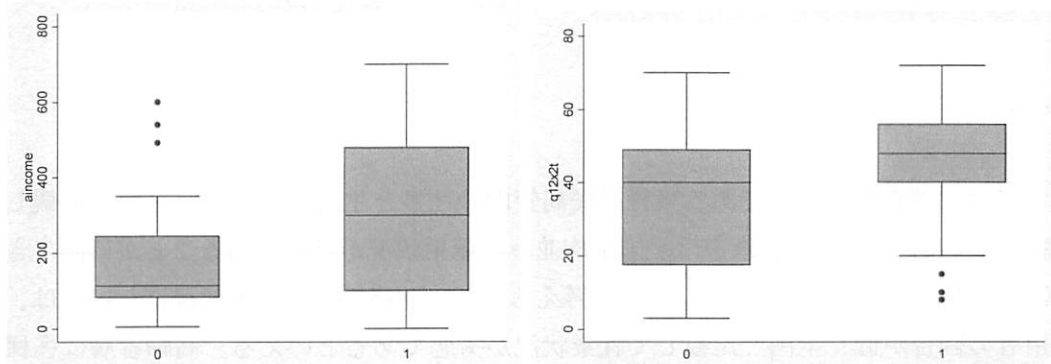
表 8 男女別自営業・家族従業員の年収と週間労働時間

年収	(単位:万円)		週間労働時間	(単位:時間)	
	自営業・家族従業員			自営業・家族従業員	
	男性	女性		男性	女性
N	54	40	N	54	40
平均	425.4	191.9	平均	49.5	42.3
標準偏差	319.7	175.9	標準偏差	20.1	26.1
	5%	99.0	5%	10.0	5.0
	10%	99.0	10%	20.0	9.0
	25%	120.0	25%	40.0	22.5
	50%	350.0	50%	48.0	40.0
	75%	600.0	75%	60.0	56.0
	90%	960.0	90%	72.0	80.0
	95%	1000.0	95%	99.0	99.0

図 4 男女別自営・家族従業員の年収と週間労働時間 (グラフ)

①年収

②週間労働時間



(凡例) 0:男性、1:女性

5. 中核市部と周辺部との仕事と生活実態の差

ここでは、地域内の中核となっている青森市とその周辺部との差を仕事と生活実態面で概観する。東青地域は、県都である青森市と、平内町、今別町、蓬田村、外ヶ浜町の4町村からなる町村部で構成されている。

仕事と生活実態の差を見るため、就業状況を4区分で表した上で、その構成比に差が見られるか統計的に検証する。ここで、就業状況の4区分は、(1)自営業・家族従業員(9区分における6および7)、(2)正規雇用者(9区分における1および2)、(3)非正規雇用者(9区分における3,4,5,8)、(4)無業者(9区分における9)、の4つとする。

最初に、市部と町村部との差を見てみたい。表 9 から、市部と町村部では統計的な検証ではっきりとした差が確認できた。東青地域の唯一の市部である青森市は、正雇用者の割合が全国平均並みに高く、無業者の割合も比較的に少ないのに対し、町村部では正規雇用者の割合が低く、自営業者と無業者の割合が比較的に高いことが分かる。このことから、東青地域では、青森市の生活圏と町村部の生活圏が完全に分離されている二重生活圏になっていることが確認できる。広域生活圏を実現するために、都市部と周辺地域とのバランスの取れた成長を目指すべきであると思われる。

表 9 東青地域内の就業状況の比較

	自営業・家族従業員	正規雇用者	非正規雇用者	無業者	計
町村部	20	26	24	33	103
	19.4	25.2	23.3	32.0	100.0
都市部	74	558	302	218	1,152
	6.4	48.4	26.2	18.9	100.0
計	94	584	326	251	1,255
	7.5	46.5	26.0	20.0	100.0

注) Pearson $\chi^2(3) = 40.0669$ Pr = 0.000

6. 小括

この章では、調査対象地域である東青県民局管内の仕事と生活実態をデータから概観した。仕事の状況においては、青森市は全国平均並みに雇用状況が良好であることが確認できた。しかし、健康寿命において重要な要因と考えられている高齢者の就業状況においては、正規雇用者の割合が低く全国と比較して就業状況が劣悪であるといえる。高齢者層に多様な働く場を提供することが重要な課題であると思われる。所得においては、正規雇用者の年収が非正規雇用者の 2 倍以上となっており、雇用形態間の所得格差が大きいことが明らかになった。また、青森市と周辺地域との就業状況の差が大きく、広域生活圏を実現するために、都市部と周辺地域とのバランスの取れた成長を目指すべきであると思われる。

第3章 UJI ターン者の仕事と生活実態

李 永 俊

1. はじめに

本章では、移動パターン別に仕事や生活実態がどのように異なっているのかを明らかにする。人々が生活場所を選択して移動するには、さまざまな目的がある。両親や親戚と多くの時間を過ごしたいから、あるいは生まれ育った場所から離れたくないから、あるいはその地域の自然環境や暮らしの環境に魅せられてなど、さまざまな理由が考えられる。そのため、所得が下がっても、あるいは現在の職を失っても、移動を選択する場合がある。

しかし、従来の経済学では、移動に伴う便益がそのコストを上回っている場合、経済合理的観点から個人は移動を選択することと考える。つまり、

$(賃金(移動先) \times 就業確率(移動先)) - 移動コスト >$

$賃金(出身地) \times 就業確率(出身地)$

が成り立てば移動し、逆の場合は移動しないとされている。

上記の式から地方と都市の間の賃金格差や有効求人倍率の差が、地方の若者たちが都市部に移動する大きな要因となっていることが分かる。太田(2010)、樋口(1991)、勇上(2010)、李(2013)などの研究はデータを用いて上記のモデルを実証している。

しかし、UターンやJターン、Iターンについては、上記の経済モデルが成り立っているのかに関する実証的な研究はなされていない。そこで、本章では上記の経済モデルがUJIターンの選択において、有効に機能しているのかをデータを用いて明らかにしてみたい。

2. UJI ターンの定義

UJIターンは、主に大都市圏に居住している者が、地方に移住する地域間移動を指す。「Uターン」は出身地に戻る形態、「Jターン」は出身地の近くの地方都市に移住する形態、「Iターン」は出身地以外の地方へ移住する形態を指している。

そこで、移動のパターンによって次の9タイプに分類する(表1)。**①**青森市定住(青森市に住み続ける者)、**②**近郊定住(青森市近郊に住み続ける者。ただし、青森市近郊とは平内町、今別町、蓬田村、外ヶ浜町を指す)、**③**域内移動(青森市とその近郊との相互移動で、東青地域内の移動となる)、**④**青森市へのUターン(青森市から県外を経由して青森市へ)、**⑤**近郊へのUターン(近郊から県外を経由して近郊へ)、**⑥**青森市へのJターン(近郊から県外を経由して青森市へ)、**⑦**近郊へのJターン(青森市から県外を経由して近郊へ)、**⑧**I

ターン（県外から域内へ）、⑨県内からの流入（県内かつ域外から域内へ）、の9つである。

また、移動時の年齢が14歳未満の者については、自発的な移動とみなされないことから、④は①として、⑤は②として、⑥と⑦は③として分類することにした。

表1 UJI ターンの9タイプ分類

5タイプ分類		9タイプ分類		卒業地	現在地	県外経験	度数	構成比
1	定住者	1	青森市定住	青森市	青森市	なし	418	32.8
		2	近郊定住	近郊	近郊	なし	35	2.7
		3	域内移動	域内(=青森市+近郊)	域内	なし	50	3.9
2	Uターン者	4	青森市へのUターン	青森市	青森市	あり	346	27.1
		5	近郊へのUターン	近郊	近郊	あり	35	2.7
3	Jターン者	6	青森市へのJターン	近郊	青森市	あり	33	2.6
		7	近郊へのJターン	青森市	近郊	あり	2	0.2
4	Iターン者	8	Iターン	県外	域内		113	8.9
5	県内流入者	9	県内からの流入	県内(域外)	域内		244	19.1
							1276	100.0

(注) 卒業地とは卒業した中学校の所在地である。サンプル総数から出身地などについて無回答だった12名を分類から除いた。

表1から、青森市に定住する者は全体の32.8%、近郊に定住する者は同2.7%、東青地域内を移動した者は同3.9%であった。青森市へのUターン者は全体の27.1%、青森市近郊へのUターン者は同2.7%であることから、東青地域では定住者が約4割、Uターン者が約3割になっていることが分かる。青森市へのJターン者は全体の2.6%、青森市近郊へのJターン者は同0.2%である。そして、東青地域へのIターン者は全体の8.9%を占めている。県内からの流入者は全体の19.1%となっている。東青地域の最大の特徴は、県内他地域からの流入者と県外からのIターン者が全体の約3割を占めていることである。県全体の行政と全国規模で展開する企業の支社・支店、地域子会社が集中している県都を有している地域ならではの特徴がタイプ別の人口構成に現れている。

前章の分析で明らかにしたように、東青地域においては、市部と町村部の間に統計的に有意な就業状況の差が見られた。そのため、以下の分析では、青森市に在住する者と近郊に在住している者を分けて分析を行う。そして、①定住者、②Uターン者、③Jターン者、④Iターン者、⑤県内流入者の5つのタイプに再分類し、仕事と生活実態を明らかにする(表2)。

表2 UJI ターンの5タイプ分類

青森市			近郊		
5タイプ分類	度数	構成比	5タイプ分類	度数	構成比
定住者	452	38.4	定住者	51	51.0
Uターン者	346	29.4	Uターン者	35	35.0
Jターン者	33	2.8	Jターン者	2	2.0
Iターン者	109	9.3	Iターン者	4	4.0
県内流入者	236	20.1	県内流入者	8	8.0
計	1176	100.0	計	100	100.0

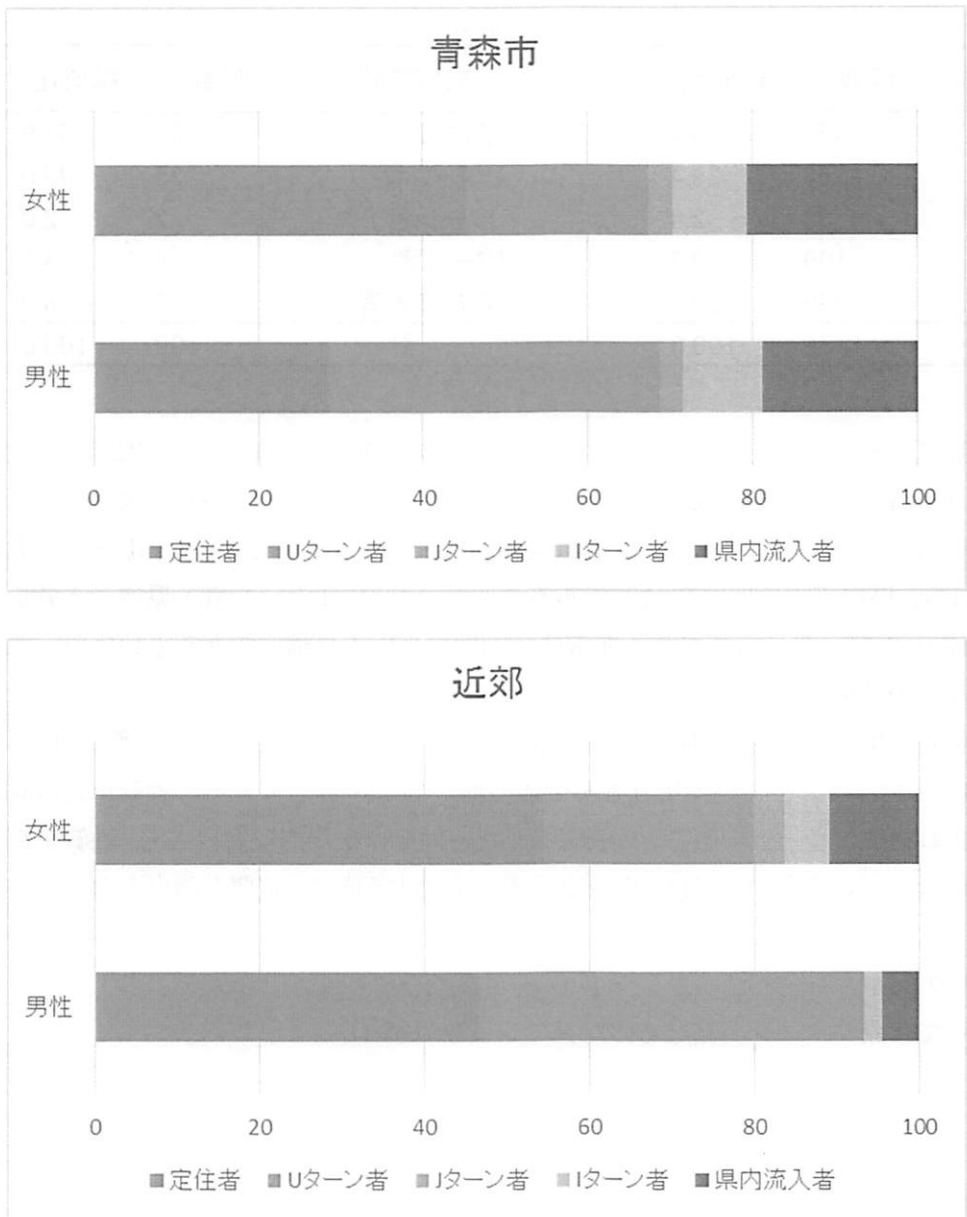
5タイプ分類によると、青森市においてもっとも多いのは域内移動者を含む定住者で、全体のほぼ半数（38.4%）である。域内へのUターン者は29.4%を占めており、大きなウェイトを占めていることが分かる。Jターン者は全体の2.8%であるのに対して、Iターン者の割合は同9.3%、県内流入者は同20.1%であることが分かる。Iターン者と県内流入者を合わせると全体の3割にのぼっており、非常に流動性の高い人口構成であるといえる。県都としての青森市の特徴が良く現れている。

一方、近郊地域ではサンプル数が限られているが、定住者が51.0%でもっとも多く、Uターン者が35.0%となっており、近郊出身者が全体の約9割にのぼっている。青森市とは真逆の硬直的な人口構成になっていることが確認できる。同じ県民局内においても、性質が真逆な人口構成になっているという点は、広域生活圏を検討する際に、重要な論点となりうる。

(1) 男女別の移動パターン

男女別によって移動パターンが異なるのか見てみよう（図1）。

図1 男女別の移動パターン



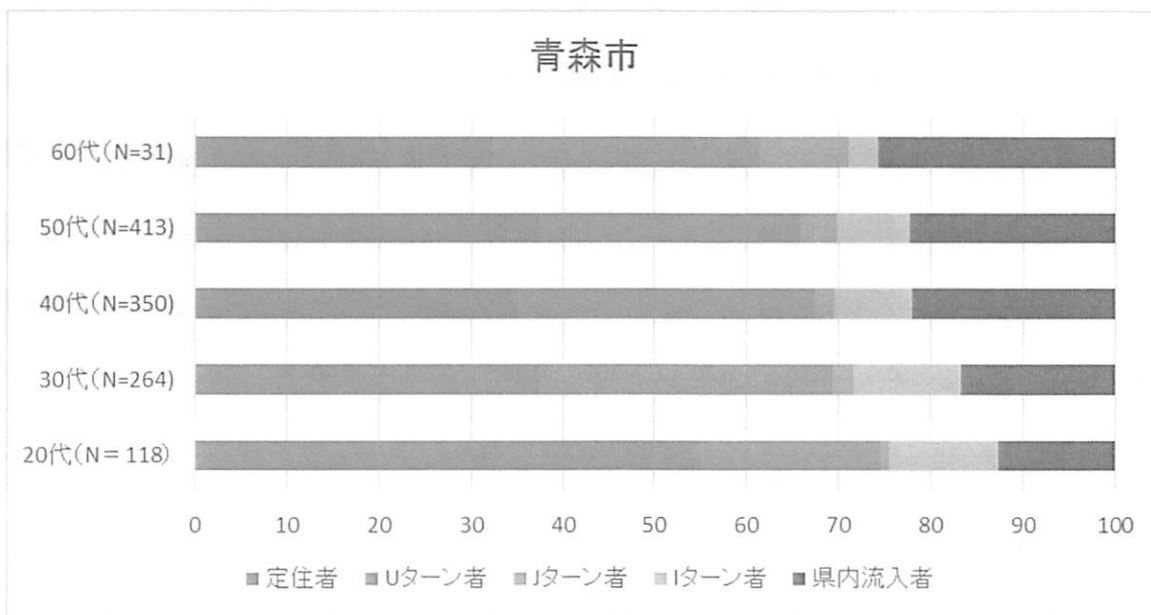
男女別の移動パターンを見ると、青森市においては統計的に有意な差が確認された ($\chi^2(4) = 51.9856, Pr = 0.000$) が、近郊においては統計的に有意な差が見られなかった。青森市のグラフからも確認が出来るように男女においては明確な差が見られる。青森市においては、男性では移動経験者の割合が高く、女性では定住者が多いことが分かる。男女間でJターン者、Iターン者、県内流入者の割合に大きな差は見られない。女性における県内流入者の割合がやや高くなっていることが注目される。

(2) 年齢階級別の移動パターン

20代から60代の年齢階級に分けて、移動パターンに違いが見られるのか確認してみよ

う（図 2）。以降の細目に関する分析においては、近郊地域はサンプル数が少ないため、青森市のみを分析対象とする。この年齢階級区分による移動パターンの違いについて、統計的に有意な差が確認できた($\chi^2(16) = 36.7551, Pr = 0.002$)。

図 2 年齢階級別の移動パターン



20代では定住者が多く、40代以上の層において県内流入者の割合が高くなっていることが図から分かる。特に60代において、県内流入者とJターン者が多いことが注目される。県都青森市の交通の利便性や医療、行政機能が集中していることなどの特徴が、県内他地域からの高齢層の流入を促進していると思われる。

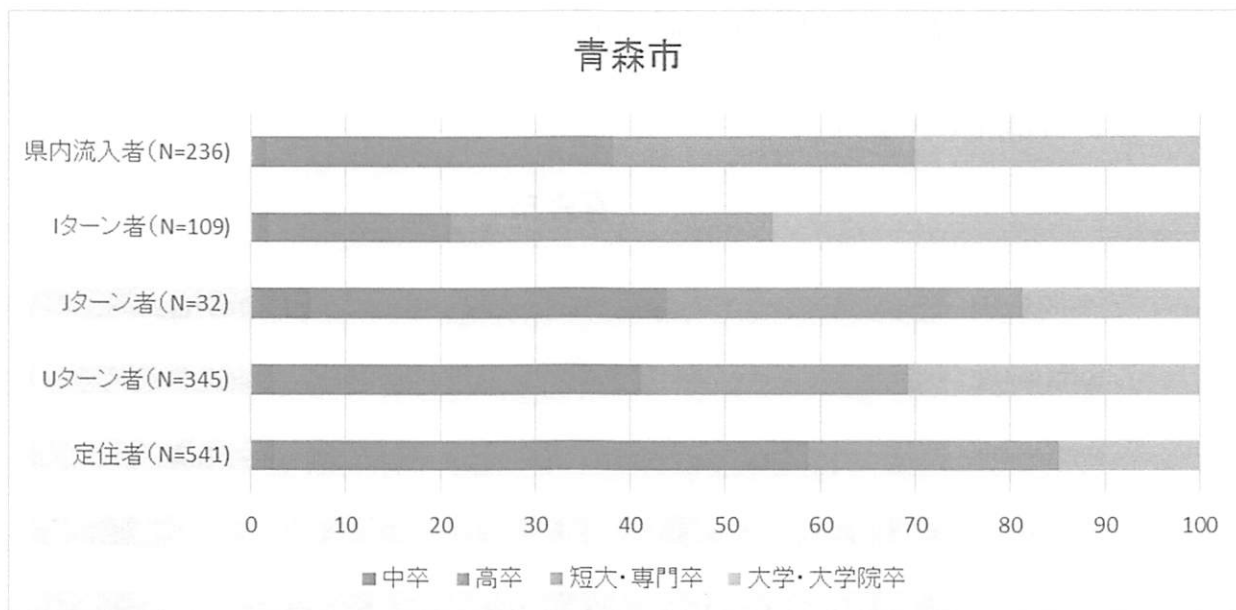
また、Iターン者においては、20代のIターン者の割合が高くなっているのは、青森市内の大学の存在によって県外からの進学者が多いことと、民間企業の支店が多いことがその理由として考えられる。

(3) 移動パターン別の学歴分布

学歴を中学校卒、高校卒、短大・専門学校卒、大学・大学院卒に4分類し、移動パターンによって学歴の分布が異なるのか見てみよう（図 3）。移動パターンによって、学歴の分布に有意な差が見られた($\chi^2(12) = 85.2870, Pr = 0.000$)。

特徴的なのは、Uターン者とIターン者、県内流入者において、高学歴者の割合が他のグループと比較して高くなっていることである。特にIターン者においてはその割合が高くなっている。

図3 移動パターン別の学歴分布



李 (2012) の研究において、高学歴の者ほど移動する傾向が観察されていたが、今回の調査によっても同様の結果が見られた。高学歴の者ほど様々な職業を選択できることから、より有利な条件で就業できることにより移動が活発になると考えられる。十分な地縁がないIターン者にとって、高い学歴は大きな競争力の源泉となっているようである。

3. 仕事と生活実態

ここでは、移動パターンによって5タイプに分けた場合、就業状況や生活実態にどのような差異が見られるのか、比較検討してみよう。以下の分析では、表2で示した5タイプを移動タイプと呼ぶことにする。

(1) 就業状況

移動タイプ別に就業状況がどのように異なっているのかを見てみよう（表 3）。

表 3 移動タイプ別の就業状況

5タイプ分類	自営業・家族従業員	正規雇用者	非正規雇用者	無業者	計
定住者	22.0	203	128	93	446
	4.9	45.5	28.7	20.9	100.0
Uターン者	32.0	170	82	58	342
	9.4	49.7	24.0	17.0	100.0
Jターン者	2.0	13	10	7	32
	6.3	40.6	31.3	21.9	100.0
Iターン者	6.0	55	30	17	108
	5.6	50.9	27.8	15.7	100.0
県内流入者	12	116	56	49	233
	5.2	49.8	24.0	21.0	100.0
計	74	557	306	224	1,161
	6.4	48.0	26.4	19.3	100.0

(注) 上段は度数、下段は構成比である。

タイプ別の就業状況においては、統計的に有意な差は見られない($\chi^2(12) = 13.6036$, $Pr = 0.327$)。このような結果から、就業については移動経験の有無ではなく、地域内の労働市場環境に左右されていることが分かる。Uターン者、Iターン者と県内流入者において、正規雇用者が若干高いように見えるが、統計的には差が認められない。

(2) 職種

移動タイプ別に見て、職種の分布に違いがあるのか確認してみよう。表 4 と図 4 から移動タイプによって、職種の分布に統計的な差異があることが分かった($\chi^2(44) = 73.8119$, $Pr = 0.003$)。表 4 を用いて詳細を確認できるが、全体的な様子を知るには図 4 のようなグラフが優れている。

表4 移動パターン別の職種分布

青森市													
	管理職	専門・技術職	事務職	販売職	営業職	サービス業	技能職	保安職	製造・生産職	農林水産業	運輸業	その他	計
定住者	23	70	76	34	14	72	17	7	31	11	10	13	378
	6.1	18.5	20.1	9.0	3.7	19.1	4.5	1.9	8.2	2.9	2.7	3.4	100.0
Uターン者	27	59	45	32	15	42	19	13	20	11	13	10	306
	8.8	19.3	14.7	10.5	4.9	13.7	6.2	4.3	6.5	3.6	4.3	3.3	100.0
Jターン者	0	10	4	3	1	6	0	1	1	0	0	1	27
	0.0	37.0	14.8	11.1	3.7	22.2	0.0	3.7	3.7	0.0	0.0	3.7	100.0
Iターン者	7	34	16	6	9	11	4	2	0	0	1	3	93
	7.5	36.6	17.2	6.5	9.7	11.8	4.3	2.2	0.0	0.0	1.1	3.2	100.0
県内流入者	19	40	47	11	9	18	9	9	9	6	2	6	185
	10.3	21.6	25.4	6.0	4.9	9.7	4.9	4.9	4.9	3.2	1.1	3.2	100.0
計	76	213	188	86	48	149	49	32	61	28	26	33	989
	7.7	21.5	19.0	8.7	4.9	15.1	5.0	3.2	6.2	2.8	2.6	3.3	100.0

(注) 上段は度数、下段は構成比である。

図4 移動タイプ別の職種分布 (グラフ)

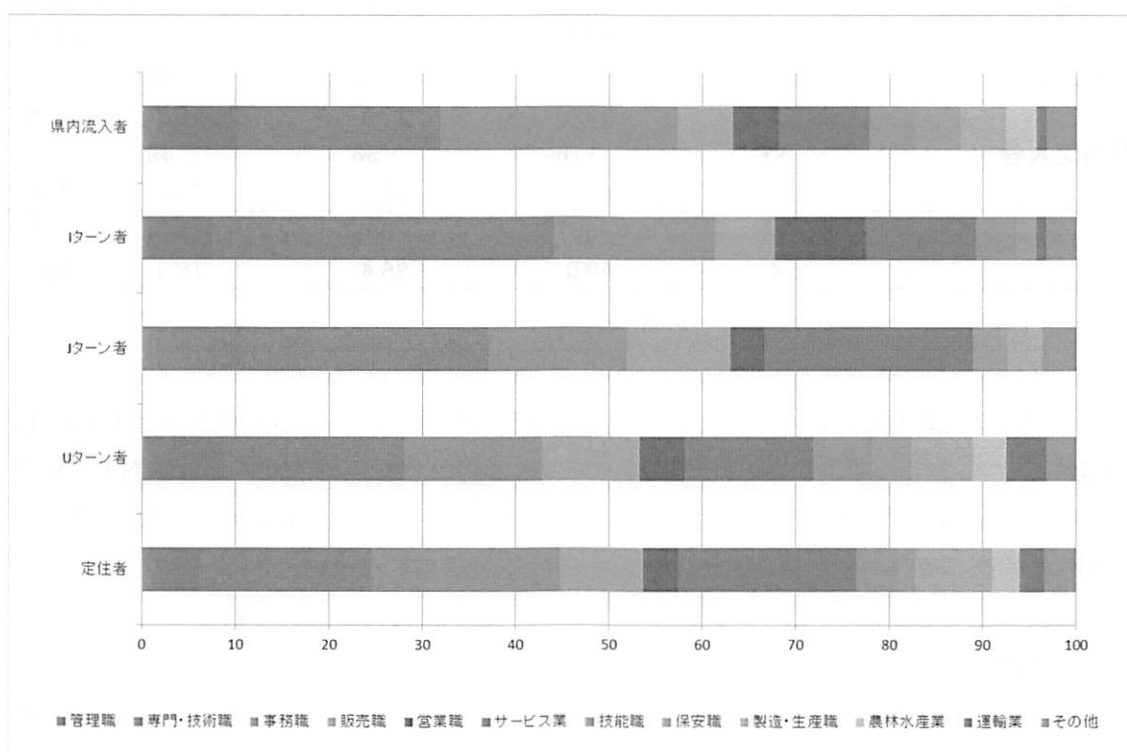


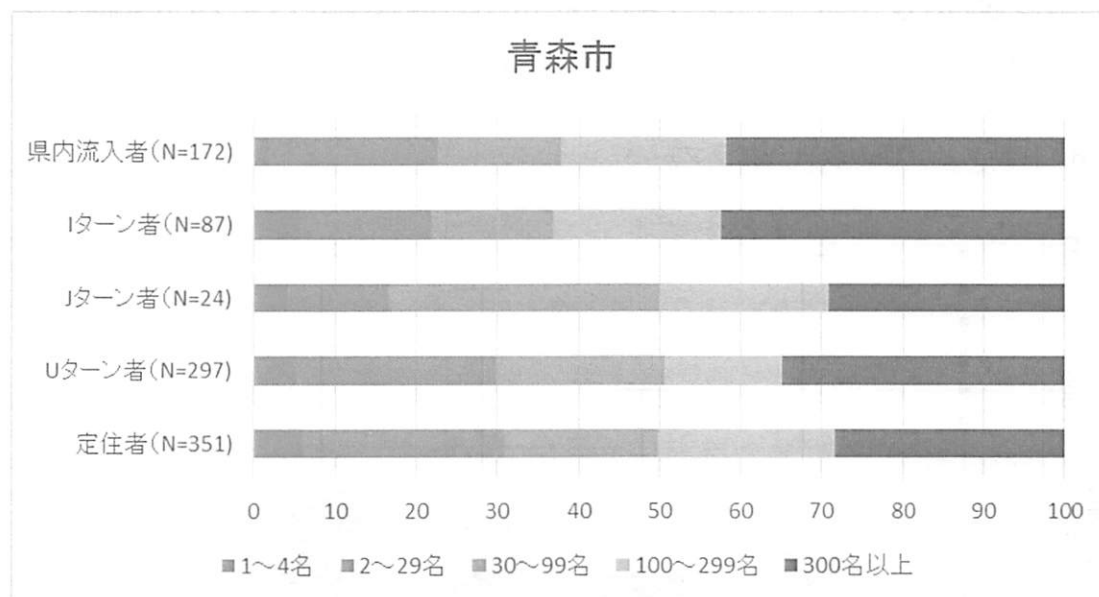
図4からJターン者とIターン者においては、専門・技術職が多く存在していることが注目される。李(2013)で指摘しているように、専門・技術職の場合は地域間の移動に伴う経済的な収益の差がほとんど見られず、技能を生かして比較的自由的な移動ができることがこの結果につながっているように思われる。

農林水産業関連の職種は定住者とUターン者、県内流入者のみにしか見られず、農林水産業を基幹産業としている本県において、東青地域はその割合が比較的少ない地域であることが分かる。

(3) 勤め先の企業規模

移動タイプ別に勤め先の企業規模に違いが見られるのか検討しよう。図 5 は移動タイプ別の勤め先の企業規模を示したものである。

図 5 移動タイプ別に見た勤め先の企業規模



移動タイプ別に見て、統計的に有意な差は5%の水準で認められる ($\chi^2(16)=26.3356, Pr=0.049$)。図から確認できるように、Iターン者と県内流入者において大企業で務めている者の割合が高く、定住者とUターン者において従業員数30名以下の企業で務めている者の割合が高くなっている。

(4) 収入

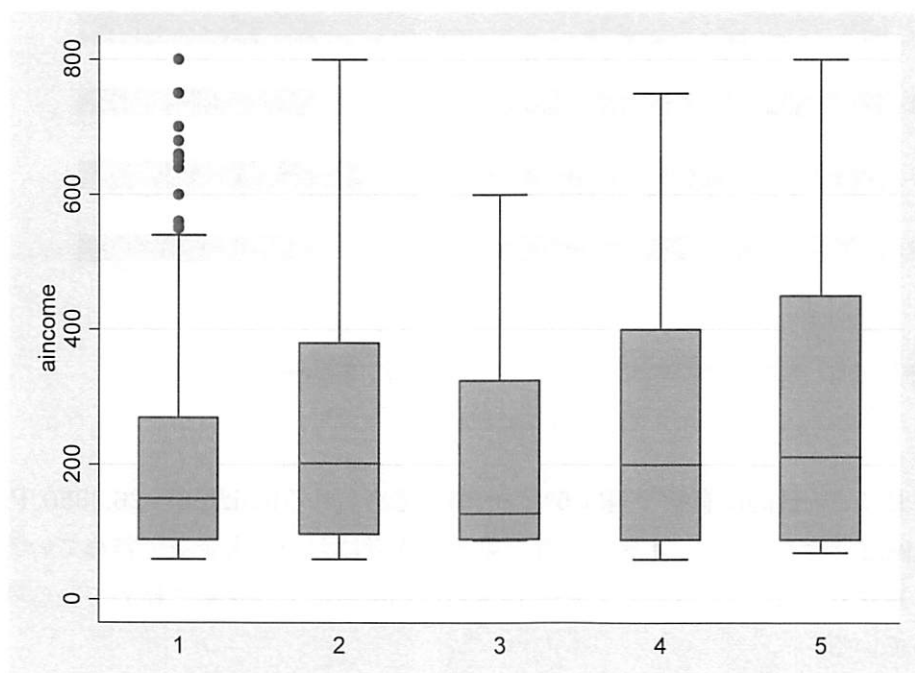
年間収入について、移動タイプ別に確認しよう (表 5、図 6)。平均値で見ると、高い方からIターン者、県内流入者、Uターン者、Jターン者、定住者の順である。中央値で見ると、高い方から県内流入者、Uターン者、Iターン者および定住者、Jターン者の順である。収入の散らばりを測る標準偏差を見ると、Iターン者が最も高く、定住者が最も低くなっている。

表 5 移動タイプ別の収入

青森市		(単位:万円)						
	N	平均値	中央値	下位10%点	下位25%点	上位25%点	上位10%点	標準偏差
定住者	503	213.0	150.0	88.0	88.0	270.0	450.0	169.6
Uターン者	381	284.7	204.0	88.0	96.0	400.0	600.0	245.3
Jターン者	35	249.4	135.0	88.0	88.0	400.0	600.0	231.4
Iターン者	113	300.4	200.0	84.0	88.0	430.0	600.0	260.4
県内流入者	244	293.3	220.0	88.0	88.0	487.5	600.0	229.3

定住者と U ターン者を比較すると、後者の方が平均値では 70 万円、中位値では 50 万円弱高い。下位ではあまり大きな差はないが、上位に行くほど大きな差となっている。I ターン者と県内流入者の所得は他の移動タイプと比較して平均所得が高くなっている。その大きな理由は、上位 25% 点以上の所得が他のタイプと比較して高くなっているためである。先に見たように、I ターン者や県内流入者の多くが専門・技術職で従事していることも影響していると思われる。一方で、I ターン者の下位 10% 点の所得は他のタイプよりも低いことから、よりハイリスク・ハイリターンとなっていることが分かる。

図 6 移動タイプ別の収入（グラフ）



(凡例) 1: 定住者, 2: U ターン者, 3: J ターン者, 4: I ターン者, 5: 県内流入者

(注) 年間収入 60 万円以上 800 万円以下の者に限定して図示している。

太い帯の両端はそれぞれ 25% 点と 75% 点で、その中央にある線は中央値 (50% 点) である。細い線で示された上限と下限は分布の幅を見る目安である。それぞれ 75% 点と 25% 点から四分位レンジ (75% 点と 25% 点の差) の 1.5 倍離れた値に最も近い観測値で定義される。黒い点は外れ値を示す。

(5) 労働時間

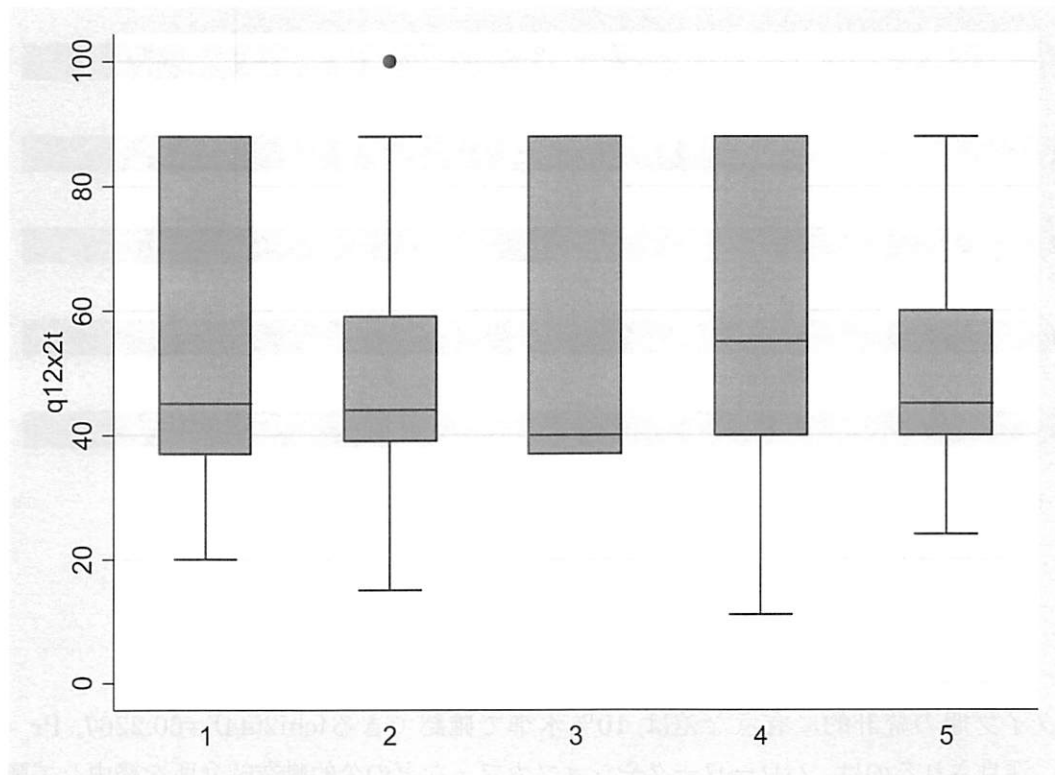
移動タイプ別に労働時間を見たものが表 6 である。

表 6 移動タイプ別の労働時間

青森市		(単位:時間)						
	N	平均値	中央値	下位10%点	下位25%点	上位25%点	上位10%点	標準偏差
定住者	452	52.2	44.0	25.0	39.0	71.0	88.0	24.0
Uターン者	346	52.5	48.0	29.0	40.0	70.0	88.0	22.5
Jターン者	33	52.1	45.0	26.0	40.0	65.0	88.0	22.9
Iターン者	109	50.6	47.0	25.0	40.0	60.0	88.0	22.5
県内流入者	236	53.1	45.0	29.0	40.0	75.0	88.0	23.2

労働時間について（図 7）、中央値は移動タイプ間でほとんど差が見られず、タイプ間の大きな違いは見当たらない。平均値で見ると、短い方から I ターン者、J ターン者、定住者、U ターン者、県内流入者の順となった。散らばりは下の図からわかるように、U ターン者と県内流入者の散らばりが小さく、定住者と J ターン者、I ターン者の散らばりは大きい。

図 7 移動タイプ別の労働時間（グラフ）



(凡例) 1: 定住者, 2: U ターン者, 3: J ターン者, 4: I ターン者, 5: 県内流入者

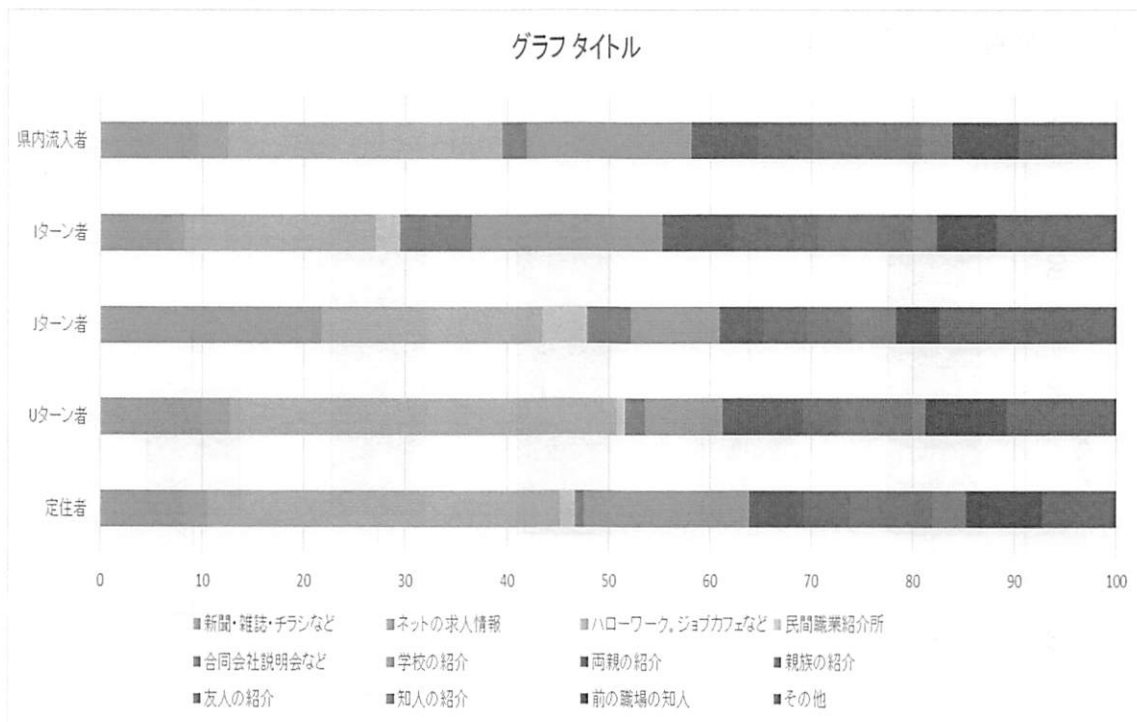
太い帯の両端はそれぞれ 25%点と 75%点で、その中央にある線は中央値（50%点）である。細い線で示された上限と下限は分布の幅を見る目安である。それぞれ 75%点と 25%点から四分位レンジ（75%点と 25%点の差）の 1.5 倍離れた値に最も近い観測値で定義される。黒い点は外れ値を示す。

Iターン者の平均労働時間が比較的短いように見えるが、これは非正規雇用においてIターン者の労働時間が他のタイプより短くなっていることを反映している。先程の収入の分析とあわせて考えると、Iターン者は収入で見ても労働時間で見ても散らばりが大きいことが分かる。定住者とUターン者は平均労働時間に大きな違いはないが、収入で見るとUターン者の方が大きいことが確認できる。

(6) 職探しの方法

最後に、移動タイプ別に見て、職探しの方法に違いが見られるのか検討しよう。移動タイプ別に職探しの方法を集計した結果が図 8 である。

図 8 職探しの方法



移動タイプ間の統計的に有意な差は 10%水準で確認できる ($\chi^2(44) = 60.2267$, $Pr = 0.052$)。注目されるのは、ハローワークやジョブカフェなどの公的職業紹介所を経由して職を探している割合が全てのタイプにおいて、最も大きいという点であるが、これは地方の大きな特徴となっている。公的職業紹介所に続いて、入職への大きな経路となっているのが、学校の紹介と友人の紹介である。ただし、Jターン者においては新聞・雑誌・チラシなどの割合が大きく、そのようなメディアも一定の役割を果たしていることが分かる。また、Uターン者と定住者においてハローワークやジョブカフェなどの割合が比較的高く、Iターン者と県内流入者において学校の紹介の割合が高いことが特徴として言える。また、すべてのグループにおいて両親や親戚などの親族のほか、友人、知人などの縁故による職業紹介も大き

な役割を果たしていることが良く分かる。

4. 賃金関数の推計

ここでは、賃金関数を推計して、移動が賃金に与える影響を明らかにする。ここで用いる賃金関数は次のようなものである。

被説明変数は、年収の対数をとったものを用いた。説明変数には、男子ダミー、年齢、年齢の二乗、高卒ダミー、短大・専門学校卒ダミー、大学・大学院卒ダミー、正規雇用者ダミー、非正規社員ダミー、管理職ダミー、専門・技術職ダミー、事務職ダミー、労働時間、Uターン者ダミー、Jターン者ダミー、Iターン者ダミー、県内流入者ダミーを用いた。

推定結果から男性ダミーは正で、年齢と年齢二乗については正と負で一般的な年功賃金の推定結果と一致している。教育については、学歴が高いほど、賃金が有意に高くなっており、人的資本理論と一致した結果となっている。また、就業形態には正規雇用者が正で有意、非正規雇用者が負で有意となっており、雇用形態によって賃金の大きな差が見られることがここからでも確認できる。

職種については、管理職ダミー、専門・技術職ダミー、事務職ダミーのすべてが正で有意となっている。このことは、学歴をコントロールしても、職種による賃金の差がみられることを意味しており、雇用形態や職種によって賃金が大きく異なっていることが分かる。また、労働時間については正で有意となっており、労働時間と賃金が正の相関関係にあることを確認できる。

最後に、移動タイプ別の違いについては、Jターン者ダミーのみが有意でなく、Uターン者ダミー、Iターン者ダミー、県内流入者ダミーが正で有意となっている。ここで、注意したいのは、比較対象となっているのが定住者であることだ。つまり、定住者と比較して、移動を経験しているものは、学歴や雇用形態、職種などをコントロールしても一定の賃金プレミアムがあるということである。このことは大変重要な意味を示唆している。定住者とUターン者は同じ地域内の出身であるにも関わらず、移動によって純粋な賃金の上昇が見られた。統計的に予測値を計算した結果、年収ベースで30万～50万円程度の差が見込まれることが分かった。

もちろん、上記の推計においてコントロールできていない個人属性の差、例えば大学の質的な差などが予測値の差に含まれているとは思われる。また、他地域で多くの経験を積んで移住していることへの評価はコントロールできていない。しかし、もしも上記のようなものをコントロールしたとしてもこのようなタイプ間の純粋な差が存在するならば、移動コストを考慮しても若者たちが本県を離れて一時的に流出することには経済的な合理性があると言わざるを得ない。

表7 賃金関数の推計結果

変数	係数	標準偏差
男性ダミー	0.0051	0.0050
年齢	0.0263 **	0.0115
年齢×年齢	-0.0002	0.0001
高卒ダミー	0.3083 ***	0.1049
短大・専門学校卒ダミー	0.2562 **	0.1077
大学・大学院卒ダミー	0.5186 ***	0.1091
正規雇用ダミー	0.3536 ***	0.0584
非正規雇用ダミー	-0.3807 ***	0.0630
管理職ダミー	0.4696 ***	0.0639
専門・技術職ダミー	0.2202 **	0.0456
事務職ダミー	0.1015 ***	0.0440
労働時間	0.0063 ***	0.0011
Uターン者ダミー	0.1119 ***	0.0394
Jターン者ダミー	0.0902	0.0994
Iターン者ダミー	0.1563 ***	0.0606
県内流入者ダミー	0.1650 ***	0.0453
サンプルサイズ	983	
自由度修正済決定係数	0.5047	

注:*は10%水準、**は5%水準、***は1%水準で有意であることを意味する。

5. 小括

この章では、移動パターン別に仕事と生活実態を比較分析した。第一に注目されるのは、UJI ターン者の割合で、U ターン者が 29.8%、J ターン者 2.8%、I ターン者 8.9%で全体の 4 割弱に上っているという点である。また、県内の他地域からの流入者も含めるとこの地域の全人口の約 6 割が他の地域への居住経験をもっており、このことから東青地域の人口の流動性が高いことが確認できる。これは、執筆者たちが行った中南津軽地域を大きく上回る数値で、県都である青森市を有している東青地域の大きな特徴といえる。UJI ターン者の特徴としては、定住者より高学歴者の割合が高いということがいえる。ただ、就業状況や所得においては UJ ターン者と定住者間で統計的に有意な差は見られなかった。他方、所得においては、J ターン者を除くすべての移動者に純粋な賃金プレミアムがあることが確認できた。このことは、この地域内の若者が一時的に地域外に流出することの経済的な合理性を与えるもので、今後より詳細な検討が必要であると思われる。

【参考文献】

- 太田聡一（2007）「労働市場の地域間格差と出身地による勤労所得への影響」樋口美雄・瀬古美喜編『日本の家計行動のダイナミズム[Ⅲ]』慶應義塾大学出版会。
- 勇上和史（2010）「賃金・雇用の地域間格差」樋口美雄編『労働市場と所得分配』慶應義塾大学出版会。
- 李永俊（2013）「地域間移動から若者が得る経済的な利益」石黒他『「東京」に出る若者たち－仕事・社会関係・地域間格差』ミネルヴァ書房。
- 樋口美雄（1991）『日本経済と就業行動』東洋経済新報社

第4章 UJI ターンの理由とそのきっかけ

李 永 俊

1. はじめに

本章では、UJI ターン者と県内の他地域からの流入者に分析対象を絞って、この地域に引越してきた理由とそのきっかけについて分析を行う。経済学において、地域間の移動は地域間の労働市場の格差と関連して研究が進められてきた。その代表的な理論が、ハリスとドタロ (Harris and Todaro 1970) の「補償賃金仮説 (Compensated wage hypothesis)」である。彼らは低賃金地域の労働者はより高い賃金を求めて高賃金地域へと移動する。高賃金地域では労働供給が増え、賃金が低下し、失業率が上昇する。他方、労働力が流出した低賃金地域では失業率が低下し、賃金が上昇する。その結果、両地域の賃金と失業率は均等化し、地域間の移動が低下すると考えている。このような地域間の移動は地方から都市への一方向の移動を想定していたもので、都市から地方への地方回帰のような現象は含まれていない。

また、日本の地域間移動に関する研究には、太田・大日 (1996)、玄田・大井・篠崎 (2005)、太谷・井川 (2011) などがあり、多くの研究は地域間の経済格差と地域間移動に焦点を当てており、有効求人倍率や平均賃金などのマクロデータを用いて分析を行っているものが多い。また、そのような移動においては、ハリスとドタロモデルと同様、都市部から地方への移動を前提としている研究が主である。

そこで、本章では、都市から地方への移動に焦点を当てて、マクロデータによる分析ではなく、個人の移動選択理由とそのきっかけに注目して分析を行う。このような分析は、移動の理由を、より個人の社会経済生活環境と移住先地域の特性に照らし合わせて分析することが可能となり、特定地域に特化したピンポイントの UJI ターンの推進策を模索する上で欠かすことの出来ない基礎資料となる。本章はそのような役割を果たすことを目的としている。

2. 移動時期

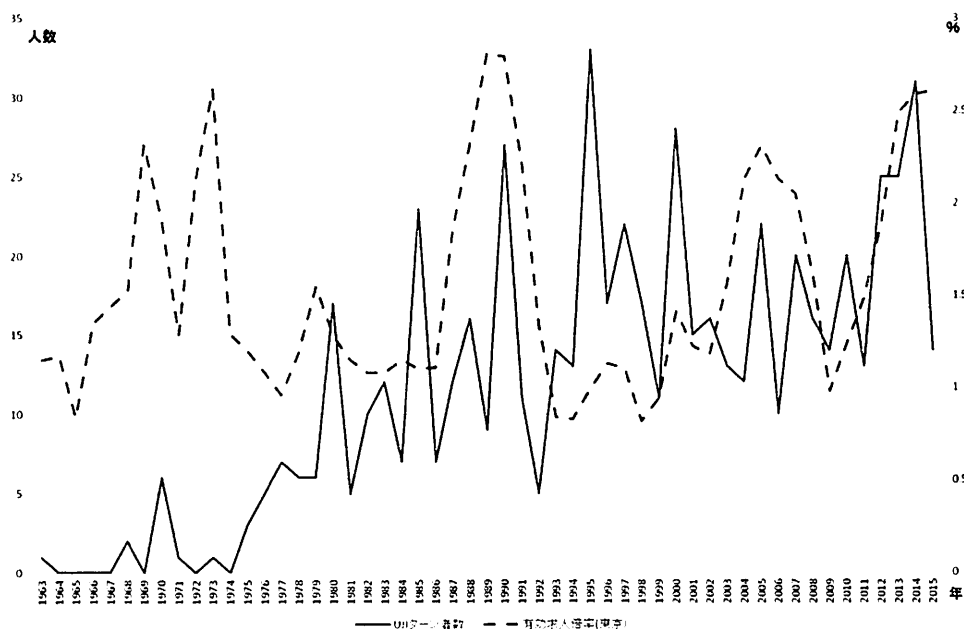
移動の理由を具体的に見る前に、移動がどのような個人のライフステージやマクロ経済環境の中で行われているのかについて、移動時期に注目して見てみる。

図1は、東京の有効求人倍率とこの地域の UJI ターン者数の推移を図示したものである。図からは東京の有効求人倍率と UJI ターン者数が強く相関している様子が分かる。相関係

数を見ると 0.8711 で強い正の相関関係があることが分かる。これは、中南津軽地域では見られなかった現象である。東青地域では特に青森市を中心に、全国規模で展開する企業の支社・支店、地域子会社が集中しているために、東京で景気が上昇するとより積極的に地方への投資が行われ、その影響が現れているものと思われる。

また、もう一点重要なトレンドとしては、緩やかに UJI ターン者が上昇している点である。これは、UJI ターン者にプラスして県内流入者が中核都市である青森市を中心に集まっていることによるものと思われる。

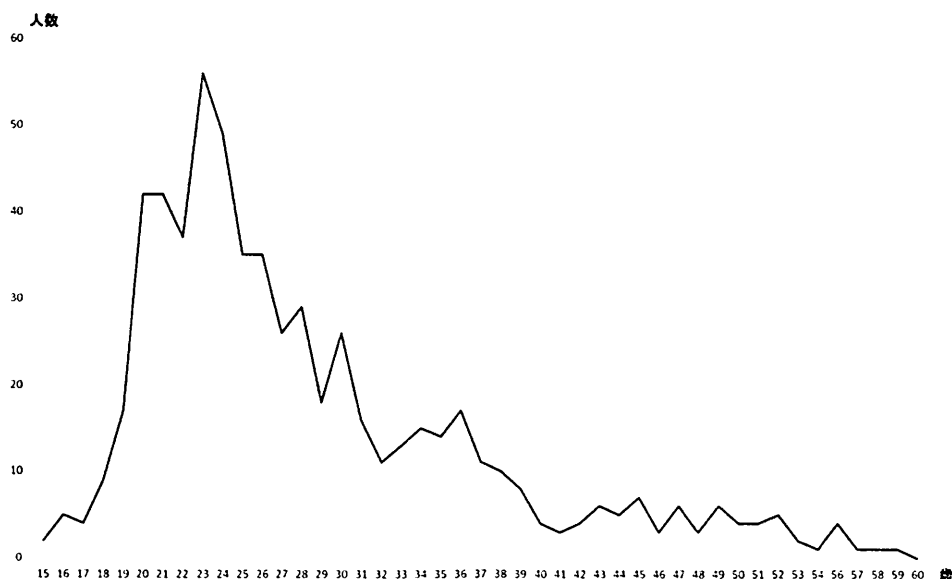
図1 UJI ターン者数と有効求人倍率



出典：厚生労働省「職業安定業務統計（一般職業紹介状況）」

注：有効求人倍率は東京の季節調整値で、各年の10月の値を用いた。2015年については3月の値である。

図2 ライフステージ別 UJI ターン者数



次に各個人はどのようなライフステージで移動しているのでしょうか。図2はUJIターンの移動時年齢の分布を図示したものである。図からUJIターンの場合も県外への流出と同様に、18～25歳までの若年期に移動が活発に行われていることがわかる。また、移動は40代前半にほぼ収束し、それ以降の移動はさほど一般的でないことが良くわかる。この点は、UJIターンの促進策を検討するうえで大変重要な点であると思われる。UJIターン促進策のターゲットを絞り込むことは政策の効率性を高めるためにも非常に重要な視点となりうる。

3. 移動元の都道府県

東青地域への移動は、どの都道府県からの移動が多いのかという点について見てみよう。表1は移動元の都道府県について、移動タイプ別にその人数を整理したものである。

表1 移動元の都道府県

	(単位:人数)				
	Uターン者	Jターン者	Iターン者	県内流入者	計
北海道	29	2	11	8	50
岩手県	23	3	12	9	47
宮城県	65	5	20	17	107
秋田県	18	0	11	4	33
山形県	7	0	1	4	12
福島県	7	0	5	2	14
茨城県	6	0	3	2	11
栃木県	1	0	1	0	2
群馬県	8	1	2	1	12
埼玉県	20	2	3	7	32
千葉県	13	2	2	6	23
東京都	107	9	17	38	171
神奈川県	28	5	7	11	51
新潟県	2	0	1	1	4
富山県	0	0	1	1	2
石川県	2	0	0	0	2
福井県	1	1	0	0	2
山梨県	1	0	0	0	1
長野県	4	0	1	0	5
岐阜県	1	1	1	2	5
静岡県	3	0	0	2	5
愛知県	12	2	0	2	16

注) タイプ合計が5名以下の地域が集計から取り除いた。

東青地域への移動について移動元の都道府県を見ると、多い順に東京都 171 名、宮城県 107 名、神奈川県 51 名、北海道 50 名、岩手県 47 名、秋田県 33 名、埼玉県 32 名となっている。この地域への移動は、主として首都圏（東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県）からの移動であり、全体の約 5 割を占めている。続いて多いのが近隣の道県であり、全体の約 3 割を占めている。

I ターン者に注目すると、比率の高い順に宮城県、東京都、北海道、岩手県・秋田県となっている。I ターンは近隣の道県からの者が多いが、東京都や埼玉県などの首都圏からの移動も多い。I ターン以外の移動と比べて、様々な都道府県からの移動が見られる点は、今後の移住促進策を考える上でのヒントになるであろう。

4. UJI ターンの原因

ここでは、UJI ターンの原因について注目する。表 2 は、UJI ターン者と県内流入者に

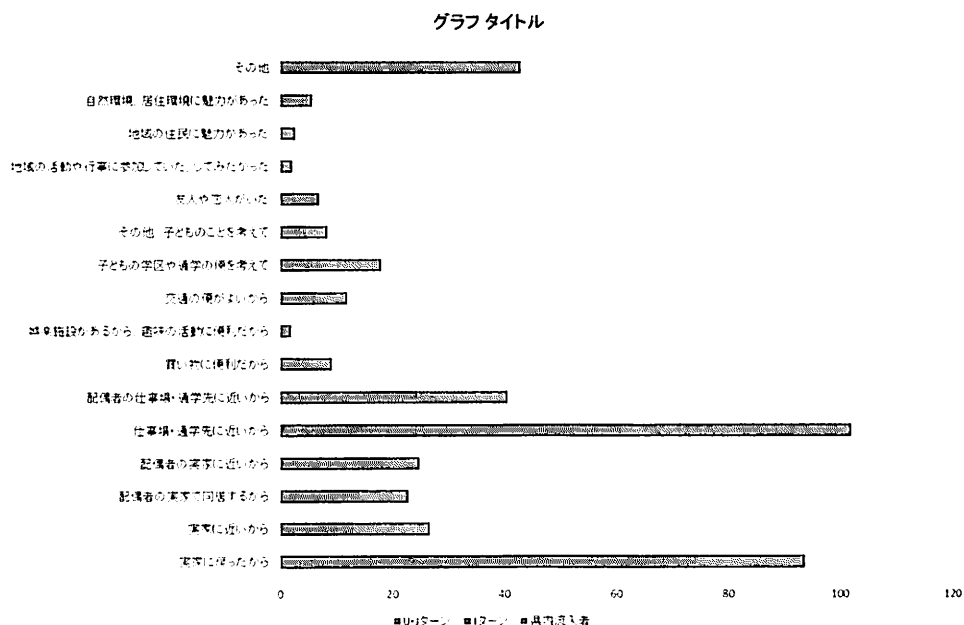
限定し、現在の地域に引っ越してきた理由を尋ねたものである。割合がもっとも高いのは、「実家に戻ったから」となっている。実家と関連している項目である「配偶者の実家に同居するから」「実家に近いから」「配偶者の実家に近いから」を合計すると、476名に上っており、複数回答者が含まれているものの、移住者の6割に上っている。その次は、「仕事場・通学先に近いから」、「配偶者の仕事場・通学先に近いから」が多くなっている。また、その次には「交通の便がよいから」や「買い物に便利」だからなどの生活環境と関連しているものが続いている。他方、「地域の活動や行事に参加していた、してみたかった」、あるいは「地域の住民に魅力があった」などで移動しているものは1%にも満たない状況である。移住促進策として、よく用いられるのが地域の魅力をアピールするというセリフであるが、この地域においてはなにをアピールするかなどより慎重な検討が必要であると思われる。

次に、この地域の出身であるか否かによって UJI ターン の理由が異なることが大いに予想される。図3はこの地域の出身者である UJ ターン 者、この地域外の出身者である I ターン 者、県内他地域からの移動者に分けて、この地域への引越しの理由を尋ねた結果である。

表2 UJI ターン の理由

UJIターンの理由	人数	割合
実家に戻ったから	312	47.6
仕事場・通学先に近いから	178	27.1
その他	81	12.4
実家に近いから	64	9.8
配偶者の実家で同居するから	62	9.5
配偶者の仕事場・通学先に近いから	62	9.5
子どもの学区や通学の便を考えて	39	6.0
配偶者の実家に近いから	38	5.8
交通の便がよいから	28	4.3
その他、子どものことを考えて	22	3.4
買い物に便利だから	22	3.4
自然環境、居住環境に魅力があった	19	2.9
友人や恋人がいた	17	2.6
地域の住民に魅力があった	7	1.1
娯楽施設があるから、趣味の活動に便利だから	6	0.9
地域の活動や行事に参加していた、してみたかった	5	0.8

図3 出身者か否かで見つ引越し理由



注) 複数回答である。

図から出身者か否かによって移動理由が大きく異なることが分かる。この地域の出身者においては、「実家に戻ったから」が最も多く、67.1%に上っている。他方、出身者ではないIターン者と県内他地域からの流入者は、「仕事場・通学先に近いから」がもっとも多く約4割が仕事や就学のことでこの地域への引越しを選択している。その他、注目されるのは、「交通の便がよいから」がUJターン者と県内流入者の4.6%、5.7%となっており、県内の者にとっては交通の便が比較的に大きな理由となっている。

次にこの地域へ引っ越してくるようになった直接のきっかけをみてみよう。表3は引越しの直接のきっかけを集計したものである。移住者の5%以上が回答したもののみを集めた。一番大きなきっかけは、転勤や配置転換で、その他にも就業と関わる理由が高い割合を示しており、UJIターンの直接のきっかけは、この地域内で仕事が見つかったことが決め手となっていることが分かる。その次には、親からの要望や介護などの家族的な理由がきっかけとなっていることが分かる。

引越しを可能にした条件としては、表4が示しているように、県内の出身者のUJターンについては、実家に住むことが出来たことが最も大きな条件となっている。次に、勤務先に支店や支部があった、転職して定職に就く見込みがあったと仕事先が見つかったことが挙げられている。その次は家族からの経済的な援助が大きな条件となっている。他方、Iターン者においては、勤務先が最大の条件となっている。県内他地域からの移動者については、UJターン者と同様に、「実家に住むことが出来た」が最大の条件で、次に勤務先の条件が大きな要因となっていることが分かる。

表3 引越しの直接のきっかけ

直接のきっかけ	(単位:%)		
	UJターン	Iターン	県内から
家族が怪我や病気をした	6.6	2.7	4.8
家族の介護が必要になった	4.4	2.7	2.4
特に問題はないが、親に実家に戻るよう言われた	15.4	3.6	11.3
自分が結婚した	3.2	26.3	5.7
学校を卒業した	16.6	4.5	14.5
今の地域、またはそこから通える範囲に就職した	12.4	5.4	15.3
転勤や配置転換	16.6	37.8	25.0
転職先が青森県内で見つかった	9.3	7.2	8.9
仕事を自分から辞めた	21.5	4.5	15.3
解雇された／契約が切れた	3.4	0.0	1.6

表4 引越しの条件

可能にした条件	(単位:%)		
	UJターン	Iターン	県内から
実家に住むことが出来た	68.7	16.4	33.6
実家以外に、住む家や土地があった	5.9	8.2	6.6
家族から、生活について援助が受けられた	9.4	7.3	7.4
引越すことについて、家族の理解があった	11.1	24.6	11.5
勤務先に、支店や支部があった	14.8	30.9	27.9
転職して、定職に就く見込みがあった	14.0	12.7	13.9
定職に就けなくても、生活していける見込みがあった	6.4	8.2	3.3

5. 移動にともなう変化

ここでは、移動によって収入にどのような変化が現れているのかを確認する。表5は、「この地域に引っ越してくるときに収入の変化がありましたか」という問いへの回答を移動タイプ別に集計したものである。まず注目したいのは、全ての移動タイプにおいて、収入が減ったと回答した者の割合が、増えたと回答した者の割合よりも圧倒的に多いという事実である。このような結果は、この地域の賃金水準が他の地域に比べ低くなっていることに起因していると思われる。また、移動タイプ間の差をみると、Jターン者、Iターン者、県内流入者においては、「ほとんど変わっていない」と回答した者が4割近くいたのに対し、Uターン者においては所得が減少している人の割合が相対的に高くなってい

る。Uターン者の多くは家族の事情によって移動を選択するケースが多いため、収入の減少を覚悟の上で移動を選択している実態がうかがえる。

表6は、移動元の都道府県別に収入の変化を見たものである。首都圏からの移動者の過半数以上が「かなり下がった」と回答しており、地域間所得格差が大きい地域間の移動には大きな犠牲が伴うことが改めて示された。その一方で、近隣の道県からの移動者については多くが「ほとんど変わっていない」と回答しており、近隣間の移動においては収入の変動も大きくならないことが分かる。

そのような収入の変化が、生活満足度にどのように現れているのかをみてみよう。表7は、「あなたは、生活全般に満足していますか、それとも不満ですか」の回答を移動タイプ別に集計したものである。表から「満足している」と回答した者がUターン者で少なくなっていることが分かる。また、「不満だが、これ以上はあきらめている」の割合においては、県内の出身者の割合が高くなっている。本県の所得水準は、戦前から続いている傾向で必ずしも高いとは言えず、本県出身者の多くにあきらめがうかがえる結果となった。

表5 移動と収入の変化

収入の変化	(単位: %)			
	Uターン	Jターン	Iターン	県内から
かなり上がった	7.8	9.7	7.2	9.1
少し上がった	8.1	3.2	7.2	4.6
ほとんど変わっていない	28.4	41.9	40.2	34.6
少し下がった	16.5	16.1	10.3	12.7
かなり下がった	39.2	29.0	35.1	39.1

表 6 移動元の都道府県と収入の変化

(単位:人数)

	かなり 上がった	少し 上がった	ほとんど 変わっていない	少し 下がった	かなり 下がった
北海道	5.1	18.0	43.6	15.4	18.0
岩手県	19.1	2.4	45.2	7.1	26.2
宮城県	14.1	7.6	38.0	15.2	25.0
秋田県	4.0	16.0	40.0	8.0	32.0
山形県	10.0	0.0	50.0	20.0	20.0
福島県	0.0	0.0	69.2	7.7	23.1
茨城県	0.0	11.1	22.2	22.2	44.4
栃木県	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
群馬県	0.0	27.3	36.4	27.3	9.1
埼玉県	6.5	9.7	32.3	22.6	29.0
千葉県	0.0	0.0	38.1	19.1	42.9
東京都	6.3	1.9	26.4	13.2	52.2
神奈川県	6.3	12.5	18.8	8.3	54.2
新潟県	50.0	0.0	25.0	0.0	25.0
富山県	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0
石川県	50.0	0.0	0.0	0.0	50.0
福井県	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0
山梨県	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
長野県	0.0	20.0	20.0	0.0	60.0
岐阜県	0.0	0.0	33.3	0.0	66.7
静岡県	0.0	0.0	20.0	20.0	60.0
愛知県	0.0	6.3	6.3	43.8	43.8

(注) タイプ合計が 5 名以下の地域が集計から取り除いた。

表 7 移動タイプ別生活満足度

(単位:%)

生活全般の満足度	Uターン	Jターン	Iターン	県内から
満足している	38.5	31.4	49.5	45.2
不満だが、これ以上はあきらめている	32.9	45.7	26.2	29.9
不満なので、なんとか改善しようとしている	28.6	22.9	24.3	24.9

移動元の都道府県によって、生活満足度が変わるのか見たものが表 8 である。近隣の北海道と秋田県からの移動者はおおむね生活満足度が高いことが分かる。首都圏からの移動について、埼玉県からの移動者は生活満足度が高い。最も数が多い東京都からの移動者に

については、満足している者が41.6%、「不満だが、これ以上はあきらめている」者が30.6%、「不満なので、なんとか改善しようとしている」者が27.8%となっている。やや気になるのは、千葉県および神奈川県からの移動者の生活満足度は低く、反対に「不満だが、これ以上はあきらめている」者の割合は高いという点である。同じ首都圏からの移動者でも、生活満足度の面では温度差が見られるようである。

表8 移動元の都道府県と生活満足度

(単位:人数)

	満足している	不満だがこれ以上はあきらめている	不満なので、何とか改善しようとしている
北海道	49.0	20.4	30.6
岩手県	43.5	30.4	26.1
宮城県	44.7	28.2	27.2
秋田県	40.6	34.4	25.0
山形県	50.0	41.7	8.3
福島県	30.8	30.8	38.5
茨城県	18.2	63.6	18.2
栃木県	0.0	50.0	50.0
群馬県	36.4	45.5	18.2
埼玉県	43.8	31.3	25.0
千葉県	38.1	33.3	28.6
東京都	41.6	30.6	27.8
神奈川県	37.3	39.2	23.5
新潟県	25.0	50.0	25.0
富山県	100.0	0.0	0.0
石川県	0.0	100.0	0.0
福井県	50.0	50.0	0.0
山梨県	100.0	0.0	0.0
長野県	80.0	20.0	0.0
岐阜県	40.0	20.0	40.0
静岡県	40.0	20.0	40.0
愛知県	17.7	41.2	41.2

(注) タイプ合計が5名以下の地域が集計から取り除いた。

6. 小括

この章では、UJI ターン者に分析対象を絞って、移動の動機ときっかけについて分析を行った。最初に注目したのは移動の時期であった。中南津軽地域とは異なり、景気動向を示す東京の有効求人倍率と UJI ターンとは正の強い相関が見られた。これは青森市が中央の支店経済として役割を果たしていることの現われであると思われる。

また、UJI ターンの主な理由としては、「実家に戻ったから」などの家族関係の理由と答えた人の割合が高く、次に「仕事場・通学先が近いから」などの仕事関連の理由となっていることが興味深い。一方、UJI ターンの決め手となった直接のきっかけは、「転勤や配置転換」や「仕事を自分から辞めた」などの仕事関連であることが分かった。また、UJI ターンを可能にした条件としては、U ターン者は「実家に住むことが出来た」をあげているのに対し、I ターン、県内の他の地域からの流入者は「勤務先に、支店や支部があった」を挙げており、出身地であるか否かによって移動の条件が異なっていることが良くわかる。本章から、UJI ターン希望者の属性に応じたきめ細かな支援政策が求められていることが良くわかる。注目されるのは、就業先が決まらないまま移動したものが4割に上っている点である。UJI ターンの促進策などにおいては、働く場作りが何よりも重要であると議論される場合が多いが、移動しているものにとっては移動決定の最重要要因にはなっていないことがデータから分かる。

【参考文献】

太田聰一・大日唐史（1996）「日本における地域間労働移動と賃金カーブ」『日本経済研究』No.32、pp. 46-59。

大谷剛・井川静恵（2011）『非三大都市圏へのU・Iターンの促進とU・Iターン者を活用した内発的雇用創出活性化に係る研究』労働政策研究報告書、No. 134、労働政策研究・研修機構。

玄田有史・大井方子・篠崎武久（2005）「地域別に見た労働市場—労働移動と賃金格差の視点から」『経済社会の構造変化と労働市場に関する調査研究報告書』、雇用能力開発機構・統計研究会。

Blanchflower, D. and A. Oswald (1994) *The wage curve*, Massachusetts: MIT Press.

Harris, J.R. and M. P. Todaro(1970) "Migration, Unemployment and Development: A two sector analysis," *American Economic Review* 60: 126-142.

第5章 UJI 者の社会関係

石 黒 格

1. はじめに

中南津軽地区住民を対象とした調査データに基づく「中南津軽地域住民の仕事と生活に関する調査報告書（以下、前報告書）」では、UJI 者の社会関係について、大まかに、以下の結果を得た。

第一に、中南津軽地域の出身者は、幼少期からの人間関係ネットワークを強固に保持していた。検討されたのは、小学校以前、中学校時代、高校時代の3つの時期に得た友人だが、一ヶ月に一度はコンタクトがある（アクティブな関係である、と呼ぶ）という、比較的厳しい条件をつけてさえ、中南津軽地域出身者のうち、多くがアクティブな友人関係を維持していた。その数は、他県出身の住民よりもはるかに大きなものだった。

第二に、これらの関係性の地理的分布が限定されていた。特に中学以前の関係に顕著であるが、出身地（卒業した中学校の所在地。本調査でも同じく定義される）と現住地が、（自治体のレベルで）一致しているときには関係が維持される傾向が強かった。特に弘前市以外の郊外自治体では、居住年数が長くなるにつれて U ターン者でも、アクティブな関係を増やしていた。しかし、J ターン者のように、出身地と現住地が異なる場合には、アクティブな関係は減少し、県外の出身者と変わらないレベルまで低下した。中南津軽地域の出身者は、出身地近辺に幼少期からの関係を蓄積しているため、その地域の近傍に居住しているのであれば、その蓄積を利用できるが、そこからわずかでも離れると、出身地のネットワークから分離されるのである。

第三に、JI ターン者、中南津軽地域外の青森県内移住者が、地域の社会関係ネットワークに統合されにくい状況があった。これらの人々は、たとえば相談事があったときに相談する相手が、30 分以内の近距離には少なく、2 時間以上の長距離に多い。日常的な手助けを求める相手も同様である。おそらくは、移住してなお、前住地にいる誰かを、サポートの資源として利用せざるをえない状況があるのである。唯一、娯楽をともにする相手だけはいたが、情緒的、道具的なサポートの手段は乏しいと言わざるをえない。これらの人々は、祭や青年団などの地域活動を通してアクティブ関係を形成している傾向も低いし、I ターン者のみだが、地域活動に費やす時間も短い。残念ながら、中南津軽地域では、外部から入ってきた人々を、人間関係にも、活動にも、取り込み切れていない。

この章では、以上の問題を念頭に置いて、東青津軽地域の住民に、同様の傾向が確認されるのか、それとも異なる傾向が確認されるのかを検討する。青森市は県庁所在地で

あり、言うまでもなく、青森県内で最大の都市である。弘前市よりも後背地が大きいことから、より都市的な社会関係が形成され、前調査とは異なる傾向が現れる可能性もあるだろう。以下では、前調査の報告書と基本的に同じ分析をすることを通して、両地域の社会関係の異同を検討していく。

2. 地元関係の検討

前調査の報告書と同様に、高校以前に形成した社会関係を、回答者の「地元関係」すなわち、出身地近辺で形成した関係と見なし、その量を検討する。前調査同様に、「今でも仕事以外の理由で月に一度は会ったり連絡したりする」関係をアクティブな関係とし、この関係だけを検討する。単に当時に知り合ったというだけで、具体的な接触がない関係を省くためである。

表1に、小学校以前に知り合った関係の人数の分布と、存在確率を示した。全体として、値は前調査の結果よりも低い。郊外定住と郊外Uターンで、値が高いというパターンは前調査と一貫する。特に郊外定住者の p90 が9と大きくなっており、東青津軽の郊外地域には、小学校以前から継続する非常に大きなアクティブ・ネットワークを有する人々がいる。しかし、青森市定住のネットワーク・サイズが小さいというのは、弘前定住者とは異なる点である。

表1 小学校以前に知り合ったアクティブ友人数の分布と存在確率

	p25	p50	p75	p90	平均	存在確率	回答者数
青森市定住	0.00	0.00	1.00	2.00	0.59	0.27	426
郊外定住	0.00	0.00	3.00	9.00	3.79	0.34	38
中南津軽内移動	0.00	0.00	1.00	3.00	0.91	0.29	45
青森市Uターン	0.00	0.00	1.00	3.00	1.01	0.33	346
郊外Uターン	0.00	0.00	2.00	5.00	1.77	0.43	35
Jターン	0.00	0.00	1.00	2.00	0.79	0.29	34
Iターン	0.00	0.00	0.00	1.00	0.38	0.14	111
その他の県内出身者	0.00	0.00	0.00	2.00	0.56	0.17	247
合計	0.00	0.00	1.00	2.00	0.82	0.26	1282

表2 中学校で知り合ったアクティブ友人数の分布と存在確率

	p25	p50	p75	p90	平均	存在確率	回答者数
青森市定住	0.00	0.00	1.00	3.00	0.97	0.34	426
郊外定住	0.00	0.00	3.00	10.00	3.92	0.42	38
中南津軽内移動	0.00	0.00	1.00	4.00	0.98	0.27	45
青森市Uターン	0.00	0.00	1.00	3.00	1.35	0.38	346
郊外Uターン	0.00	1.00	5.00	5.00	2.80	0.51	35
Jターン	0.00	0.00	1.00	2.00	1.00	0.26	34
Iターン	0.00	0.00	0.00	1.00	0.39	0.17	111
その他の県内出身者	0.00	0.00	0.00	2.00	0.69	0.23	247
合計	0.00	0.00	1.00	3.00	1.10	0.31	1282

表2に、中学校で知り合った、現在でもアクティブな友人の数について、分布と存在確率を示した。この結果は、前調査と大きな違いはない。やはり郊外定住と郊外Uターンではp90と平均値が非常に大きい。郊外Uターンでは、p75からが5であり、かなり大きなネットワークをもつ回答者が多いように見える。ただし、郊外Uターンに含まれる回答者は35名に過ぎないため、値の信頼性は高いとは言えない。

表3には、高校で知り合った友人についての結果を示したが、ここでは、中学校以前の友人とは異なる結果が得られた。前調査では、弘前定住と郊外定住との間では差がなかったのに対して、東青津軽地域では、郊外定住や郊外Uターンでは、ネットワーク・サイズが小さく、県内外からの流入者や、Jターン者とほぼ等しい。

表3 高校で知り合ったアクティブ友人数の分布と存在確率

	p25	p50	p75	p90	平均	存在確率	回答者数
青森市定住	0.00	0.00	2.00	5.00	1.65	0.47	416
郊外定住	0.00	0.00	1.00	3.00	0.97	0.29	35
中南津軽内移動	0.00	0.00	3.00	5.00	1.88	0.33	42
青森市Uターン	0.00	0.00	2.00	5.00	1.89	0.49	337
郊外Uターン	0.00	0.00	1.00	3.00	0.75	0.29	28
Jターン	0.00	0.00	2.50	4.00	1.31	0.41	32
Iターン	0.00	0.00	0.00	3.00	0.81	0.24	108
その他の県内出身者	0.00	0.00	1.00	3.00	1.05	0.33	241
合計	0.00	0.00	2.00	5.00	1.49	0.41	1239

高校に通った経験のある者のみ

以上のパターンの有意性を、性別、年齢、学歴、就業形態、婚姻状態、子供の有無を統制して検討したのが表4である。分析には、ネットワークが存在しない確率と、ネットワーク・サイズの平均値を同時に検討できる、ゼロ過剰ポアソン・モデルを用いている。また、回帰モデルを用いて推定した、移動パターン以外の説明変数が平均値をとる時のアクティブ友人の存在確率と人数の予測値を、表5に示した。主として、予測値

を用いて、結果を解釈していく。なお、前調査との対比のために、郊外定住を比較対照としたときの予測値の差も検定しているが、前調査とは異なり、郊外定住に含まれる回答者数が少ないため、この検定結果は基本的に参考とはせず、青森市定住者を基準としたときの差のみを用いて議論を進める。

まず小学校以前の関係であるが、郊外定住のネットワーク・サイズの大きさが飛び抜けており、同じく定住者である青森市定住の4倍以上のサイズとなっている。それに次ぐ郊外Uターンとさえ、1人近い差がある。Iターンやその他の県内出身者は、郊外定住と比較して、ネットワークの存在確率が低い（表中では、ネットワーク・サイズがゼロとなる確率も高い）。

一方、同じく定住者であっても、青森市定住の値は低い。青森市定住と比較したときには、郊外定住はもちろん、青森市Uターン、郊外Uターン、その他の県内出身者に加えて、県外出身者であるIターンさえも、ネットワークが存在している場合には、そのサイズが大きいのである。県外に出た経験がある回答者と比較してさえ、青森市定住が小学校以前の関係を維持できていないのは奇妙である。

表 4 高校以前のアクティブ友人数のゼロ過剰ポアソン回帰分析

	小学校以前		中学校		高校	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン						
青森市定住 (ref)						
郊外定住	-0.39 ⁺	1.44 ^{***}	-0.22	1.20 ^{***}	0.03	0.35
東青津軽内移動	-0.24	0.27	0.09	0.21	0.50 ^{***}	0.33
青森市Uターン	-0.15	0.27 ^{**}	-0.04	0.28 ^{***}	0.02	-0.09
郊外Uターン	-0.82 ^{**}	0.51 ^{**}	-0.56 [*]	0.65 ^{***}	-0.35	0.19
Jターン	-0.28	-0.49	0.21	-0.10	-0.02	0.05
Iターン	0.61 ^{***}	0.48 [*]	0.58 ^{**}	-0.09	-0.04	0.70 ^{***}
その他の県内出身者	0.40 ^{**}	0.40 ^{**}	0.32 [*]	-0.04	-0.13	0.33 ^{**}
年齢	0.03 ^{***}	0.00	0.02 ^{***}	0.00	-0.01 ^{***}	0.01 ^{**}
性別 (女性 = 1)	0.01	-0.09	0.10	0.05	-0.32 ^{***}	-0.30 ^{**}
学歴						
高校 (ref)						
専門・短大・高専	0.02	-0.33 ^{***}	-0.08	-0.50 ^{***}	-0.10	-0.03
大学・大学院	0.12	-0.40 ^{**}	0.05	-0.51 ^{***}	-0.30 ^{***}	0.13
就業形態						
無職 (ref)						
正規雇用	0.20	0.08	-0.01	-0.25 ^{**}	-0.02	0.01
非正規雇用	0.09	-0.23 ⁺	0.00	-0.39 ^{***}	-0.32 ^{***}	0.11
自営業・自由業	-0.05	0.46 ^{***}	-0.38 [*]	-0.22 [*]	-0.14	-0.07
配偶者あり	0.19	0.38 ^{**}	0.11	0.27 ^{**}	0.14 ⁺	0.08
子供あり	-0.22 ⁺	-0.09	0.11	0.03	0.16 [*]	0.23 [*]
定数	-0.97 ^{***}	0.49 [*]	-0.52 [*]	1.35 ^{***}	2.01 ^{***}	-0.61 ^{**}
尤度比カイ二乗値 (16)	323.19 ^{***}		276.69 ^{***}		135.08 ^{***}	
Vuongテストのz値	6.75 ^{***}		7.00 ^{***}		8.36 ^{***}	
回答者数	1223		1223		1182	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表5 高校以前のアクティブ友人数の存在確率と期待カウント数の予測値

移動パターン	小学校						中学校						高校					
	予測値		vs. 青森市定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 青森市定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 青森市定住		vs. 郊外定住	
	0の 確率	人数	0予 測	人数 予測	0予 測	人数 予測	0の 確率	人数	0予 測	人数 予測	0予 測	人数 予測	0の 確率	人数	0予 測	人数 予測	0予 測	人数 予測
青森市定住	0.71	0.55	ref	ref	+	---	0.64	0.91	ref	ref	---	0.52	1.56	ref	ref			
郊外定住	0.57	3.47	-	+++	ref	ref	0.55	3.72		+++	ref	ref	0.66	1.15			ref	ref
東青津軽内移動	0.62	0.94				---	0.67	1.02			---	0.65	1.90		+++			++
青森市Uターン	0.66	0.86		+++		---	0.62	1.26		+++		---	0.49	1.70				-
郊外Uターン	0.40	1.92	---	+++		---	0.42	2.80	--	+++		---	0.60	0.92				
Jターン	0.61	0.46				---	0.71	0.65			---	0.54	1.47					
Iターン	0.88	0.37	+++	++	+++	---	0.82	0.41	+++		+++	---	0.77	0.71	+++			
その他の県内出身者	0.83	0.48	+++	+++	+++	---	0.75	0.61	++		++	---	0.65	1.00	+++			

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

Iターンとその他の県内出身者のネットワーク・サイズの大きさも直感には反するが、これらの回答者はネットワークの存在確率が青森市定住よりも有意に低いので、少数の、小学校以前の関係を特にアクティブに保っている人々が存在するだけだと言える。郊外定住と郊外Uターンについては、ネットワークの存在確率も高く、かつネットワーク・サイズが大きい。郊外地域では、小学校以前という、幼少期から続く関係が、アクティブなまま保たれる傾向が強く、かつ、県外に転出したとしても、Uターンすれば、それらの関係が再活性化されることがわかる。

これらの結果は、前調査と類似する点も多いが、異なる部分もある。中南津軽地域では、Uターン者は、出身自治体に居住している限りは、定住者と同程度の、小学校以前のアクティブ友人を有していた。これとは異なり、東青地区では、Uターン者は定住者よりは小さなアクティブ・ネットワークしか維持できていない。

中学のアクティブ友人については、ほぼ同様のパターンが確認されるが、Iターンとその他の県内出身者のネットワーク・サイズが、青森市定住と変わらなくなっている。単に、ネットワークの存在確率が低くなっているのみである。

一転して、高校のアクティブ友人数については、目立った差が見られない。東青津軽内移動が、青森市定住、郊外定住のどちらと比較しても、大きめのネットワークを形成していることと、青森市定住と比較すると、Iターンとその他の県内出身者が、ネットワークの存在確率が低いことだけである。東青津軽内移動の高校のアクティブ友人数が多くなるのは、東青津軽地域内で、青森市の高校に進学した回答者がいるためだと考えられる。

分析の結果から示唆されるのは、青森市の社会関係の都市的性格であり、地域における中心性の高さである。青森市を中心として、東青津軽地域を対象とした本調査の結果は、この章の冒頭で記した、前調査の結果から大きく乖離してはいないものの、第一の、地域への社会関係の蓄積という特徴は、青森市出身者には確認できなかった。また、U

ターン者と定住者との地元関係に差があることから、地域内の社会関係に対する、Uターナー者の再統合も、やや弱いことになる。これらの特徴は、石黒(2012b)で確認された、首都圏出身者の特徴に近い。つまり、首都圏と比較すれば、もちろん低いものの、青森市は、社会関係を形成し、維持する社会的場としてはかなりの程度、都市的であり、定住者にとってさえ、社会関係を維持することを困難にさせていると言えるだろう。青森市の中核都市としての働きが強く、周辺自治体から通勤などのかたちで人を吸い寄せることも、住民の移動性を高め、これが郊外自治体にも、(中南津軽地域と比較したときには)都市的な性格を与えている可能性がある。

3. 居住年数と地元関係

前調査では、中南津軽地域の郊外出身者は、出身自治体にUターンしてきた後、居住年数が長くなるに連れて、地元関係を拡大していく傾向が確認された。一方、中心都市である弘前の出身者では、中学以前の地元関係が、Uターン後、居住年数が長くなるほど減少することがわかった。前調査の報告書では、このことを中心市街地である弘前市では、Uターンした場合でも、生家と離れて居住している可能性を考えた。生家と離れて生活基盤を確保しているのであれば、生家の周辺で蓄積されている、中学以前の社会関係からは離脱しやすくなるであろう。

青森市は、弘前市よりもさらに都市規模が大きく、社会関係の地理的分散はより起きやすいと考えられる。前調査での報告書の推測が正しければ、東青津軽地域では、上述のパターンがより顕著に見られるはずである。

表6に、東青津軽地域外での生活の経験者に対象者を限定した、ゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果を示した。説明変数に現住地の居住年数と、移動パターンと居住年数の交互作用を追加することで、移動パターンによって、居住年数の効果が異なるのか、逆に、居住年数によって、移動パターンの効果が異なるのかを検討している。交互作用を含む分析は、説明変数の傾きまで含めて、予測値を算出しなければ、その意味を理解することが難しいため、表7に小学校以前、表8に中学、表9に高校のアクティブ友人数について、それぞれ予測値と、青森市Uターンまたは郊外Uターンとの差の検定結果ならびに、居住年数の効果の検定結果を示した。

表6 現住地への転居からの年数と移動パターンの地元関係への効果

	小学校以前		中学校		高校	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン						
青森市Uターン(ref)						
郊外Uターン	-0.54 [*]	0.40 [*]	0.59 ^{**}	-0.59 [*]	0.13	-0.26
Jターン	1.07	-0.72	-0.75	0.30	0.85 [*]	-0.54
Iターン	1.62 ^{**}	0.70	0.02	0.38	1.13 ^{***}	0.11
その他の県内出身者	0.51	-1.00 [*]	-0.26	0.30	0.48 [*]	-0.33
居住年数(中心化)	-0.01	0.00	-0.03 ^{***}	-0.03 ^{**}	-0.02 [*]	0.00
居住年数×移動パターン						
青森市Uターン(ref)						
郊外Uターン	0.01	0.00	-0.03 [*]	-0.02	-0.02	-0.02
Jターン	0.08 [*]	-0.01	-0.03	0.01	0.06 [*]	-0.03
Iターン	0.03	0.01	0.01	-0.01	0.02 [*]	0.00
その他の県内出身者	0.01	-0.06 ^{**}	0.00	0.01	0.01	-0.01
年齢	0.03 ^{***}	-0.01	-0.01 [*]	0.03 ^{**}	0.03 ^{***}	-0.01 [*]
性別(女性=1)	-0.25	-0.65 ^{***}	-0.03	0.15	-0.27 [*]	0.08
学歴						
高校(ref)						
専門・短大・高専	0.01	-0.70 ^{***}	-1.10 ^{***}	-0.25 [*]	0.04	-0.10
大学・大学院	0.11	-0.93 ^{***}	-0.88 ^{***}	0.00	0.09	-0.42 ^{**}
就業形態						
無職(ref)						
正規雇用	0.28	-0.04	-0.21	0.12	0.11	0.23 [*]
非正規雇用	0.19	-0.12	-0.36 [*]	0.17	0.07	-0.02
自営業・自由業	-0.05	-0.21	-0.14	-0.14	-0.03	0.15
配偶者あり	0.23	0.63 ^{***}	0.60 ^{***}	0.25	0.26 [*]	0.03
子供あり	-0.12	-0.19	-0.39 ^{**}	0.08	0.17	0.14
定数	-1.48 ^{**}	1.70 ^{***}	1.57 ^{***}	-1.70 ^{**}	-1.80 ^{***}	1.45 ^{***}
尤度比カイ二乗値(18)	107.72 ^{***}		270.95 ^{***}		35.53 ^{**}	
Vuongテストのz値	5.82 ^{***}		5.05 ^{***}		6.62 ^{***}	
回答者数	599		589		579	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表6から明らかなように、移動パターンと居住年数の交互作用の有意性は、前調査とは大きく異なる。人数予測、すなわちネットワーク・サイズの予測についていうなら、居住年数と移動パターンの交互作用はほとんどないし、居住年数の効果自体も、中学で知りあった友人でしか確認できない。どちらかといえば、中学・高校で知りあったアクティブ友人がゼロとなる確率に、居住年数がネガティブな効果を示す。つまり、全体として、居住年数が長いほど、中学・高校で知りあったアクティブ友人が存在する確率が高くなるのである。ただし、以下に見るように、主効果と交互作用効果が確認されない理由の一つは、青森市Uターンが、JIターンやその他の県内出身者と同様に地元ネットワークが小さいことにある。前調査では、弘前Uターンも、郊外Uターンよりは劣るものの、地元ネットワークの存在確率が高く、サイズも大きかった。そのために、その差が有意になりやすかったのである。このことから、予測値を丁寧に検討する必要がある。

表7に、小学校以前のアクティブ友人について、予測値を示した。居住年数の効果は、その他の県内出身者でのみ有意であり、居住年数が長くなるほど、小学校以前のアクティブ友人数が減少することがわかる。転居後10年の時点では、その他の県内出身者は、

小学校以前のアクティブ友人が存在する確率こそ低いものの、存在する場合には、青森市Uターンよりも多くの友人がいた。しかし、移住後30年が経つと、むしろ少ないという結果になる。出身地から離れることで、もっとも古い、生家周辺に集積しやすい関係から離脱したのだと言える。県外から流入したIターンは、もともと存在確率が極端に低く、変化しない。

表7 小学校以前のアクティブ友人数に対する移動パターンと居住年数の効果の予測値

移動パターン	移住後10年						移住後30年						居住年数の傾き	
	予測値		vs. 青森市Uターン		vs. 郊外Uターン		予測値		vs. 青森市Uターン		vs. 郊外Uターン			
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測		
青森市Uターン	0.67	0.69	ref	ref	++	-	0.60	0.84	ref	ref	++	-		
郊外Uターン	0.38	1.91	--	+	ref	ref	0.37	1.94	--	+	ref	ref		
Jターン	0.41	0.74				--	0.86	0.15			++		+	
Iターン	0.91	0.33	+++	++	+++		0.96	0.16	+++		+++			
その他の県内出身者	0.80	0.61	+	++	+++		0.77	0.22		-	+++	---	---	

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

表8に、中学のアクティブ友人について、予測値を示した。表6でも明らかだったように、居住年数の効果は、この関係性で明瞭である。効果はいずれの場合でも負で、居住年数が長くなるほど、中学のアクティブ友人数は減少する。Iターンでは居住年数の効果は有意にならないが、これは、回答者数が少ないことの影響にすぎないと考えるべきである。移動パターンと居住年数の交互作用が有意ではない以上、考慮してはならないのである。

表8 中学校のアクティブ友人数に対する移動パターンと居住年数の効果の予測値

移動パターン	移住後10年						移住後30年						居住年数の傾き	
	予測値		vs. 青森市Uターン		vs. 郊外Uターン		予測値		vs. 青森市Uターン		vs. 郊外Uターン			
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測		
青森市Uターン	0.67	1.04	ref	ref			0.48	0.89	ref	ref	+	---	---	---
郊外Uターン	0.59	4.14		+++	ref	ref	0.28	2.42	-	+++	ref	ref	--	---
Jターン	0.68	0.97					0.58	0.37				---		---
Iターン	0.86	0.33	+++				0.64	0.60			++	-	--	
その他の県内出身者	0.72	0.71					0.59	0.55			++	---	---	--

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

ネットワーク・サイズの減少とは逆の傾向となるが、中学のアクティブ友人数がゼロとなる確率は、居住年数が長くなるほど減少する。つまり、この関係性について、孤立する確率は減少するのである（ここでも、すべての移動パターンで、居住年数の効果があると考える）。交互作用のパターンからは、減少幅が郊外Uターンで大きいことが示唆される。

つまり、居住年数が長くなるにつれて、中学で知りあった友人との関係をなにかしらかたちでアクティブに保持している回答者が増えるが、その一方で、そうした人々が維持している関係の数は減少することになる。

表9 高校のアクティブ友人数に対する移動パターンと居住年数の効果の予測値

移動パターン	移住後10年						移住後30年						居住年数の傾き
	予測値		vs. 青森市Uターン		vs. 郊外Uターン		予測値		vs. 青森市Uターン		vs. 郊外Uターン		
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	
青森市Uターン	0.57	1.34	ref	ref			0.42	1.79	ref	ref			
郊外Uターン	0.74	0.95			ref	ref	0.49	1.28			ref	ref	--
Jターン	0.38	2.08					0.67	0.64					
Iターン	0.81	0.59	+++				0.75	0.74	+++				
その他の県内出身者	0.65	1.06					0.59	0.93					

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。
0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

表9に示したように、高校のアクティブ友人については、見るべきパターンは乏しい。全体として、居住年数が長くなるほど、孤立する確率が減少するが、ネットワーク・サイズは変化しないのである。ただし、Jターンでは孤立の確率が高くなるし、Iターンでは変化が小さい。

以上見てきたように、東青津軽地域で行われた本調査の結果は、中南津軽地域で行われた前調査とは大きく異なり、同時に、解釈が難しいものとなっている。ひとつ言えることは、基準となるべき青森市Uターンのネットワークの存在確率が低く、サイズも小さいということである。すなわち、地理的に集中して社会関係が集積することで、幼少期から中学卒業までに得た社会関係が維持されやすいという、中南津軽地域、特にその郊外で示されたパターンが、青森市では確認されないということである。表5あるいは表1から3に見るように、青森市定住の中学以前のアクティブ友人数は、出身自治体に居住していない東青津軽内移動、JIターン者、その他の県内出身者と大きくは変わらないのである。この結果は、青森市の都市度が弘前市と比較して明らかに高く、青森市出身者の社会関係が、より都市的なものとなりやすいことから来していると解釈できる。

郊外Uターンでは、前調査を上回るネットワーク・サイズが報告されていることを考えると、東青津軽地域の住民の社会関係への志向性が、中南津軽地域住民と異なることを考えることはできない。高校のアクティブ友人数は、比較的大きな値を示すことも、同様に都市度の大きさから解釈できる。青森市周辺の自治体出身者は、高校進学時に、すでに青森市へと通学しており、青森市内で社会関係を築く機会が多いのだろう。そのため、この関係は青森市への移住後も維持されやすいのである。

つまり、地方特有の、中学以前の関係が地理的に集積されるという特徴が、青森市では希薄である。一方、大都市が進学時に地方から多くの若者を引きつけるのと同様に、青森市は周辺自治体から若者を引きつける。弘前市にも同様の傾向が確認されたが、青森市では、その傾向がより強く表れていると考えることができる。

4. 祭、青年団、ボランティアでの関係性

ここまで検討してきた関係性は、個人的なつながりであり、その存在が、地域への統合を意味しているとは限らない。この節では、祭・青年団などの地域活動と、ボランティアで知りあったアクティブ友人数を検討することを通して、東青津軽地域の住民の、地域社会への統合を検討する。

表 10 に、これらの地域活動のアクティブ友人数の分布を示した。まず、祭・青年団について見ると、青森市定住が非常に参加が低調で、郊外居住者が、Uターン者も含めて参加が多い。10%以上の参加が確認できるのは、この2つのグループだけである。前調査と比較すると、参加は低調であり、特に、中心市街地である青森市在住者の参加の少なさが目立つ。祭や青年団などの地域性の強い活動での関係形成が少ないという点でも、青森市の社会関係が、都市的な特徴を強く有していることがわかる。

表 10 地域活動のアクティブ友人数

	祭・青年団						ボランティア						回答者数
	p25	p50	p75	p90	平均	存在確率	p25	p50	p75	p90	平均	存在確率	
青森市定住	0.00	0.00	0.00	0.00	0.26	0.04	0.00	0.00	0.00	0.00	0.11	0.03	426
郊外定住	0.00	0.00	0.00	6.00	1.82	0.24	0.00	0.00	0.00	10.00	1.74	0.18	38
東青津軽内移動	0.00	0.00	0.00	0.00	1.36	0.09	0.00	0.00	0.00	0.00	0.45	0.02	44
青森市Uターン	0.00	0.00	0.00	0.00	0.74	0.07	0.00	0.00	0.00	0.00	0.43	0.05	346
郊外Uターン	0.00	0.00	0.00	3.00	1.43	0.14	0.00	0.00	0.00	0.00	0.66	0.09	35
Jターン	0.00	0.00	0.00	0.00	0.38	0.06	0.00	0.00	0.00	0.00	0.09	0.03	34
Iターン	0.00	0.00	0.00	0.00	0.63	0.05	0.00	0.00	0.00	0.00	0.07	0.02	111
その他の県内出身者	0.00	0.00	0.00	0.00	0.57	0.05	0.00	0.00	0.00	0.00	0.42	0.07	246
合計	0.00	0.00	0.00	0.00	0.60	0.06	0.00	0.00	0.00	0.00	0.33	0.05	1280

ボランティアについては、全体としてはアクティブ友人の分布に大きな違いはない。特徴的なのは郊外定住で、p90 が 10 と、非常にネットワーク・サイズの大きな回答者が存在する。存在確率も、前調査の 11%に対して、18%と高い。このグループに含まれる回答者が 38 名と少ないことも要因として考えられるため、強い結論を出すことはできないが、東青津軽地域の郊外自治体では、定住者がボランティアの担い手となっている、あるいは、活発で、友好的な社会関係の形成に寄与している活動が存在すると考えられる。一方で、郊外Uターンの値は低く、これらの活動に、Uターン者が関与していないことも示唆される。この点は、郊外Uターンがもっとも高い値を示した前調査とは異なっている。

表 11 に、これら地域活動のアクティブ友人数を目的変数としたゼロ過剰ポアソン回帰分析を行った結果を示した。表 12 は、そのモデルを用いたネットワークのサイズと存在確率の予測値である。

まず、祭・青年団の結果について見る。祭・青年団のアクティブ友人の存在確率は、青森市定住と郊外定住との間に有意な差があり、郊外定住のほうが高い（ゼロである確率が低い）。それでも、存在確率は 20%に満たない。ネットワーク・サイズは、青森市定住と郊外定住で差はない。東青津軽内移動、郊外Uターン、Jターンで大きく、Iターンで低い傾向がある。これらの移動者には、少数であるが、地域活動を通じて、地域社会に統合されていった人々がいると考えられる。

ボランティアは、青森市定住では低調であり、ここでも郊外定住者よりも、アクティブ友人の存在確率が低い。そして、郊外定住、東青津軽内移動、青森市Uターン、郊外Uターン、その他の県内出身者で、ネットワーク・サイズが大きい。郊外定住を除いて、存在確率は変わらないから、単純に、ネットワークが平均的に大きいことになる。

つまり、青森市定住に含まれる人々、すなわち、卒業した中学の所在地が青森市であり、その後も青森市に住み続けている回答者は、もっとも居住期間が長いにも関わらず、地域活動を通しては、ほとんど社会関係に統合されていないことになる。県外からの流入者である I ターンと等しいレベルでしか、地域活動を通して社会関係を形成していないことになる。前調査とは、これも大きく異なる結果である。

表 11 地域活動のアクティブ友人の有無のゼロ過剰ポアソン回帰分析

	祭・青年団		ボランティア	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
青森市定住(ref)				
郊外定住	-0.76 **	-0.10	-0.63 *	1.30 ***
東青津軽内移動	-0.36	1.16 ***	0.25	2.04 ***
青森市Uターン	-0.04	-0.10	-0.04	1.17 ***
郊外Uターン	-0.35	0.47 *	-0.19	1.19 **
Jターン	0.28	0.83 *	0.08	-0.57
Iターン	0.00	-0.53 *	0.20	-0.64
その他の県内出身者	0.09	0.12	-0.11	1.25 ***
年齢	-0.01	0.01	-0.01	-0.01
性別(女性=1)	0.31 *	-0.45 ***	0.16	-0.87 ***
学歴				
高校(ref)				
専門・短大・高専	-0.03	0.06 *	-0.22	-0.58 ***
大学・大学院	-0.02	0.02 *	0.24	-0.36
就業形態				
無職(ref)				
正規雇用	-0.17	0.21 *	0.04	-0.23
非正規雇用	-0.22	0.08	-0.21	0.32
自営業・自由業	-0.65 **	0.73 ***	-0.33	0.00
配偶者あり	-0.01	-0.23 ***	0.09	-0.24
子供あり	-0.34 +	1.08 ***	-0.17	-0.32 +
定数	2.20 ***	0.70 ***	2.27 ***	2.44 ***
尤度比カイ二乗値(16)	117.32***		152.21***	
Vuongテストのz値	7.29***		5.33***	
回答者数	1217		1222	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 12 地域活動のアクティブ友人数と存在確率の予測値

移動パターン	祭り・青年団						ボランティア					
	予測値		vs. 青森市定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 青森市定住		vs. 郊外定住	
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測
青森市定住	0.95	0.19	ref	ref	+++		0.96	0.09	ref	ref	++	---
郊外定住	0.82	0.67	---		ref	ref	0.87	1.10	--	+++	ref	ref
東青津軽内移動	0.91	1.25		+++		+++	0.98	0.41		+++	+	++
青森市Uターン	0.95	0.19			++		0.96	0.32		+++	++	
郊外Uターン	0.91	0.61		++		+++	0.94	0.44		+++		
Jターン	0.98	0.24		++	++	++	0.97	0.04				--
Iターン	0.95	0.11		--	++		0.97	0.03			+	---
その他の県内出身者	0.96	0.18			+++		0.95	0.40		+++	+	

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

5. 祭、青年団、ボランティアでの関係性と居住年数

ここでも、居住年数が長くなることによって、地域活動を通じた社会的統合が促進さ

れるのかを検討しよう。表 13 に、居住年数と移動パターンの交互作用を投入したプロビット分析の結果を示した。いずれの活動についても、アクティブ友人を有している回答者が非常に少なく、交互作用項を投入したゼロ過剰ポアソン回帰分析では、分析の安定性が確保できなかったため、分析法が変更されている。そのため、ゼロ過剰ポアソン回帰分析で言う、ゼロの確率の分析、つまりネットワークが存在するか、しないかの変化の分析だけがなされている。

表 13 地域ネットワークの有無に対する居住年数と移動パターンの交互作用を含めたプロビット回帰分析

	祭・ 青年団	ボラン ティア
移動パターン		
青森市Uターン(ref)		
郊外Uターン	0.48	0.19
Jターン		
Iターン	0.03	-5.97
その他の県内出身者	-0.27	0.01
居住年数(中心化)	0.00	0.00
居住年数×移動パターン		
青森市Uターン(ref)		
郊外Uターン	0.00	0.00
Jターン		
Iターン	0.00	-0.20
その他の県内出身者	-0.01	-0.01
年齢	0.00	0.01
性別(女性=1)	-0.39 ⁺	0.05
学歴		
高校(ref)		
専門・短大・高専	-0.06	-0.13
大学・大学院	0.26	-0.07
就業形態		
無職(ref)		
正規雇用	0.11	0.28
非正規雇用	-0.02	0.43
自営業・自由業	0.74 [*]	0.68 ⁺
配偶者あり	-0.01	-0.08
子供あり	0.37	0.12
定数	-1.95 ^{**}	-2.66 ^{***}
尤度比カイ二乗値(18)	32.04 [*]	15.06
分散説明率	.12	.07
回答者数	598	568

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Jターンは、人数が少なく、誤差が大きいため、分析ができない。

表 13 から明らかなように、移動パターンと居住年数の交互作用は有意にはならない。また、主効果も有意ではない。つまり、移住者の地域活動によるアクティブ・ネットワークは、居住年数が長くなっても拡大することはないし、縮小することもない。地域活動でアクティブ友人を獲得する人々は、参加後、速やかに獲得を済ませることになるし、逆に獲得しない人々は、居住年数が長くなっても、新たに獲得することはない。

ただし、前調査の報告書でも指摘したように、このことは、移住者が地域活動に参加していないという事実を示しているわけではない。表 14 に、回答者が直近一週間に行った自治会、PTA、町おこしなどの活動時間のゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果を示した。表 15 が、その予測値である。いずれの表からも明らかなように、郊外Uターン、Jターン、Iターン、その他の県内出身者は、青森市定住、郊外定住のいずれと比較しても、活動している場合には地域活動の時間が長し、活動している確率も、絶対値は低いものの、相対的には変わらない。郊外Uターンについていえば、青森市定住よりも、活動している確率が高くさえある。

つまり、東青津軽地域では、郊外Uターン、Jターン、Iターン、その他の県内出身者といった移住者のごく一部が、活発に地域活動を担っているのである。青森市Uターンは、活動時間についても低調であり、ここにも都市的な特徴が確認される。

表 14 直近一週間の自治会、PTA、町おこしなどの活動時間のゼロ過剰ポアソン回帰分析

	0予測	時間予測
移動パターン		
青森市定住 (ref)		
郊外定住	-0.56	-0.26
東青津軽内移動	-0.01	-0.07
青森市Uターン	0.02	0.14
郊外Uターン	-0.63 *	0.50 *
Jターン	0.65	1.40 **
Iターン	-0.01	0.87 ***
その他の県内出身者	0.11	0.53 **
年齢	0.00	0.01
性別 (女性 = 1)	0.01	0.36 *
学歴		
高校 (ref)		
専門・短大・高専	0.19	-0.05
大学・大学院	0.13	-0.03
就業形態		
無職 (ref)		
正規雇用	0.29 +	0.78 ***
非正規雇用	0.05	0.24
自営業・自由業	-0.20	0.15
配偶者あり	-0.31 +	-0.20
子供あり	-0.58 **	-0.31 +
定数	1.69 ***	0.43
尤度比カイ二乗値 (16)	79.21***	
Vuongテストの z 値	6.04***	
回答者数	855	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 15 直近一週間の自治会、PTA、町おこしなどの活動時間と、活動時間がゼロとなる確率の予測値

移動パターン	予測値		vs. 青森市定住		vs. 郊外定住	
	0の 確率	時間	0予 測	時間	0予 測	時間
青森市定住	0.90	0.33	ref	ref		
郊外定住	0.76	0.60			ref	ref
東青津軽内移動	0.89	0.32				
青森市Uターン	0.90	0.37				
郊外Uターン	0.73	1.40	--	++		++
Jターン	0.97	0.37		+++	++	+++
Iターン	0.89	0.81		+++		+++
その他の県内出身者	0.91	0.46		+++	+	++

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

6. 近距離のサポート・ネットワーク

この節では、回答者が地域社会からどれだけソーシャル・サポートを得ているのかを検討し、東青津軽地域住民の地域社会への統合を検討する。地域社会から物心両面でサポートを得られるのであれば、そうした地域での生活は、より暮らしやすいものとなるだろう。一方、そうしたサポートが得られないのであれば、地域社会での生活は満足のないものとなり、移住者に、さらなる移住を促すことになる可能性がある。

前調査の報告書と同様に、調査で測定したいいくつかのサポートについて、得ることが期待できる知人（サポート・ネットワーク）の存在確率と、その数（サポート・ネットワークのサイズ）を検討する。

前調査と同様に、本調査では、4種類8つのサポートについて、回答者にそれを提供してくれる人物の有無と人数を尋ねた。相談ネットワークとしての「困ったときに相談に乗ってくれる人（相談）」「個人的な悩みを話せる人（悩み）」、具体的な道具的サポート・ネットワークとしての「生活の中で、具体的な手助けをしてくれる人（手助け）」「必要なら、まとまったオカネを貸してくれる人（オカネ）」、共行動ネットワークとしての、「同じ目標を目指して一緒に何かしている人（目標共有）」「一緒に遊ぶ人（娯楽共有）」、就職援助ネットワークとしての「必要なら就職の世話をしてくれる人（就職の世話）」「必要なら就職活動についてアドバイスしてくれる人（就職アドバイス）」である。そして、それらのサポート源が、30分以内に会える範囲という近距離に、何人ずついるのかを尋ねている。

以下では、サポートのタイプごとにまとめて結果を記述する。

(1) 相談ネットワーク

表 16 に、近距離の相談ネットワークに関する集計を示した。2つのネットワークで、個々に傾向は異なるが、どちらのネットワークについても、前調査の値と比べると、全体としての分布には変化がないが、Iターンでは値が低くなりがちなのがわかる。

表 16 相談に関わるネットワークのサイズ (近距離)

	困ったときに相談					悩みを話せる					回答者数
	p25	p50	p75	平均	存在確率	p25	p50	p75	平均	存在確率	
青森市定住	1.00	2.00	4.00	2.83	0.84	1.00	2.00	3.00	1.94	0.77	428
郊外定住	1.00	2.00	4.00	2.79	0.87	0.00	2.00	2.00	1.92	0.72	39
東青津軽内移動	2.00	3.00	5.00	3.43	0.85	1.00	2.00	3.00	2.80	0.85	46
青森市Uターン	1.00	2.00	4.00	2.87	0.83	1.00	2.00	3.00	2.02	0.79	345
郊外Uターン	1.00	2.00	5.00	3.14	0.86	1.00	1.00	3.00	1.62	0.76	37
Jターン	1.00	2.00	3.00	2.49	0.86	0.00	1.00	2.00	1.51	0.71	35
Iターン	0.00	1.00	3.00	1.85	0.63	0.00	1.00	2.00	1.16	0.52	111
その他の県内出身者	0.00	2.00	3.00	2.05	0.74	0.00	1.00	2.00	1.52	0.68	247
合計	1.00	2.00	4.00	2.63	0.80	0.00	1.00	3.00	1.82	0.74	1288

以上のグループ差の、属性を統制した状態での統計的有意性を検討するため、ゼロ過剰ポアソン回帰分析を行った。表 17 にゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果を、表 18 に予測値を、それぞれ示した。以下では、主として予測値を元に議論する。ただし、予測値と実測値は、特にゼロの確率が大きく異なる点には注意がいる。表 18 と 19 からわかるのは、まず、Iターンで、2つの相談ネットワークのいずれもが存在しない確率が高いことである。実に、Iターンの3割が、相談ネットワークを持たないし、1/3以上が、悩みを話す相手を持たない。その他の県内出身者も、相談ネットワークがないか、小さいか、どちらかの傾向がある。地域外からの移住者は、相談したり、悩みを話したりといった相手を得にくい状況があり、これは、中南津軽地域と同様であるが、その程度が強いことになる。

一方、移住者であっても、東青津軽内移動では、青森市定住者よりもネットワーク・サイズが大きい傾向がある。一つの可能性として、青森市が県内最大の中核都市であるがゆえに、高校、高等教育への通学時に、すでに青森市内にネットワークを形成している人々が多くいることが考えられる。ただ、青森市定住のネットワーク・サイズは、前調査で基準値となっていた弘前定住よりも小さい。このことが、東青津軽内移動のネットワーク・サイズが相対的に大きいという結論につながったのにすぎないという可能性も残る。すでに見てきたように、青森市定住は、アクティブ友人数も郊外定住やUターンよりも少ない傾向にある。この、青森市定住のネットワークの小ささは相談ネットワークについても一貫しており、このことの影響を考慮する必要はあるだろう。

表 17 相談ネットワーク・サイズのゼロ過剰ポアソン回帰分析（近距離）

	相談		悩み	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
青森市定住 (ref)				
郊外定住	-0.75	0.02	0.10	0.13
東青津軽内移動	0.13	0.22 *	-0.21	0.27 *
青森市Uターン	-0.03	0.09 +	-0.34 +	0.01
郊外Uターン	-0.28	0.15	-4.59	-0.28 *
Jターン	-0.22	-0.15	0.16	-0.28
Iターン	0.73 ***	-0.13	0.76 ***	-0.23 +
その他の県内出身者	0.37 *	-0.18 **	0.17	-0.21 **
年齢	0.01	0.00	0.01	0.00
性別（女性=1）	-0.60 ***	0.17 ***	-0.75 ***	0.27 ***
学歴				
高校 (ref)				
専門・短大・高専	0.00	0.06	0.08	0.17 **
大学・大学院	0.21	0.08	0.30	0.18 *
就業形態				
無職 (ref)				
正規雇用	0.03	0.19 ***	0.23	0.15 *
非正規雇用	-0.14	0.07	0.06	0.05
自営業・自由業	0.01	0.26 ***	-0.22	0.20 *
配偶者あり	0.03	0.06	-0.10	-0.02
子供あり	-0.37 *	-0.16 **	-0.20	-0.07
定数	-1.00 **	0.84 ***	-0.91 *	0.41 **
尤度比カイ二乗値(16)	71.45***		67.07***	
Vuongテストのz値	6.41***		4.82***	
回答者数	1229		1230	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 18 相談ネットワーク・サイズの予測値（近距離）

移動パターン	相談						悩み					
	予測値		vs. 青森市 定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 青森市 定住		vs. 郊外定住	
	0の 確率	人数	0予 測	人数 予測	0予 測	人数 予測	0の 確率	人数	0予 測	人数 予測	0予 測	人数 予測
青森市定住	0.11	2.72	ref	ref			0.13	1.94	ref	ref		
郊外定住	0.02	3.04			ref	ref	0.16	2.16			ref	ref
東青津軽内移動	0.14	3.28		++			0.09	2.66		++		
青森市Uターン	0.11	3.00		+			0.07	2.09	-			
郊外Uターン	0.07	3.32					0.00	1.69		--		--
Jターン	0.07	2.44					0.17	1.40				-
Iターン	0.31	1.85	+++		+++		0.36	1.13	+++	-	+	--
その他の県内出身者	0.20	2.04	++	---	++	-	0.18	1.49		--		--

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

ここでも、居住年数と移動パターンとの交互作用を分析することを通して、地域での生活期間がサポート・ネットワークに与える効果を検討する。前調査の報告書と一貫性を保つため、2つの相談ネットワークの有無にのみ焦点を当てて、プロビット回帰分析での検討を行った。プロビット回帰分析の結果を表 19 に、居住年数と移動パターンの交互作用が有意になった相談相手の存在確率についての予測値を表 20 に、それぞれ示した。

表 20 からわかるように、居住年数と相談相手の存在確率が関係しているのは青森市 U ターンだけであり、居住年数が長いほど、存在確率が高くなっている。しかし、他の移住者では、このような関係はない。青森市への U ターンを除けば、移住からどれだけの時間が経ったとしても、地域内に相談相手がいらないという状況が変わることはないのである。ただし、相談相手がいらない確率が高いのは、I ターンだけである。県内出身者、その他の県内出身者がやや存在確率が低いものの、8 割以上が近隣に相談ネットワークを有しているのであり、問題は小さい。県外からの移住者だけが、孤立の傾向にあるのである。

表 19 相談ネットワークの有無を目的変数としたプロビット回帰分析による居住年数と移動パターンの交互作用の検討

	相談	悩み
移動パターン		
青森市 U ターン (ref)		
郊外 U ターン	0.24	0.88
J ターン	-0.35	-0.64
I ターン	-1.23 ***	-1.21 ***
その他の県内出身者	-0.52 *	-0.65 **
居住年数 (中心化)		
	0.02 *	0.01
居住年数 × 移動パターン		
青森市 U ターン (ref)		
郊外 U ターン	-0.02 *	-0.14 *
J ターン	-0.02	-0.01
I ターン	-0.02 *	-0.01
その他の県内出身者	-0.01	-0.01
年齢	-0.02 **	-0.01 *
性別 (女性 = 1)	0.57 ***	0.56 ***
学歴		
高校 (ref)		
専門・短大・高専	0.09	0.03
大学・大学院	-0.42 *	-0.40 *
就業形態		
無職 (ref)		
正規雇用	-0.42 *	-0.38 *
非正規雇用	-0.22	-0.12
自営業・自由業	-0.44 *	-0.13
配偶者あり	-0.13	-0.01
子供あり	0.26	0.13
定数	2.44 ***	1.73 ***
尤度比カイ二乗値 (18)	82.50***	100.71***
分散説明率	.13	.14
回答者数	603	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

J ターンは、人数が少なく、誤差が大きいため、分析ができない。

表 20 居住年数別の悩み相談相手の存在確率の予測値

移動パターン	移住後10年			移住後30年			居住年数の傾き
	予測値	vs. 青森市 Uターン	vs. 郊外 Uターン	予測値	vs. 青森市 Uターン	vs. 郊外 Uターン	
青森市Uターン	0.82	ref	--	0.91	ref		++
郊外Uターン	0.95	++	ref	0.95		ref	
Jターン	0.86			0.86			
Iターン	0.58	---	---	0.58	---	---	
その他の県内出身者	0.70	-	---	0.80	--	--	

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

(2) 道具的ネットワーク

続いて、表 21 から 23 に、近距離の道具的サポート・ネットワークのサイズの集計、ゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果、その予測値を、それぞれ示した。表 21 からわかるように、道具的ネットワークのサイズは、手助け、オカネともに小さい。前調査と比較すると、特に定住者で、サイズが小さい傾向がある。また、Iターンで、前調査よりも存在確率が低い。

表 21 道具的ネットワークのサイズ（近距離）

	手助け					オカネ					回答者数
	p25	p50	p75	平均	存在確率	p25	p50	p75	平均	存在確率	
青森市定住	0.00	2.00	2.00	1.60	0.72	0.00	0.00	1.00	0.72	0.43	428
郊外定住	1.00	2.00	2.00	1.79	0.77	0.00	0.00	1.00	0.64	0.41	39
東青津軽内移動	0.00	1.50	3.00	1.67	0.67	0.00	0.50	2.00	1.11	0.50	46
青森市Uターン	0.00	2.00	2.00	1.81	0.75	0.00	1.00	2.00	0.94	0.57	344
郊外Uターン	0.00	1.00	3.00	1.89	0.65	0.00	0.00	1.00	0.76	0.43	37
Jターン	0.00	1.00	2.00	1.20	0.60	0.00	0.00	1.00	0.71	0.46	35
Iターン	0.00	0.00	2.00	1.05	0.47	0.00	0.00	0.00	0.46	0.22	111
その他の県内出身者	0.00	1.00	2.00	1.07	0.52	0.00	0.00	1.00	0.48	0.33	246
合計	0.00	1.00	2.00	1.51	0.66	0.00	0.00	1.00	0.72	0.43	1286

表 22 と 23 からは、手助け、オカネのいずれについても、Iターンが青森市定住よりもネットワークの存在確率が低いことがわかる。その他の県内出身者も、少なくともネットワークのサイズが小さい。相談ネットワークと同様に、東青津軽地方では、地域外からの移住者が、孤立気味であることになる。青森市定住と比較したとき、青森市Uターンのほうが、オカネを借りられる相手がいる確率が高いが、これは、前調査と共通である。Uターンしてくる人々は、自分たちよりも資源が多い他者、人数の少なさから言って、おそらくは両親や親戚を経済的に頼りにできる状態があるからこそ、Uターン

してくるのだと考えられる。

表 22 道具的ネットワーク・サイズのゼロ過剰ポアソン回帰分析（近距離）

	手助け		オカネ	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
青森市定住 (ref)				
郊外定住	-0.37	0.04	-0.03	-0.08
東青津軽内移動	0.34	0.11	0.13	0.48 *
青森市Uターン	-0.26	0.03	-0.96 ***	-0.09
郊外Uターン	0.14	0.20	-5.37	-0.37 +
Jターン	0.48	-0.14	-0.78	-0.34
Iターン	0.89 ***	-0.10	1.08 ***	0.33 +
その他の県内出身者	0.66 ***	-0.22 *	0.24	-0.32 *
年齢	0.01	0.00	0.00	0.00
性別（女性=1）	-0.76 ***	-0.08	-0.56 **	0.08
学歴				
高校 (ref)				
専門・短大・高専	-0.14	0.14 *	0.08	0.34 **
大学・大学院	0.07	0.13	0.34	0.27 *
就業形態				
無職 (ref)				
正規雇用	-0.07	-0.02	-0.16	0.03
非正規雇用	-0.16	-0.14	-0.78 **	-0.27 *
自営業・自由業	-0.17	0.20 +	-0.98 *	-0.10
配偶者あり	-0.23	-0.01	0.02	0.12
子供あり	-0.16	-0.10	-0.24	-0.16
定数	-0.60 +	0.63 ***	0.21	-0.07
尤度比カイ二乗値(16)	35.80**		38.72**	
Vuongテストのz値	5.26***		5.76***	
回答者数	1228		1230	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 23 道具的ネットワーク・サイズの予測値（近距離）

移動パターン	手助け				オカネ			
	予測値		vs. 青森市定住		予測値		vs. 青森市定住	
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0予測	人数予測
青森市定住	0.16	1.70	ref	ref	0.34	0.76	ref	ref
郊外定住	0.08	1.92		ref ref	0.33	0.71		ref ref
東青津軽内移動	0.25	1.69			0.39	1.13	++	
青森市Uターン	0.10	1.85			0.09	0.96	---	
郊外Uターン	0.19	1.98			0.00	0.80	-	
Jターン	0.30	1.23		+	0.12	0.72		
Iターン	0.45	1.00	+++	+++	0.75	0.40	+++	-
その他の県内出身者	0.36	1.03	+++	-- +++	0.43	0.47	--	

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

表 24 に、居住年数と移動パターンとの交互作用を検討するゼロ過剰ポアソン回帰分

析の結果を示した。表 25 と 26 には、それぞれの予測値を示している。表 24 からわかるように、手助けネットワークについては、存在確率と人数予測のいずれについても交互作用が確認され、オカネ・ネットワークについては、人数予測についてのみ、交互作用が確認される。

表 24 手助けネットワークのサイズを目的変数としたゼロ過剰ポアソン回帰分析とオカネ・ネットワークの存在確率を目的変数としたプロビット回帰分析による居住年数と移動パターンの交互作用の検討

	手助け		オカネ	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
青森市Uターン(ref)				
郊外Uターン	0.30	0.37 *	0.55	0.29
Jターン	0.73	-0.33	-0.14	-0.50
Iターン	1.50 ***	0.33 *	2.29 **	0.48 *
その他の県内出身者	0.96 *	-0.30	1.86 *	-0.20
居住年数(中心化)	-0.02 *	0.00	-0.06 *	0.00
居住年数×移動パターン				
青森市Uターン(ref)				
郊外Uターン	0.07 *	0.02 **	0.18	0.04 *
Jターン	0.00	-0.02	-0.05	-0.03
Iターン	0.02 †	0.03 ***	-0.01	0.00
その他の県内出身者	0.00	-0.01	0.03	0.00
年齢	0.02 †	0.00	0.03	0.00
性別(女性=1)	-0.76 ***	-0.14	-0.43	0.16
学歴				
高校(ref)				
専門・短大・高専	-0.38 †	0.06	-0.18	0.25 †
大学・大学院	0.09	0.00	-0.07	0.07
就業形態				
無職(ref)				
正規雇用	0.32	-0.08	0.14	0.01
非正規雇用	0.38	-0.20	-0.32	-0.38 *
自営業・自由業	0.44	0.11	0.51	0.09
配偶者あり	-0.12	-0.05	-1.23 **	-0.37 *
子供あり	-0.21	-0.11	0.35	0.09
定数	-2.06 **	0.95 ***	-2.94 *	0.25
尤度比カイ二乗値(18)	44.47***		40.80***	
Vuongテストのz値	4.49***		5.68***	
回答者数	601		603	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

まず、表 25 からわかるように、居住年数を重ねることで、手助けネットワークが拡大していくのは、郊外UターンとIターンである。注目に値するのはIターンであり、移住後10年では青森市Uターンよりも有意にネットワークが小さかったのが、移住後30年では同等の水準までネットワークを拡大している。このことは、具体的な手助けという関係については、県外からの移住者が、非常にゆっくりではあるが、地域社会でネットワークを拡大している可能性を示唆する。ただし、ネットワークの存在確率は居

住年数と関係しない。つまり、孤立者の比率は、依然として高いままなのである。ネットワークの拡大は、Iターン者の一部、それも半数に満たない範囲で起きているのに過ぎない。

表 26 からわかるように、オカネ・ネットワークについては、傾向が大きく異なる。Iターンは、移住後 10 年では、ネットワークの存在確率が 1 割程度であるのに、移住後 30 年では、この値が五割程度まで上がる。孤立状態が解消されたとは言いがたいが、Iターンが地域に重要なサポート資源を獲得していつていることは示唆される。とはいえ、やはり平均人数は 1.48 人であるから、この内容が誰であるのかは重要な問題である。結婚相手の親族などが追加されただけという可能性はあり、この場合、個人的なネットワークが拡大されたとは言えない。関係性の内実の検討は、今後の課題であろう。

表 25 居住年数別の手助けネットワークの存在確率とネットワーク・サイズの予測値

移動パターン	移住後10年						移住後30年						居住年数の傾き
	予測値		vs. 青森市 Uターン		vs. 郊外 Uターン		予測値		vs. 青森市 Uターン		vs. 郊外 Uターン		
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	
青森市Uターン	0.13	1.82	ref	ref			0.06	1.96	ref	ref			-
郊外Uターン	0.01	1.75			ref	ref	0.07	2.60		+	ref	ref	+++
Jターン	0.37	1.41	+			+	0.20	1.27					
Iターン	0.43	0.86	+++	--	++		0.44	1.48	+++				+++
その他の県内出身者	0.43	1.16	+++		++		0.27	1.17	+++				

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。
0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

表 26 居住年数別のオカネ・ネットワークの存在確率とネットワーク・サイズの予測値

移動パターン	移住後10年						移住後30年						居住年数の傾き
	予測値		vs. 青森市 Uターン		vs. 郊外 Uターン		予測値		vs. 青森市 Uターン		vs. 郊外 Uターン		
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	
青森市Uターン	0.13	0.93	ref	ref			0.01	1.02	ref	ref			--
郊外Uターン	0.00	0.62			ref	ref	0.01	1.22			ref	ref	++
Jターン	0.43	0.80					0.01	0.69					
Iターン	0.90	0.17	+++	++		++	0.48	0.87	+++	++			---
その他の県内出身者	0.52	0.43	+++				0.27	0.62	++				

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。
0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

(3) 共行動ネットワーク

続いて、表 27、28、29 に、近距離の共行動ネットワーク・サイズの集計、ゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果、予測値を示した。目標共有よりも娯楽共有の存在確率が高く、ネットワーク・サイズも大きい傾向があることは、前調査の結果と変わらない。東青津

軽内移動では、目標共有の平均値が非常に大きいですが、3つの四分位点の値や存在確率から示唆されるように、この値は外れ値によって生じているのにすぎない。ただし、この外れ値を除いても、東青津軽内移動の平均値は 1.96 程度と、8つのグループの中で、もっとも大きなネットワーク・サイズを示す。

表 27 共行動に関わるネットワークのサイズ (近距離)

	目標共有					娯楽共有					回答者数
	p25	p50	p75	平均	存在確率	p25	p50	p75	平均	存在確率	
青森市定住	0.00	0.00	1.00	0.80	0.28	0.00	2.00	3.00	2.64	0.71	428
郊外定住	0.00	0.00	1.00	1.77	0.33	0.00	2.00	4.00	2.92	0.74	39
東青津軽内移動	0.00	0.00	1.00	3.00	0.28	1.00	2.00	5.00	3.04	0.76	46
青森市Uターン	0.00	0.00	1.00	1.15	0.33	0.00	2.00	4.00	2.89	0.73	345
郊外Uターン	0.00	0.00	1.00	1.14	0.32	0.00	3.00	5.00	3.54	0.70	37
Jターン	0.00	0.00	2.00	1.60	0.29	0.00	1.00	3.00	2.17	0.69	35
Iターン	0.00	0.00	1.00	1.29	0.31	0.00	1.00	3.00	2.28	0.56	110
その他の県内出身者	0.00	0.00	1.00	1.35	0.31	0.00	2.00	3.00	2.45	0.66	247
合計	0.00	0.00	1.00	1.18	0.31	0.00	2.00	3.00	2.67	0.70	1287

表 28 共行動ネットワーク・サイズのゼロ過剰ポアソン回帰分析 (近距離)

	目標共有		娯楽共有	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
青森市定住 (ref)				
郊外定住	-0.12	0.45 **	-0.44	0.07
東青津軽内移動	0.12	0.97 ***	-0.24	0.14
青森市Uターン	-0.15	0.09	-0.23 *	0.04
郊外Uターン	-0.17	-0.03	-0.40	0.27 **
Jターン	0.07	0.68 ***	-0.21	-0.28 *
Iターン	0.07	0.45 ***	0.39 *	0.03
その他の県内出身者	0.03	0.32 ***	0.09	0.00
年齢	0.01	0.02 ***	0.02 ***	0.00
性別 (女性 = 1)	-0.43 ***	-0.48 ***	-0.70 ***	-0.09 *
学歴				
高校 (ref)				
専門・短大・高専	-0.18 *	0.00	-0.10	0.15 ***
大学・大学院	0.07	-0.10	0.05	0.01
就業形態				
無職 (ref)				
正規雇用	-0.17	0.26 **	-0.09	0.19 ***
非正規雇用	0.03	0.18 *	-0.08	-0.04
自営業・自由業	-0.86 ***	-0.23 *	-0.33 *	0.33 ***
配偶者あり	-0.25 *	-0.18 *	0.09	0.00
子供あり	0.13	0.03	-0.28 *	-0.14 **
定数	0.71 **	0.37 *	-0.74 **	1.17 ***
尤度比カイ二乗値(16)	232.42***		109.99***	
Vuongテストのz値	7.15***		9.04***	
回答者数	1227		1229	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 28 と 29 は、こうした外れ値を取り除いて分析した結果を示しているが、やはり、東青津軽内移動の目標共有ネットワークは、青森市定住よりもサイズが大きい。興味深いのは、郊外定住は例外であるが、目標共有ネットワークのサイズは、出身地と現住地が異なる回答者で大きいと言うことである。青森市定住、青森市Uターン、郊外Uターンは、いずれも目標共有ネットワークが小さい。存在確率が低いことを考えれば、目標を共有する人々の強固なネットワークが存在しているとは言いがたいが、3割程度の回答者は、目標を共有する誰かしらを得ているし、移動者にこそ、そうした他者が多いことになる。このパターンは、差異はあるものの、前調査の結果に近い。

表 29 共行動ネットワーク・サイズの予測値（近距離）

移動パターン	目標共有						娯楽共有					
	予測値		vs. 青森市 定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 青森市 定住		vs. 郊外定住	
	0の 確率	人数	0予 測	人数 予測	0予 測	人数 予測	0の 確率	人数	0予 測	人数 予測	0予 測	人数 予測
青森市定住	0.69	0.85	ref	ref	---	0.28	2.59	ref	ref			
郊外定住	0.64	1.53		+++	ref	ref	0.16	3.25			ref	ref
東青津軽内移動	0.73	1.95		+++		+++	0.21	3.28				
青森市Uターン	0.63	1.10				--	0.21	2.96	--			
郊外Uターン	0.63	0.99				--	0.17	3.96		+++		
Jターン	0.71	1.56		+++			0.22	2.13		--		--
Iターン	0.71	1.23		+++			0.43	2.13	++		+++	
その他の県内出身者	0.70	1.13		+++			0.32	2.47				+

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

娯楽共有については、Iターンで存在確率が低く、Jターンでサイズが小さいことがわかる。前調査ではIターンの娯楽共有ネットワークのサイズが大きい傾向があり、この面で、県外出身者が近隣に豊かなネットワークを形成できていることが示唆されていたが、このことは、東青津軽地域では確認されず、むしろ、突出して孤立する確率が高いという結果となった。Uターン者のパターンははっきりとしないが、郊外Uターンのネットワーク・サイズがかなり大きい。このことも、前調査とは異なる。

表 30 に、居住年数と移動パターンの交互作用を投入したゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果を示した。交互作用が有意になるのは目標共有ネットワークの、人数予測だけなので、目標共有ネットワークについての予測値を、表 31 に示した。居住年数の傾きを示唆するパターンと、予測値の値は、直観的には食い違う。これは、ネットワーク・サイズの平均値は、ゼロの確率が下がれば増加するからである。いずれにしる明らかなのは、青森市Uターン、郊外Uターン、その他の県内出身者について、居住年数が長くなるほど、ネットワーク・サイズが小さくなることである。存在確率は変化していないことから、目標を共有する相手が、居住年数の経過とともに少数に集中していく可能性が

ある。居住後 30 年を経過すれば、年齢もそれなりに高くなっており、ライフスタイルが変化している可能性もあるだろう。

表 30 共行動ネットワークのサイズを目的変数としたゼロ過剰ポアソン回帰分析による居住年数と移動パターンの交互作用の検討

	目標共有		娯楽共有	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
青森市Uターン(ref)				
郊外Uターン	-0.36	0.09	-0.54 [*]	0.19 [*]
Jターン	0.08	0.69 ^{**}	-0.28	-0.54 [*]
Iターン	0.15	0.68 ^{***}	0.05	0.05
その他の県内出身者	0.19	0.69 ^{***}	0.43 [*]	-0.05
居住年数(中心化)	-0.01	-0.02 ^{**}	-0.01	0.00
居住年数×移動パターン				
青森市Uターン(ref)				
郊外Uターン	-0.03	-0.01	0.01	0.00
Jターン	-0.02	0.02	0.00	-0.02
Iターン	-0.01	0.01	-0.02 [*]	0.00
その他の県内出身者	0.00	0.02 ^{**}	0.01	0.00
年齢	0.02 [*]	0.03 ^{***}	0.03 ^{***}	0.01 ^{***}
性別(女性=1)	-0.51 ^{***}	-0.26 ^{**}	-0.65 ^{***}	-0.06
学歴				
高校(ref)				
専門・短大・高専	-0.11	-0.35 ^{***}	-0.01	0.15 [*]
大学・大学院	0.24	-0.22	0.32 [*]	0.00
就業形態				
無職(ref)				
正規雇用	0.01	0.71 ^{***}	0.01	0.03
非正規雇用	0.20	0.51 ^{**}	0.03	-0.31 ^{***}
自営業・自由業	-0.32	0.35 [*]	-0.39	0.09
配偶者あり	-0.33 [*]	-0.16	0.19	-0.14 [*]
子供あり	0.18	-0.02	-0.39 [*]	-0.15 [*]
定数	-0.34	-0.70	-1.96 ^{***}	1.07 ^{***}
尤度比カイ二乗値(18)	151.47 ^{***}		84.09 ^{***}	
Vuongテストのz値	5.02 ^{***}		6.30 ^{***}	
回答者数	602		603	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Jターンは、人数が少なく、誤差が大きいため、分析ができない。

表 31 居住年数別の目標共有ネットワークの存在確率とネットワーク・サイズの予測値

移動パターン	移住後10年						移住後30年						居住年数の傾き	
	予測値		vs. 青森市 Uターン		vs. 郊外 Uターン		予測値		vs. 青森市 Uターン		vs. 郊外 Uターン			
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測		
青森市Uターン	0.65	1.26	ref	ref			0.60	0.92	ref	ref			---	
郊外Uターン	0.76	1.20			ref	ref	0.50	1.32			ref	ref	-- ---	
Jターン	0.83	0.68					0.66	1.46	+++			+		
Iターン	0.75	1.38		+++			0.66	1.48	+++			++		
その他の県内出身者	0.73	1.20					0.67	1.41	+++			++	--	

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。
0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

(4) 就職援助ネットワーク

表 32 から 34 に、近距離の就職援助ネットワーク・サイズの集計、ゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果、予測値を示した。就職の世話という、非常に重要で希少な資源の提供が期待できる相手と関係があり、しかもそれが30分以内の距離にいるという回答者は、前調査同様に少ない。就職アドバイスも同じである。

表 32 就職援助ネットワークのサイズ（近距離）

	就職の世話					就職アドバイス					回答者数
	p25	p50	p75	平均	存在確率	p25	p50	p75	平均	存在確率	
青森市定住	0.00	0.00	0.00	0.50	0.23	0.00	0.00	2.00	1.00	0.38	428
郊外定住	0.00	0.00	1.00	0.38	0.26	0.00	0.00	1.00	0.46	0.28	39
東青津軽内移動	0.00	0.00	0.00	0.50	0.24	0.00	0.00	1.00	0.70	0.35	46
青森市Uターン	0.00	0.00	1.00	0.67	0.30	0.00	0.00	2.00	1.06	0.42	344
郊外Uターン	0.00	0.00	0.00	0.70	0.24	0.00	0.00	1.00	0.81	0.35	37
Jターン	0.00	0.00	0.00	0.20	0.06	0.00	0.00	1.00	0.66	0.26	35
Iターン	0.00	0.00	0.00	0.39	0.17	0.00	0.00	0.00	0.68	0.22	110
その他の県内出身者	0.00	0.00	0.00	0.42	0.23	0.00	0.00	1.00	0.74	0.33	247
合計	0.00	0.00	0.00	0.52	0.24	0.00	0.00	1.00	0.90	0.36	1286

表 33 就職援助ネットワーク・サイズのゼロ過剰ポアソン回帰分析（近距離）

	就職の世話		就職アドバイス	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
青森市定住 (ref)				
郊外定住	-0.51	-0.85 ⁺	-0.08	-0.73 ⁺
東青津軽内移動	-0.10	-0.09	-0.08	-0.32
青森市Uターン	-0.30 [*]	-0.01	-0.15	-0.02
郊外Uターン	-0.15	0.22	-0.19	-0.16
Jターン	0.92 [*]	0.63	0.25	0.00
Iターン	0.25	0.05	0.59 ^{***}	0.28 [*]
その他の県内出身者	-0.09	-0.34 [*]	0.14	-0.04
年齢	0.01 [*]	0.01	0.01	0.00
性別（女性=1）	-0.31 ^{**}	-0.27 [*]	-0.45 ^{***}	-0.14 ⁺
学歴				
高校 (ref)				
専門・短大・高専	0.00	0.09	-0.06	0.06
大学・大学院	0.03	0.12	0.18	0.31 ^{**}
就業形態				
無職 (ref)				
正規雇用	-0.18	-0.14	-0.16	0.10
非正規雇用	-0.12	-0.09	-0.11	0.13
自営業・自由業	-0.36 ⁺	0.04	-0.36 ⁺	0.15
配偶者あり	-0.03	-0.12	0.04	-0.04
子供あり	-0.18	-0.09	-0.10	-0.18 ⁺
定数	0.54 [*]	0.63 [*]	0.29	0.93 ^{***}
尤度比カイ二乗値(16)	25.13 ⁺		40.72 ^{***}	
Vuongテストのz値	8.41 ^{***}		9.07 ^{***}	
回答者数	1229		1226	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 34 就職援助ネットワーク・サイズの予測値（近距離）

	就職の世話						就職アドバイス					
	予測値		vs. 青森市 定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 青森市 定住		vs. 郊外定住	
	0の 確率	人数	0予 測	人数 予測	0予 測	人数 予測	0の 確率	人数	0予 測	人数 予測	0予 測	人数 予測
青森市定住	0.74	0.51	ref	ref			0.58	0.90	ref	ref		
郊外定住	0.55	0.37		-	ref	ref	0.54	0.47		-	ref	ref
東青津軽内移動	0.70	0.52					0.55	0.70				+
青森市Uターン	0.63	0.70	--			+	0.52	1.00				
郊外Uターン	0.68	0.75				++	0.50	0.90				
Jターン	0.94	0.22	++		+++	++	0.67	0.70				
Iターン	0.81	0.38			+	+	0.78	0.61	+++	++	+	++
その他の県内出身者	0.71	0.40		--			0.63	0.76				+

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

表 33 と 34 からわかるのは、まず、青森市Uターンでは、ネットワークの存在確率が高いことである。このことは前調査と共通する。やはり、Uターン者は、一定の、就

職に関するサポート源を有しているからこそ、Uターンしてくるという可能性が示唆される。一方、Jターンでは存在確率がきわめて低い反面、Iターンは青森市定住と比較しても差がない。このことは、前調査とは異なる。

就職アドバイスについては、Iターンのネットワーク・サイズが大きい。このことも、前調査とは異なる。ネットワークの存在確率は低く、しかし、存在する場合には、ネットワークが大きいというのは、少数のIターン者に、サポート資源が集中していることを意味する。ごく少数の、アドバイスを受けやすい環境にいるIターン者と、大多数の、アドバイスを受けにくい環境にいるIターン者が二極化していることになる。

結論としては、やはりIターン者が就職について、インフォーマルなサポートを受けられる状況にいるとは言いがたい。Uターン者とは、この点で違いがある。ただし、中津軽地域へのIターン者と比較すると、状況はよいと判断できる。青森市の中核としての機能が、より高いことに起因する差だと考えられる。

表35には、居住年数と移動パターンの交互作用を投入したゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果を示した。交互作用が有意だったのは就職アドバイスのネットワーク・サイズを目的変数としたときだけだったので、表36に、予測値を示した。居住年数が有意であるのは、青森市Uターンだけであり、居住年数が長くなるほど、ネットワークの存在確率は高くなる一方、ネットワーク・サイズは小さくなっていった。つまり、青森市Uターンでは、なんらかの、就職に関するアドバイザを地域社会に獲得できる人は増える一方で、その人数は少数になっていくという状況がある。

表 35 就職援助ネットワークのサイズを目的変数としたゼロ過剰ポアソン回帰分析による居住年数と移動パターンの交互作用の検討

	就職の世話		就職アドバイス	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
青森市Uターン(ref)				
郊外Uターン	0.06	0.33	0.10	0.06
Jターン	2.95*	-0.25	1.00	-0.57
Iターン	0.68*	0.40	1.10***	1.09***
その他の県内出身者	-0.12	-0.58*	0.57*	0.27
居住年数(中心化)	-0.02*	-0.01	-0.02*	-0.02*
居住年数×移動パターン				
青森市Uターン(ref)				
郊外Uターン	0.01	0.01	0.01	0.02*
Jターン	0.10	-0.03	0.04	-0.03
Iターン	0.01	0.01	0.02*	0.04**
その他の県内出身者	0.00	0.01	0.02*	0.02*
年齢	0.03**	0.02*	0.01	0.01
性別(女性=1)	-0.41*	-0.41*	-0.40**	-0.13
学歴				
高校(ref)				
専門・短大・高専	0.11	0.08	-0.02	0.05
大学・大学院	0.11	0.10	0.22	0.36*
就業形態				
無職(ref)				
正規雇用	-0.05	-0.05	-0.01	0.12
非正規雇用	-0.19	-0.13	-0.11	-0.15
自営業・自由業	-0.30	-0.24	-0.25	-0.20
配偶者あり	0.20	0.02	0.25	0.07
子供あり	-0.36*	-0.17	-0.08	-0.20
定数	-1.17*	-0.36	-0.63	0.19
尤度比カイ二乗値(18)	53.08***		49.84***	
Vuongテストのz値	6.16***		6.58***	
回答者数	602		600	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Jターンは、人数が少なく、誤差が大きいため、分析ができない。

表 36 居住年数別の就職アドバイス・ネットワークの存在確率とネットワーク・サイズの予測値

移動パターン	移住後10年						移住後30年						居住年数の傾き	
	予測値		vs. 青森市Uターン		vs. 郊外Uターン		予測値		vs. 青森市Uターン		vs. 郊外Uターン			
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測		
青森市Uターン	0.59	1.00	ref	ref			0.42	0.97	ref	ref			--	--
郊外Uターン	0.58	0.73			ref	ref	0.46	0.92			ref	ref		
Jターン	0.57	1.08					0.75	0.26						
Iターン	0.79	0.62	+++			+	0.80	0.89	+++	+++	+++	+++		
その他の県内出身者	0.62	0.78					0.62	0.78	++					

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

ただし、移住後 30 年に至っても、青森市Uターンのうち、就職に関するアドバイスを受けられる相手が存在するのは、6 割程度に過ぎないことには注意がいる。就職に関わる情報という資源を、地域社会から得られる者は、当たり前であるが多くはない。

(5) 近距離サポート関係のまとめ

ここでは、30 分以内の近距離にいる他者からソーシャル・サポートを得られているときに、人々が地域社会に十分に統合されていると考えて、実際のサポート・ネットワークの存在確率と、そのサイズを検討した。青森市を中心とした東青津軽地区の住民を対象として検討したとき、明瞭なのは、I ターン者が近距離にサポート・ネットワークを持つ確率が低く、持っていたとしても、そのサイズが小さいことだった。中南津軽地域で行われた前調査の結果と比較して、定住者との差が小さいように感じられる結果も得られたが、それは、比較対照となった青森市の定住者のネットワークが、青森市の都市的な性格を反映してか、比較的小さいものに留まっていることから来ているのにすぎない。前調査の結論と同様で、やはり、県外からの流入者が、地域社会に統合されているとは言いがたい。

ただし、これと反する結果も得られている。目標共有については、I ターン者が、青森市定住者よりも大きなネットワークを有していたのである。このことは、前調査とは異なる。なんらかの活動をともにする相手を、県外からの移住者が得ている可能性が示唆されたと言える。今回の調査からは、この目標が何であるのかは不明であり、単に、仕事上の関係である可能性も残る。この関係性は、居住年数が延びても増加しないし、なにより、目標共有ネットワークのサイズは、比較対照となる青森市定住のグループでもっとも小さいのである。存在確率も、サイズも、前調査と比較して大きいとは言いがたく、青森市への I ターン者を特徴づけるのが、目標を共有する他者とのネットワークであるとは言いがたい。

7. 遠距離のサポート・ネットワーク

地域社会への統合という視点から離れて、個人的な適応という視点から考えたとき、移住者の置かれた状況はどのようなものだろうか。言うまでもないが、すべてのサポートを、地域社会から得なければ、適応的な生活が行えないわけではない。相談相手、経済的な援助の相手は、遠方にいても、その機能を十分に果たすことができるし、ICT が普及した現代社会では、娯楽とて、インターネット経由で遠隔地にいる他者と楽しむことができる。近距離の関係が欠落しているとしても、個人的な生活の質が低いとは限らない。

この節では、1 時間以上の遠距離にいる他者からなるサポート・ネットワークを分析することを通して、前節の分析の結果を補完する。

(1) 遠距離の相談ネットワーク

表 37 から 39 に、遠距離の相談ネットワーク・サイズの分布、ゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果、予測値を、それぞれ示した。主として予測値を示した表 39 を用いて解釈をしていくと、以下のことがわかる。

表 37 相談に関わるネットワークのサイズ (遠距離)

	困ったときに相談					悩みを話せる					回答者数
	p25	p50	p75	平均	存在確率	p25	p50	p75	平均	存在確率	
青森市定住	0.00	1.00	2.00	1.43	0.52	0.00	0.00	2.00	1.15	0.49	426
郊外定住	0.00	0.50	2.00	1.18	0.50	0.00	0.00	1.00	0.74	0.39	38
東青津軽内移動	0.00	1.00	2.00	1.50	0.66	0.00	1.00	2.00	1.14	0.64	44
青森市Uターン	0.00	1.00	2.00	1.78	0.54	0.00	0.00	2.00	1.41	0.50	336
郊外Uターン	0.00	1.00	2.00	1.31	0.64	0.00	0.50	2.00	1.17	0.50	36
Jターン	0.00	1.00	2.00	1.61	0.73	0.00	1.00	2.00	1.52	0.67	33
Iターン	0.00	2.00	4.00	2.78	0.68	0.00	1.00	3.00	2.90	0.61	110
その他の県内出身者	0.00	2.00	3.00	2.16	0.72	0.00	1.00	3.00	1.76	0.68	244
合計	0.00	1.00	2.00	1.78	0.59	0.00	1.00	2.00	1.49	0.55	1267

表 38 相談ネットワーク・サイズのゼロ過剰ポアソン回帰分析 (遠距離)

	相談		悩み	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
青森市定住 (ref)				
郊外定住	-0.06	0.05	0.14	-0.01
東青津軽内移動	-0.49 ⁺	-0.04	-1.01 ⁺	-0.27
青森市Uターン	-0.13	0.11	-0.19	0.12
郊外Uターン	-0.79 [*]	-0.08	-0.51	0.21
Jターン	-0.84 [*]	-0.21	-0.94 ⁺	-0.10
Iターン	-0.33 [*]	0.34 ^{***}	-0.17	0.31 ^{**}
その他の県内出身者	-0.58 ^{***}	0.14 [*]	-0.58 ^{***}	0.15 ⁺
年齢	0.00	-0.01 ^{***}	0.01	-0.01 ^{***}
性別 (女性 = 1)	-0.65 ^{***}	-0.04	-0.95 ^{***}	-0.10
学歴				
高校 (ref)				
専門・短大・高専	-0.39 ^{***}	0.22 ^{***}	-0.38 ^{**}	0.32 ^{***}
大学・大学院	-0.09	0.07	-0.08	0.07
就業形態				
無職 (ref)				
正規雇用	0.23 ⁺	0.27 ^{***}	0.11	0.25 ^{**}
非正規雇用	0.16	0.15 ⁺	0.23	0.11
自営業・自由業	0.14	0.24 [*]	0.08	0.17
配偶者あり	0.09	0.04	0.09	0.10
子供あり	0.05	-0.09	0.03	-0.16 [*]
定数	0.01	1.32 ^{***}	0.03	1.04 ^{***}
尤度比カイ二乗値 (16)	167.60 ^{***}		139.76 ^{***}	
Vuongテストの z 値	7.93 ^{***}		6.51 ^{***}	
回答者数	1211		1210	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 39 相談ネットワーク・サイズの予測値（遠距離）

移動パターン	相談						悩み					
	予測値		vs. 青森市 定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 青森市 定住		vs. 郊外定住	
	0の 確率	人数	0予 測	人数 予測	0予 測	人数 予測	0の 確率	人数	0予 測	人数 予測	0予 測	人数 予測
青森市定住	0.43	1.37	ref	ref			0.44	1.09	ref	ref		
郊外定住	0.41	1.50			ref	ref	0.50	0.97			ref	ref
東青津軽内移動	0.25	1.73	-				0.12	1.31	-			-
青森市Uターン	0.38	1.66					0.37	1.38				
郊外Uターン	0.17	1.84	--			-	0.26	1.79				
Jターン	0.16	1.65	--				0.14	1.52	-			-
Iターン	0.31	2.34	--	+++			0.38	1.65			+++	
その他の県内出身者	0.23	2.14	---	++		-	0.23	1.73	---	+		--

＋と－の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の＋は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

まず、相談については、青森市Uターンを除く、県外生活経験者で存在確率が高い。そして、Iターンとその他の県内出身者で、サイズも大きい。やはり、県外の生活経験が、長距離のサポート関係を拡大していることがわかるし、長距離の移動を経て地域内に流入してきた人々も、おそらくは出身地近辺にサポート関係を維持している。

悩みネットワークについては、Iターンとその他の県内出身者でサイズが大きい傾向があり、後者は存在確率も高い。やはり、出身地近辺にいる相談相手が数値として表れたのだと考えられる。一方、青森市や郊外の出身者で見ると、定住とUターンには差がない。前調査とは異なる結果となっている。青森市出身のUターン者は、中南津軽地域のUターン者とは、流出と帰還の時期が異なっている可能性が考えられる。石黒(2012a, 2012c)で示したように、どのような機会でも移動したかによって、移動先で形成される社会関係は異なるからである。

(2) 遠距離の道具的ネットワーク

表 40 から 42 に、遠距離の道具的ネットワーク・サイズの分布、ゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果、予測値を、それぞれ示した。主として予測値を示した表 42 を用いて解釈をしていくと、以下のことがわかる。

まず、青森市定住と比較して、Iターンとその他の県内出身者では、手助け、オカネのどちらについても、ネットワークの存在確率が高い。この2つのグループは、近距離の道義的ネットワークの存在確率が低い（あるいは、ネットワーク・サイズが小さい）傾向があり、遠距離の社会関係で、道具的サポートの不足を補っていると考えられる。この結果は、前調査と一貫する。

東青津軽内移動も同様に道具的ネットワークの存在確率が高い。東青津軽内移動は近距離のオカネ・ネットワークが大きい傾向にあったため、この点について、援助が得やすい状況にいると考えられる。前調査とは異なる結果だが、弘前市よりも、青森市のほうが、広範な地域から人を引きつけているためだと考えられる。

表 40 道具的ネットワークのサイズ（遠距離）

	手助け					オカネ					回答者数
	p25	p50	p75	平均	存在確率	p25	p50	p75	平均	存在確率	
青森市定住	0.00	0.00	1.00	0.62	0.27	0.00	0.00	0.00	0.34	0.17	426
郊外定住	0.00	0.00	1.00	0.47	0.29	0.00	0.00	0.00	0.29	0.24	38
東青津軽内移動	0.00	0.00	2.00	0.82	0.48	0.00	0.00	1.00	0.55	0.36	44
青森市Uターン	0.00	0.00	1.00	0.61	0.26	0.00	0.00	0.00	0.41	0.20	336
郊外Uターン	0.00	0.00	1.00	0.86	0.28	0.00	0.00	0.00	0.50	0.22	36
Jターン	0.00	0.00	2.00	1.03	0.42	0.00	0.00	1.00	0.61	0.30	33
Iターン	0.00	0.00	2.00	1.17	0.45	0.00	0.00	2.00	0.79	0.35	110
その他の県内出身者	0.00	1.00	2.00	1.30	0.54	0.00	0.00	1.00	0.83	0.42	243
合計	0.00	0.00	1.00	0.82	0.35	0.00	0.00	1.00	0.51	0.26	1266

表 41 道具的ネットワーク・サイズのゼロ過剰ポアソン回帰分析（遠距離）

	手助け		オカネ	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
青森市定住 (ref)				
郊外定住	-0.34	-0.35	-0.72	-0.69
東青津軽内移動	-0.89 *	-0.28	-0.99 *	-0.38
青森市Uターン	-0.03	-0.01	-0.21	-0.08
郊外Uターン	-0.11	0.65 **	-0.33	0.20
Jターン	-0.44	0.08	-0.66 *	-0.06
Iターン	-0.52 **	0.04	-0.58 **	-0.04
その他の県内出身者	-0.79 ***	0.07	-0.92 ***	-0.18
年齢	0.00	-0.01 *	-0.01	-0.01 *
性別（女性 = 1）	-0.49 ***	-0.07	-0.49 ***	-0.04
学歴				
高校 (ref)				
専門・短大・高専	-0.21 *	0.31 ***	-0.38 **	0.30 *
大学・大学院	-0.04	0.23 *	-0.12	0.14
就業形態				
無職 (ref)				
正規雇用	-0.04	0.09	0.08	0.35 *
非正規雇用	-0.09	-0.18	-0.20	-0.17
自営業・自由業	0.04	-0.12	-0.06	-0.05
配偶者あり	0.14	0.06	0.08	0.13
子供あり	0.03	-0.10	0.03	0.08
定数	0.87 ***	1.03 ***	1.47 ***	0.67 *
尤度比カイ二乗値 (16)	59.40***		52.58***	
Vuongテストの z 値	6.52***		4.80***	
回答者数	1210		1211	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 42 道具的ネットワーク・サイズの予測値（遠距離）

移動パターン	手助け						オカネ					
	予測値		vs. 青森市定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 青森市定住		vs. 郊外定住	
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測
青森市定住	0.69	0.57	ref	ref			0.79	0.33	ref	ref		
郊外定住	0.56	0.57			ref	ref	0.54	0.37			ref	ref
東青津軽内移動	0.35	0.91	--				0.43	0.62	--			
青森市Uターン	0.68	0.58					0.73	0.40				
郊外Uターン	0.65	1.24		+++		++	0.69	0.61				
Jターン	0.52	0.96					0.56	0.65	-			
Iターン	0.49	0.98	---				0.59	0.62	---			
その他の県内出身者	0.39	1.23	---				0.46	0.72	---			

＋と－の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の＋は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

手助けネットワークがもっとも大きいのは郊外Uターンである。中心市である弘前へのUターンで手助けネットワークがもっとも大きかった前調査とは異なる結果であるが、これは、青森市の都市規模が大きいことから解釈できるだろう。

(3) 遠距離の共行動ネットワーク

表 43 から 45 に、遠距離の共行動ネットワークの集計結果、ゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果、予測値を、それぞれ示した。主として表 45 から結果を解釈していくと、以下のことがわかり、その内容は前調査とは大きく異なる。

まず、Iターン、その他の県内出身者という、比較的遠距離からの流入者で、ネットワークのサイズが大きい。娯楽共有については、ネットワークの存在確率も高い。Jターンは、娯楽共有のネットワーク・サイズが小さい傾向にあるが、同じ傾向である。これらのグループは、近距離でも目標共有ネットワークが大きい傾向にあり、全体として、なんらかの目標を持ち、それを共有している相手が多いようである。

表 43 共行動に関わるネットワークのサイズ（遠距離）

	目標共有					娯楽共有					回答者数
	p25	p50	p75	平均	存在確率	p25	p50	p75	平均	存在確率	
	青森市定住	0.00	0.00	0.00	0.37	0.12	0.00	0.00	2.00	1.79	
郊外定住	0.00	0.00	0.00	0.11	0.08	0.00	0.00	2.00	1.08	0.39	38
東青津軽内移動	0.00	0.00	0.00	0.52	0.16	0.00	0.00	1.00	1.23	0.41	44
青森市Uターン	0.00	0.00	0.00	0.91	0.16	0.00	0.00	2.00	2.13	0.43	336
郊外Uターン	0.00	0.00	0.00	0.36	0.11	0.00	0.00	1.50	1.14	0.28	36
Jターン	0.00	0.00	0.00	1.58	0.18	0.00	1.00	2.00	1.45	0.58	33
Iターン	0.00	0.00	0.00	3.10	0.23	0.00	1.50	5.00	4.05	0.58	110
その他の県内出身者	0.00	0.00	1.00	1.34	0.25	0.00	1.00	3.00	2.61	0.58	244
合計	0.00	0.00	0.00	0.97	0.17	0.00	0.00	2.00	2.17	0.46	1267

表 44 共行動ネットワーク・サイズのゼロ過剰ポアソン回帰分析（遠距離）

	目標共有		娯楽共有	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
青森市定住(ref)				
郊外定住	-0.46	-2.19	-0.41	-0.06
東青津軽内移動	-0.30	0.40	-0.31	-0.05
青森市Uターン	-0.18	0.07	-0.25 *	0.09
郊外Uターン	-0.19	0.67 *	-0.29	0.37 *
Jターン	-0.12	1.51 ***	-0.85 **	-0.41 *
Iターン	-0.25	0.38 *	-0.42 **	0.33 ***
その他の県内出身者	-0.46 ***	0.63 ***	-0.59 ***	0.20 **
年齢	0.01 *	0.01 *	0.02 ***	-0.02 ***
性別（女性 = 1）	-0.45 ***	-0.59 ***	-0.66 ***	-0.19 ***
学歴				
高校(ref)				
専門・短大・高専	-0.36 ***	0.28 **	-0.44 ***	0.08
大学・大学院	-0.16	-0.15	-0.08	-0.13 *
就業形態				
無職(ref)				
正規雇用	-0.25 *	0.22 *	-0.09	0.25 ***
非正規雇用	-0.15	0.34 *	-0.06	0.10
自営業・自由業	-0.43 *	0.55 ***	-0.31 *	0.10
配偶者あり	0.16	-0.41 ***	0.27 *	0.29 ***
子供あり	0.05	-0.25 *	0.04	-0.15 *
定数	1.06 ***	0.88 ***	-0.35	1.92 ***
尤度比カイ二乗値(16)	193.92***		213.63***	
Vuongテストのz値	7.52***		10.23***	
回答者数	1207			

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 45 共行動ネットワーク・サイズの予測値（遠距離）

移動パターン	目標共有						娯楽共有					
	予測値		vs. 青森市定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 青森市定住		vs. 郊外定住	
	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測	0の確率	人数	0予測	人数予測	0予測	人数予測
青森市定住	0.88	0.28	ref	ref			0.63	1.22	ref	ref		
郊外定住	0.76	0.06			ref	ref	0.47	1.66			ref	ref
東青津軽内移動	0.81	0.67					0.51	1.55				
青森市Uターン	0.84	0.41					0.53	1.69	--			
郊外Uターン	0.84	0.74		++			0.52	2.33		++		+
Jターン	0.85	1.54		+++		+	0.30	1.54	---	--		
Iターン	0.82	0.61		++			0.47	2.45	---	+++		++
その他の県内出身者	0.76	1.05	---	+++			0.40	2.44	---	+++		

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の+は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

郊外Uターンも、ネットワーク・サイズが大きい。ただし、目標共有については、ネットワーク・サイズの平均は1に満たない。この有意な差は、比較対照となる青森市定住のネットワーク・サイズが非常に小さいことから来ていると考えてよいだろう。このグループでは、目標共有、娯楽共有の平均ネットワーク・サイズが、それぞれ 0.28、1.22 にすぎず、いずれも全体で最低の値となっている。郊外も含めて、出身自治体に現在も居住している人々は、県外経験の有無に依らず、遠距離の共行動ネットワークが小さい傾向にある。

青森市定住は、近距離でも目標共有ネットワークが小さい傾向にあり、この社会的な不活発さは、市民の社会的関与を高めようとするときには、障害となるかもしれない。もちろん、掘り起こすべき、潜在的な活動者が多いという解釈も可能ではあるが。

前調査と異なるのは、属性を統制した回帰分析の予測値では、Iターンの目標共有ネットワークのサイズが突出しないことである。この違いが生じた理由は、残念ながら不明である。

(4) 遠距離の就職援助ネットワーク

表 46 から 48 に、遠距離の就職援助ネットワーク・サイズの分布、ゼロ過剰ポアソン回帰分析の結果、予測値を、それぞれ示した。全体に存在確率が低いため、p90 までも示したが、郊外UターンとJターンでは就職の世話ネットワークの値が、それでもゼロであり、これらのグループで、遠距離に就職の世話をしてくれる相手がいる者は少ない。

表 46 就職援助ネットワークのサイズ（遠距離）

	就職の世話						就職アドバイス						回答者数
	p25	p50	p75	p90	平均	存在確率	p25	p50	p75	p90	平均	存在確率	
青森市定住	0.00	0.00	0.00	1.00	0.26	0.12	0.00	0.00	0.00	2.00	0.47	0.19	426
郊外定住	0.00	0.00	0.00	1.00	0.32	0.16	0.00	0.00	0.00	1.00	0.50	0.18	38
東青津軽内移動	0.00	0.00	0.00	1.00	0.27	0.18	0.00	0.00	0.00	1.00	0.20	0.14	44
青森市Uターン	0.00	0.00	0.00	2.00	0.43	0.16	0.00	0.00	0.00	2.00	0.72	0.24	336
郊外Uターン	0.00	0.00	0.00	0.00	0.25	0.08	0.00	0.00	0.00	1.00	0.25	0.11	36
Jターン	0.00	0.00	0.00	0.00	0.30	0.09	0.00	0.00	0.00	1.00	0.36	0.15	33
Iターン	0.00	0.00	0.00	2.00	1.20	0.25	0.00	0.00	1.00	5.00	2.32	0.28	109
その他の県内出身者	0.00	0.00	0.00	2.00	0.49	0.21	0.00	0.00	1.00	2.00	0.72	0.29	243
合計	0.00	0.00	0.00	1.00	0.43	0.16	0.00	0.00	0.00	2.00	0.72	0.23	1265

表 48 の予測値からは、以下のことがわかる。まず、ネットワークが青森市定住と異なるのは、Iターンとその他の県内出身者のみである。Iターンは就職の世話、就職アドバイスのいずれについても、ネットワーク・サイズが大きい。その他の県内出身者は、いずれのネットワークも存在確率が高い。県外出身者と、地域外の出身者が、遠距離の

ネットワークを持つという、これまで同様の結果である。

表 47 就職援助ネットワーク・サイズのゼロ過剰ポアソン回帰分析（遠距離）

	就職の世話		就職アドバイス	
	0予測	人数予測	0予測	人数予測
移動パターン				
青森市定住 (ref)				
郊外定住	-0.28	0.18	-0.06	0.27
東青津軽内移動	-0.95 ⁺	-0.95 ⁺	-0.29	-1.08 ⁺
青森市Uターン	-0.24 ⁺	0.12	-0.20 ⁻	0.10
郊外Uターン	-0.10	0.34	0.01	-0.02
Jターン	0.04	0.54	0.00	0.00
Iターン	-0.33 ⁺	0.41 [*]	-0.12	0.36 ^{**}
その他の県内出身者	-0.32 [*]	0.24	-0.38 ^{**}	0.02
年齢	0.01 [*]	0.00	0.01 [*]	0.00
性別（女性 = 1）	-0.32 ^{**}	-0.38 ^{**}	-0.44 ^{***}	-0.24 [*]
学歴				
高校 (ref)				
専門・短大・高専	-0.38 ^{**}	0.01	-0.29 ^{**}	0.11
大学・大学院	-0.01	0.40 [*]	-0.03	0.01
就業形態				
無職 (ref)				
正規雇用	-0.10	0.10	-0.10	0.24 ⁺
非正規雇用	0.06	-0.03	-0.06	0.12
自営業・自由業	-0.11	-0.24	-0.10	-0.04
配偶者あり	-0.05	-0.27 ⁺	0.09	0.17
子供あり	0.18	-0.03	0.07	-0.35 ^{**}
定数	0.96 ^{***}	1.03 ^{**}	0.72 ^{**}	0.88 ^{***}
尤度比カイ二乗値(16)	41.88 ^{***}		54.21 ^{***}	
Vuongテストのz値	5.52 ^{***}		6.95 ^{***}	
回答者数	1209			

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 48 就職援助ネットワーク・サイズの予測値（遠距離）

移動パターン	就職の世話						就職アドバイス					
	予測値		vs. 青森市 定住		vs. 郊外定住		予測値		vs. 青森市 定住		vs. 郊外定住	
	0の 確率	人数	0予 測	人数 予測	0予 測	人数 予測	0の 確率	人数	0予 測	人数 予測	0予 測	人数 予測
青森市定住	0.87	0.23	ref	ref			0.87	0.23	ref	ref		
郊外定住	0.81	0.43			ref	ref	0.81	0.43			ref	ref
東青津軽内移動	0.58	0.30	-	-			0.58	0.30			-	-
青森市Uターン	0.82	0.38	-				0.82	0.38	-			
郊外Uターン	0.85	0.38					0.85	0.38				
Jターン	0.88	0.37					0.88	0.37				
Iターン	0.79	0.58	-	++			0.79	0.58			+++	
その他の県内出身者	0.79	0.48	--				0.79	0.48	--			

＋と－の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。

0予測の＋は、その関係性を持たない確率が高いことを示す点に注意。

前調査と大きく異なるのは、Uターン者のネットワークに特徴が見られないことである。中南津軽地域とは異なり、東青津軽地域の出身者は、Uターンしてきた後、もう一度県外に移動する際に、頼れる社会的な資源が多くはないという可能性がある。

8. 集団加入

東青津軽地域住民の、地域的な活動への参加を検討するために、前調査同様、10種類の集団活動に対する参加の有無を検討した。前調査と同様に、参加については「非加入」「加入」「積極的に参加」の3カテゴリで測定していたが、参加率がきわめて低い活動もあるため、「加入」と「積極的に参加」をまとめ、加入しているか、していないかのいずれかとして分析の対象とした。

表 49 と 50 に、集団参加のプロビット回帰分析の結果と、そこから算出した参加率の予測値を示した。参加率が低いグループがある氏子会、婦人会、学童／幼児保育クラブでは、係数が推定できない場合があり、その場合は空欄としている。

表 49 集団参加のプロビット分析

	町内会 自治会	PTA	氏子会	子ども会	婦人会	学童/ 幼児保育 クラブ	宗教	商店会 同業組合 労働組合	ボラン ティア・ 社会奉仕	趣味やス ポーツ
移動パターン										
弘前定住(ref)										
郊外定住	-0.06	-0.20	0.67 [*]	0.29	0.29		0.00	0.09	0.28	0.39
中南津軽内移動	0.14	0.09	0.00	0.47	0.87 ^{**}		-0.06	-0.05	0.07	0.30
弘前Uターン	-0.07	0.15	0.03	0.27	-0.03	0.16	0.20	-0.04	0.01	-0.04
郊外Uターン	0.08	0.98 ^{**}	1.00 ^{**}	1.02 ^{**}	-0.01		-0.51	0.05	0.47	0.15
Jターン	0.35	-0.05		-0.16		0.36	-0.38	-0.09	-0.14	-0.37
Iターン	0.02	0.17	0.47	0.42 [*]	-0.06	0.05	0.06	-0.21	0.02	0.22
その他の県内出身者	0.01	0.17	0.05	0.09	0.01	0.39 [*]	-0.06	-0.02	-0.02	0.04
年齢	0.03 ^{***}	-0.04 ^{***}	0.02 [*]	-0.03 ^{***}	0.03 [*]	-0.04 ^{***}	0.02 ^{**}	0.01	0.01 [*]	0.01 ^{**}
性別(女性=1)	0.13	0.31 ^{**}	0.02	0.13	0.82 ^{**}	0.69 ^{**}	0.07	-0.17	-0.26 [*]	-0.23 [*]
学歴										
高校(ref)										
専門・短大・高専	0.24 [*]	0.25 [*]	0.05	0.06	0.10	0.17	-0.15	-0.04	0.02	0.28 ^{**}
大学・大学院	-0.04	0.06	0.02	-0.32	-0.05	0.18	-0.16	-0.32 [*]	-0.44 [*]	0.04
就業形態										
無職(ref)										
正規雇用	0.17	0.31 [*]	0.09	0.28	-0.03	0.43 [*]	-0.10	1.00 ^{***}	0.10	0.03
非正規雇用	0.11	0.13	0.30	-0.06	-0.05	0.51 [*]	-0.05	0.77 ^{**}	0.16	0.12
自営業・自由業	0.36 [*]	0.19	0.46	-0.02	0.50	0.52	0.05	1.67 ^{***}	0.66 ^{**}	0.02
配偶者あり	0.49 ^{***}	0.37 [*]	-0.07	0.78 [*]	-0.18	0.12	0.10	0.09	-0.04	-0.13
子供あり	0.53 ^{***}	2.17 ^{***}	0.28	1.45 ^{***}	0.31	1.49 ^{***}	0.11	-0.06	0.25	0.04
定数	-1.91 ^{***}	-1.77 ^{***}	-3.62 ^{***}	-2.58 ^{***}	-4.09 ^{***}	-2.70 ^{***}	-2.52 ^{***}	-2.30 ^{***}	-2.19 ^{***}	-1.46 ^{***}
尤度比カイ二乗値(16)	274.88 ^{***}	318.07 ^{***}	40.91 ^{***}	85.78 ^{***}	49.74 ^{***}	65.15 ^{***}	22.98	85.47 ^{***}	50.32 ^{***}	38.15 ^{**}
分散説明率	.17	.25	.14	.17	.19	.19	.04	.11	.08	.03
回答者数	1204	1169	1128	1160	1131	1060	1167	1168	1169	1178

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

空欄は係数を推定できなかった。

予測値を示した表 52 から結果を解釈すると、郊外UターンのPTA、子ども会、氏子会への参加率の高さがもっとも特徴的である。前二者は、子供の有無など、分析モデルで統制されていないライフコースの効果だろう。郊外Uターンでは、これらの活動が活発なだけでなく、学齢期の子を持つ人々が多く居住していることが示唆される。氏子会については、理由がはっきりしないが、前調査と共通しており、Uターン者が、こうした活動の担い手として期待されていることがわかる。他に特徴的なのは、東青津軽内移動の婦人会への参加率の高さだが、この理由は解釈できない。

表 52 集団参加の予測値と定住者との比較

移動パターン	町内会・自治会			PTA			氏子会			子ども会			婦人会		
	参加率	vs. 青森市定住	vs. 郊外定住	参加率	vs. 青森市定住	vs. 郊外定住	参加率	vs. 青森市定住	vs. 郊外定住	参加率	vs. 青森市定住	vs. 郊外定住	参加率	vs. 青森市定住	vs. 郊外定住
青森市定住	0.62	ref		0.11	ref		0.01	ref	-	0.01	ref		0.01	ref	
郊外定住	0.60		ref	0.08		ref	0.06	+	ref	0.02		ref	0.02		ref
東青津軽内移動	0.68			0.13			0.01			0.04			0.07		+++
青森市Uターン	0.60			0.14			0.01		-	0.02			0.01		
郊外Uターン	0.65			0.40	+++	++	0.11	++		0.11	+++		0.01		
Jターン	0.75			0.10						0.01					
Iターン	0.63			0.14			0.04			0.03	+		0.01		
その他の県内出身者	0.63			0.14			0.02			0.02			0.01		
移動パターン	学童／幼児保育			宗教			商店会・同業組合			ボランティア			趣味やスポーツ		
	参加率	vs. 青森市定住	vs. 郊外定住	参加率	vs. 青森市定住	vs. 郊外定住	参加率	vs. 青森市定住	vs. 郊外定住	参加率	vs. 青森市定住	vs. 郊外定住	参加率	vs. 青森市定住	vs. 郊外定住
青森市定住	0.01	ref		0.05	ref		0.09	ref		0.06	ref		0.19	ref	
郊外定住				0.05		ref	0.11		ref	0.10		ref	0.32		ref
東青津軽内移動				0.04			0.08			0.07			0.29		
青森市Uターン	0.01		推定不可	0.08			0.08			0.06			0.18		-
郊外Uターン				0.02			0.10			0.14			0.24		
Jターン	0.02			0.02			0.08			0.05			0.11		--
Iターン	0.01			0.06			0.06			0.06			0.26		
その他の県内出身者	0.02	+		0.05			0.09			0.06			0.21		

+と-の記号は、それぞれ係数の正負と有意性を示す。3、2、1つが、それぞれ1、5、10%水準に対応する。空欄は係数を推定できなかった。

9. 社会関係のまとめ

この章で行われた分析を概観すると、以下のことが言える。

第一に、東青津軽地域の中心市である青森市は、前調査の対象地域であった中南津軽地域の中心市である弘前市と比較して、都市規模が大きく、そのために社会関係も大都市的な様相を呈する。すなわち、石黒 (2012b)が、宮城県を除く東北地方と首都圏を比較したときに、首都圏の特徴として明らかにしたように、出身地域に根ざした関係性(この調査では、中学ないし高校までに形成した関係)が弱い。青森市周辺では、相対的に人の移動が多いからだと考えられる。そのために、地縁に根ざした、従って崩壊しにくい関係は維持されにくい。

ただし、それによって、人々が孤立しているというわけではない。人数自体は小さいとは言え、サポート・ネットワークは存在しており、人々はインフォーマルな社会的支援を受けられる状態にある。

一方で、そうした社会関係に、地域外の出身者を統合できていないという点では、東青津軽地域は、中南津軽地域と類似している。Iターン者は、近隣社会にサポート源を確保できておらず、その分を、遠距離の、おそらくは出身地近辺で形成した関係に依存

している。こうした人々を、どのように地域社会に取り込んでいくかは、両地域の共通する課題だと言える。

ひとつの可能性は、目標や娯楽を共有する相手が、相対的に多いことにあるだろう。残念ながら、本研究が測定した集団ベースの活動への参加では、Iターン、Jターン、その他の県内出身者といった、比較的長距離の移動を経験した回答者が、目標や娯楽を共有する相手を定住者よりも多く持つ理由は明らかにならなかった。これらの活動は、古典的な集団ベースのものではなく、個人的な関係性に依拠したものである可能性がある。その中身は何か、それを、どのようにしてサポートティブな関係、あるいは地域活動を伴う関係に変えていくかが、重要な課題になると考えられる。

第二に示唆されたのは、中南津軽地域と比較したときに、東青津軽地域のUターン者が、比較的安定して居住し続ける可能性があることである。前調査の結果、特に弘前市出身のUターン者が、地域外に相対的に多くのネットワークを持ち、その中には、「就職の世話」を期待できる人々が含まれることが明らかになった。このことから、前調査の報告書では、弘前へのUターン者は、再度、県外に流出する可能性があるとは指摘した。しかし、本調査では、東青津軽地域のUターン者が、地域外に就職に関するネットワークを有しているとは言いがたい。県外への流出は、学業や職業上の理由によることが多いため、社会関係が理由になることは、かならずしも多くはないだろうが、少なくとも、中南津軽地域と比較したとき、東青津軽地域の出身者には、県外へと移動する誘因が少ないとは言える。むしろ、郊外出身のUターン者が、地域的な活動に参加する傾向が強いことが明らかになっており、こうした人々は、そのまま定着していく可能性が相対的に高い。

第三に明らかになるのは、やはり、県外出身者が孤立気味だという点である。このことは、中南津軽地域と共通であり、おそらくは、地方共通の課題なのだろう。これらの人々を包摂し、統合していくことが、地域社会にとっての課題であるし、県外出身者の幸福に資するという意味でも重要であろう。同時に、Iターンを促進するという政策には、危険が伴うことも理解されねばならない。地域に適応するきっかけとなる社会関係を持たない人々を受け入れる素地は、現在の中南津軽地域、東青津軽地域にはあまりないと考えられる。少なくとも、Iターン者を受け入れる際に、地域への統合を推進する制度的な基盤を整備する必要がある。社会関係の形成を個人的な努力に任せるのみでは、多くのIターン者が定住をあきらめることになりかねない。

ただし、本調査の項目が、人々の社会的統合や幸福感に資する対人的な接触を網羅しているとは考えられない。調査で用いられたネットワークの測定は古典的なものであり、幸福感に資することは明らかであるが、しかし、人々の社会関係が網羅されているとも言いがたいだろう。

針原ら(2015)は、実験的にタクシー運転手との会話を生じさせることで、乗車体験がよりポジティブになることを示した。つまり、本調査の測定の視野からは完全に外れた、

客とプロの関係、インパーソナルな関係が、人々にポジティブな情動を引き起こすことが明らかになっているのである。人口が少なく、人口の流動性も低く、しかも、小さな商店が多く存在する地域では、大都市や大型店舗と比較して、こうしたインパーソナルな接触が、同じ二者の間で繰り返し起きる可能性が高い。「店員と顔見知りになる」ことを嫌う人々も多いことは確かだが、こうしたインパーソナルな接触が豊かで、固定的であることが、人口過少地域の魅力を形成する、一要因となっている可能性はあろう。

インパーソナルな接触が幸福感に及ぼす効果については、十分に研究がされているとは言いがたい状態であるため、現時点では、これは直観的な印象に過ぎず、仮説ですらない。そうした接触は、十分に記憶に止まるとは限らないため、大規模調査の質問紙で測定するのも難しいだろう。しかし、「地域の魅力」とはなにかを理解する上で検討すべき、重要な課題だと考えられる。

文献

- 石黒格 (2012a). 移動先で形成する人間関係 石黒格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子「東京」に出る若者たち ミネルヴァ書房 pp.119-140.
- 石黒格 (2012b). 地域間移動は地元の人間関係を壊すか 石黒格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子「東京」に出る若者たち ミネルヴァ書房 pp. 91-118.
- 石黒格 (2012c). 都市への移動と趣味ネットワーク 石黒格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子「東京」に出る若者たち ミネルヴァ書房 pp. 167-191.

第6章 東青津軽地域の UJI ターンとジェンダー

山口恵子

1. はじめに

本章では、性別で地域移動の経験にどのような特徴があるのかを明らかにする。

以下、第一に現在の生活状況について、性別と移動パターンに注目しつつ、住まい方、仕事、生活満足感等の傾向をまとめる。第二に、定住者を除いてUJIターン者の移動経験をとくに性別の違いに注目しつつ分析を行う。まず移動経験の概要について、県外経験の回数や県外生活の理由、移動時の年齢等をまとめる。次に青森県内に引っ越す以前の意識について検討したのち、UJIターンの理由や条件について検討する。最後に小括を行う。

2. 現在の生活状況について

(1) 住まい方

まず、現在の生活について、性別と移動パターンに焦点を当てつつ、住まい方や仕事の状況、生活満足度をみていこう。

現在の生活について、表1と表2は婚姻状況を示している。全体として、結婚している人の比率は男女とも6割強とほぼ同じであるが、女性は男性に比べて離別・死別がやや多い。女性の移動パターン別は、人数は限られているがJターン者の離別・死別の比率が22.7%と高くなっている。これについて表は省略するが、Jターン者は他の移動パターンに比べて50代、60代の中高年層の比率がやや高かった。こうした年齢差の影響も考えられよう。

次に、表3、表4は現在の住居形態である。全体として男女に大きな差はなく、持家（一戸建て）に住む人が約7割を占める。女性の移動パターン別にみると、実家と離れて外部から引っ越してきたであろうIターンや県内流入者は持家（一戸建て）比率が6割弱とやや下がり、賃貸や社宅が多くなる。

表1 婚姻状況（男性）

	結婚	離別・死別	未婚	合計
定住者	98 62.8%	8 5.1%	50 32.1%	156 100.0%
Uターン者	131 61.8%	19 9.0%	62 29.2%	212 100.0%
Jターン者	10 76.9%	1 7.7%	2 15.4%	13 100.0%
Iターン者	34 72.3%	0 0.0%	13 27.7%	47 100.0%
県内流入者	74 79.6%	3 3.2%	16 17.2%	93 100.0%
合計	347 66.6%	31 6.0%	143 27.4%	521 100.0%

注：p<0.1

表2 婚姻状況（女性）

	結婚	離別・死別	未婚	合計
定住者	205 59.6%	45 13.1%	94 27.3%	344 100.0%
Uターン者	107 63.3%	16 9.5%	46 27.2%	169 100.0%
Jターン者	17 77.3%	5 22.7%	0 0.0%	22 100.0%
Iターン者	51 77.3%	3 4.5%	12 18.2%	66 100.0%
県内流入者	120 78.9%	13 8.6%	19 12.5%	152 100.0%
合計	500 66.4%	82 10.9%	171 22.7%	753 100.0%

注：p<0.1

表3 現在の住居形態（男性）

	持家（一戸建て）	分譲マンション	公営住宅	民間・公団の賃貸住宅	社宅・社員寮	その他	合計
定住者	131 84.0%	0 0.0%	0 0.0%	21 13.5%	1 .6%	3 1.9%	156 100.0%
Uターン者	157 74.1%	3 1.4%	5 2.4%	32 15.1%	5 2.4%	10 4.7%	212 100.0%
Jターン者	9 69.2%	0 0.0%	0 0.0%	4 30.8%	0 0.0%	0 0.0%	13 100.0%
Iターン者	17 36.2%	1 2.1%	1 2.1%	16 34.0%	10 21.3%	2 4.3%	47 100.0%
県内流入者	53 57.6%	3 3.3%	3 3.3%	19 20.7%	6 6.5%	8 8.7%	92 100.0%
合計	367 70.6%	7 1.3%	9 1.7%	92 17.7%	22 4.2%	23 4.4%	520 100.0%

注：p<0.1

表4 現在の住居形態（女性）

	持家（一戸建て）	分譲マンション	公営住宅	民間・公団の賃貸住宅	社宅・社員寮	その他	合計
定住者	275 79.9%	5 1.5%	14 4.1%	40 11.6%	0 0.0%	10 2.9%	344 100.0%
Uターン者	119 70.8%	6 3.6%	5 3.0%	34 20.2%	0 0.0%	4 2.4%	168 100.0%
Jターン者	17 77.3%	2 9.1%	0 0.0%	3 13.6%	0 0.0%	0 0.0%	22 100.0%
Iターン者	36 55.4%	0 0.0%	1 1.5%	19 29.2%	7 10.8%	2 3.1%	65 100.0%
県内流入者	91 59.9%	3 2.0%	4 2.6%	43 28.3%	3 2.0%	8 5.3%	152 100.0%
合計	538 71.6%	16 2.1%	24 3.2%	139 18.5%	10 1.3%	24 3.2%	751 100.0%

注：p<0.1

では、実家まで帰るのにどれくらいの時間がかかるだろうか。表5と表6から実家との近接性をみてみよう。全体として男女には差があり、圧倒的に男性は実家暮らしの比率が41.6%と高い。しかし一方で女性は30分未満が33.5%と高く、実家との近接性は高い。移動パターンに注目すると、当然のことであるが、定住者やUターン者などの青森に実家があると考えられる層は実家暮らしや近居の比率が高く、県内流入層であるIターン者は3時間以上の遠距離の比率が高い。

表5 実家との距離（男性）

	実家暮らし	30分未満	30分～1時間未満	1～2時間未満	2～3時間未満	3時間以上	合計
定住者	87 57.6%	47 31.1%	15 9.9%	2 1.3%	0 0.0%	0 0.0%	151 100.0%
Uターン者	110 52.9%	80 38.5%	17 8.2%	1 .5%	0 0.0%	0 0.0%	208 100.0%
Jターン者	1 7.7%	0 0.0%	6 46.2%	6 46.2%	0 0.0%	0 0.0%	13 100.0%
Iターン者	4 8.5%	0 0.0%	2 4.3%	3 6.4%	6 12.8%	32 68.1%	47 100.0%
県内流入者	10 11.0%	7 7.7%	21 23.1%	44 48.4%	8 8.8%	1 1.1%	91 100.0%
合計	212 41.6%	134 26.3%	61 12.0%	56 11.0%	14 2.7%	33 6.5%	510 100.0%

注: $p < .01$

表6 実家との距離（女性）

	実家暮らし	30分未満	30分～1時間未満	1～2時間未満	2～3時間未満	3時間以上	合計
定住者	126 37.4%	146 43.3%	47 13.9%	15 4.5%	2 .6%	1 .3%	337 100.0%
Uターン者	61 37.0%	87 52.7%	12 7.3%	3 1.8%	1 .6%	1 .6%	165 100.0%
Jターン者	1 4.5%	4 18.2%	10 45.5%	7 31.8%	0 0.0%	0 0.0%	22 100.0%
Iターン者	11 16.7%	0 0.0%	0 0.0%	3 4.5%	11 16.7%	41 62.1%	66 100.0%
県内流入者	4 2.6%	11 7.3%	44 29.1%	61 40.4%	25 16.6%	6 4.0%	151 100.0%
合計	203 27.4%	248 33.5%	113 15.2%	89 12.0%	39 5.3%	49 6.6%	741 100.0%

注: $p < .01$

(2) 仕事の状況

次に現在の仕事の状況であるが、その前に学歴を押さえておこう。すでに多くの指摘があるように、表7と表8から、全体としては男女では差があり、男性の方が大学・大学院進学の高専・高専や専門学校の比率が高い。女性の移動パターン別

にみると、男性ほどの差はないが女性もIターン者はやはり高学歴であることが分かる。

表7 学歴（男性）

	小・中学	高校	短大・高専	大学・大学院	専門学校	合計
定住者	5 3.2%	87 55.8%	7 4.5%	36 23.1%	21 13.5%	156 100.0%
Uターン者	10 4.7%	86 40.6%	10 4.7%	75 35.4%	31 14.6%	212 100.0%
Jターン者	1 7.7%	3 23.1%	2 15.4%	4 30.8%	3 23.1%	13 100.0%
Iターン者	1 2.1%	9 19.1%	3 6.4%	28 59.6%	6 12.8%	47 100.0%
県内流入者	2 2.2%	33 35.5%	5 5.4%	40 43.0%	13 14.0%	93 100.0%
合計	19 3.6%	218 41.8%	27 5.2%	183 35.1%	74 14.2%	521 100.0%

注:p<0.1

表8 学歴（女性）

	小・中学	高校	短大・高専	大学・大学院	専門学校	合計
定住者	9 2.6%	202 58.7%	44 12.8%	31 9.0%	58 16.9%	344 100.0%
Uターン者	5 3.0%	63 37.5%	27 16.1%	33 19.6%	40 23.8%	168 100.0%
Jターン者	1 4.8%	10 47.6%	2 9.5%	3 14.3%	5 23.8%	21 100.0%
Iターン者	2 3.0%	13 19.7%	19 28.8%	22 33.3%	10 15.2%	66 100.0%
県内流入者	3 2.0%	59 38.8%	31 20.4%	31 20.4%	28 18.4%	152 100.0%
合計	20 2.7%	347 46.2%	123 16.4%	120 16.0%	141 18.8%	751 100.0%

注:p<0.1

表9と表10は現在の仕事の状況である。仕事の状況は全国的な動向と同様に性別で差があり、女性は男性に比べて非正規雇用で働く比率や収入になる仕事をしていない比率が圧倒的に高かった。その上で、この現在の仕事と移動パターンについては統計的に有意な差が女性はなく、男性も弱いものとなっている。ただし男性はIターン者の正規雇用が80.9%と突出して高く、女性にはそのような傾向はまったくみられない。なお有意差はないが、女性のJターン者の非正規雇用比率が50.0%と高いことには留意しておきたい。

表9 就業状況（男性）

	自営・家族従業	正規雇用	非正規雇用	収入になる仕事はなし	合計
定住者	17 11.0%	94 60.6%	22 14.2%	22 14.2%	155 100.0%
Uターン者	28 13.4%	130 62.2%	33 15.8%	18 8.6%	209 100.0%
Jターン者	2 16.7%	7 58.3%	1 8.3%	2 16.7%	12 100.0%
Iターン者	2 4.3%	38 80.9%	4 8.5%	3 6.4%	47 100.0%
県内流入者	5 5.4%	72 77.4%	9 9.7%	7 7.5%	93 100.0%
合計	54 10.5%	341 66.1%	69 13.4%	52 10.1%	516 100.0%

注:p<.10

表10 就業状況（女性）

	自営・家族従業	正規雇用	非正規雇用	収入になる仕事はなし	合計
定住者	13 3.8%	122 36.0%	115 33.9%	89 26.3%	339 100.0%
Uターン者	13 7.7%	50 29.8%	57 33.9%	48 28.6%	168 100.0%
Jターン者	0 0.0%	6 27.3%	11 50.0%	5 22.7%	22 100.0%
Iターン者	4 6.2%	18 27.7%	27 41.5%	16 24.6%	65 100.0%
県内流入者	10 6.7%	46 30.9%	48 32.2%	45 30.2%	149 100.0%
合計	40 5.4%	242 32.6%	258 34.7%	203 27.3%	743 100.0%

注:n.s.

また、この就業状況について、定住層とUターン層を取り出し、その学歴との関係をみたものが表11である。これによると女性では、定住層で低学歴（小・中・高卒程度）のも

の非正規雇用の比率が高いことが分かる。女性のUターン層には有意差がなかった。

表11 学歴と就業状況

		自営・家族 従業	正規雇用	非正規雇用	収入になる 仕事なし	合計		
男性	定住層	高校まで	13 14.3%	53 58.2%	11 12.1%	14 15.4%	91 100.0%	
		進学層	4 6.3%	41 64.1%	11 17.2%	8 12.5%	64 100.0%	
	Uターン層	高校まで	10 10.6%	55 58.5%	17 18.1%	12 12.8%	94 100.0%	
		進学層	18 15.7%	75 65.2%	16 13.9%	6 5.2%	115 100.0%	
女性	定住層	高校まで	10 4.8%	58 28.0%	79 38.2%	60 29.0%	207 100.0%	**
		進学層	3 2.3%	64 48.9%	36 27.5%	28 21.4%	131 100.0%	
	Uターン層	高校まで	6 9.0%	15 22.4%	23 34.3%	23 34.3%	67 100.0%	
		進学層	7 7.0%	35 35.0%	33 33.0%	25 25.0%	100 100.0%	

注:** $p<0.01$ 、* $p<0.05$ 、+ $p<0.10$

一方、収入のある仕事をしている人のその職種では差がみられる。表12と表13から、まず全体として性別では、男性は管理職や技能職、保安職、製造・生産職の比率が高く、女性は専門・技術職、事務職、販売職、サービス職の比率が高い。女性の移動パターンに注目すると、弱い関連ではあるがIターン者は専門・技術職が42.0%と突出して高く、Jターン者はサービス職が35.3%と突出して高い。

表12 現在の仕事の職種（男性）

	管理職	専門・技 術職	事務職	販売職	営業職	サービ ス職	技能職	保安職	製造・生 産職	農林水 産関係	運輸業	その他	合計
定住者	16 12.4%	15 11.6%	13 10.1%	5 3.9%	6 4.7%	18 14.0%	17 13.2%	6 4.7%	11 8.5%	6 4.7%	9 7.0%	7 5.4%	129 100.0%
Uターン者	24 12.8%	32 17.1%	12 6.4%	13 7.0%	11 5.9%	15 8.0%	19 10.2%	13 7.0%	19 10.2%	6 3.2%	13 7.0%	10 5.3%	187 100.0%
Jターン者	0 0.0%	4 40.0%	2 20.0%	1 10.0%	1 10.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 10.0%	1 10.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	10 100.0%
Iターン者	6 14.0%	13 30.2%	3 7.0%	3 7.0%	9 20.9%	2 4.7%	4 9.3%	2 4.7%	0 0.0%	0 0.0%	1 2.3%	0 0.0%	43 100.0%
県内流入者	15 18.1%	11 13.3%	18 21.7%	2 2.4%	8 9.6%	4 4.8%	8 9.6%	8 9.6%	6 7.2%	2 2.4%	1 1.2%	0 0.0%	83 100.0%
合計	61 13.5%	75 16.6%	48 10.6%	24 5.3%	35 7.7%	39 8.6%	48 10.6%	30 6.6%	37 8.2%	14 3.1%	24 5.3%	17 3.8%	452 100.0%

注: $p<0.01$

表13 現在の仕事の職種（女性）

	管理職	専門・技術職	事務職	販売職	営業職	サービス職	技能職	保安職	製造・生産職	農林水産関係	運輸業	その他	合計
定住者	7	55	63	29	8	53	0	1	20	5	1	6	248
	2.8%	22.2%	25.4%	11.7%	3.2%	21.4%	0.0%	.4%	8.1%	2.0%	.4%	2.4%	100.0%
Uターン者	3	27	33	19	4	27	0	0	1	5	0	0	119
	2.5%	22.7%	27.7%	16.0%	3.4%	22.7%	0.0%	0.0%	.8%	4.2%	0.0%	0.0%	100.0%
Jターン者	0	6	2	2	0	6	0	0	0	0	0	1	17
	0.0%	35.3%	11.8%	11.8%	0.0%	35.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.9%	100.0%
Iターン者	1	21	13	3	0	9	0	0	0	0	0	3	50
	2.0%	42.0%	26.0%	6.0%	0.0%	18.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	6.0%	100.0%
県内流入者	4	29	29	8	1	15	1	1	3	4	1	6	102
	3.9%	28.4%	28.4%	7.8%	1.0%	14.7%	1.0%	1.0%	2.9%	3.9%	1.0%	5.9%	100.0%
合計	15	138	140	61	13	110	1	2	24	14	2	16	536
	2.8%	25.7%	26.1%	11.4%	2.4%	20.5%	.2%	.4%	4.5%	2.6%	.4%	3.0%	100.0%

注：p<.10

（3）生活満足度

最後に、生活全般の満足度である。表14と表15からは、性別にはほとんど差がなく、満足しているのは約4割で、残りの6割は不満を感じていた。移動パターン別にみると、男性は差がないが女性は有意な差があり、とくにJターン者とIターン者の差が大きい。すなわち、Jターン者は不満だがこれ以上はあきらめているものが59.1%と高く、逆にIターン者は満足しているものが50.0%と高かった。

表14 生活満足度（男性）

	満足している	不満だがこれ以上はあきらめている	不満なので改善しようとしている	合計
定住者	65	53	34	152
	42.8%	34.9%	22.4%	100.0%
Uターン者	77	71	60	208
	37.0%	34.1%	28.8%	100.0%
Jターン者	6	3	4	13
	46.2%	23.1%	30.8%	100.0%
Iターン者	22	10	13	45
	48.9%	22.2%	28.9%	100.0%
県内流入者	41	35	16	92
	44.6%	38.0%	17.4%	100.0%
合計	211	172	127	510
	41.4%	33.7%	24.9%	100.0%

注：n.s.

表15 生活満足度（女性）

	満足している	不満だがこれ以上はあきらめている	不満なので改善しようとしている	合計
定住者	137	134	68	339
	40.4%	39.5%	20.1%	100.0%
Uターン者	67	52	47	166
	40.4%	31.3%	28.3%	100.0%
Jターン者	5	13	4	22
	22.7%	59.1%	18.2%	100.0%
Iターン者	31	18	13	62
	50.0%	29.0%	21.0%	100.0%
県内流入者	69	37	44	150
	46.0%	24.7%	29.3%	100.0%
合計	309	254	176	739
	41.8%	34.4%	23.8%	100.0%

注：p<.01

3. 移動経験の概要

ここからは、定住者を省いてU J Iターン者の移動経験を、とくに性別の違いに注目しつつ検討していこう。まず移動経験の概要である。表16は青森県外で生活した回数を示し

ている。全体としては約半数に県外生活の経験があるが、男女差があり、男性の方に県外生活経験者が多い。

表16 青森県外で生活した経験

	なし	1回	2回	3回以上	合計
男性	186 35.6%	206 39.5%	69 13.2%	61 11.7%	522 100.0%
女性	425 56.1%	218 28.8%	72 9.5%	42 5.5%	757 100.0%
合計	611 47.8%	424 33.2%	141 11.0%	103 8.1%	1279 100.0%

注: $p < .01$

では、なぜ人々は青森県外で生活していたのだろうか。表17はその理由を示している。なお、複数回の移動経験のある者については、直近の移動についての回答となっている。加えて、項目については男性・女性のどちらかでも5%以上の回答があったもののみを提示し、少数意見は省いている。

県外の移動の理由で多いのは、男女ともに自分がその地域で働いていた、および学校に通っていた、という就業・就学の理由である。就学には男女差はないが、自分の仕事の理由をあげるものは女性より男性の方が多い。一方、パートナーの仕事の都合という理由は女性だけがあげており、17.3%となっている。また、女性は婚姻によりIターンする者が多く、少なくとも9.4%が県外出身者であることが分かる。

表17 県外で生活していた理由（複数回答）

	男性		女性		
	ケース	%	ケース	%	
自分がその地域の出身だから	19	5.7%	31	9.4%	+
自分がその地域の学校に通っていたから	113	33.9%	100	30.3%	
自分がその地域で働いていたから	157	47.1%	123	37.3%	*
妻や夫がその地域で働いていたから	0	0.0%	57	17.3%	**
子どもの通学、仕事などの都合	43	13.0%	24	7.3%	*

注: ** $p < .01$ 、* $p < .05$ 、+ $p < .10$

次に県外生活をへて青森県内にU J Iターンしたのは何歳のころだったのだろうか。表

18はその年齢を示している。全体としては30代までで9割弱を占め、男女で差はない。しかし図1と図2から年齢ごとの分布をみると、男性の22～24歳頃が抜きん出ていることが分かる。それは大学・大学院を卒業した頃の年齢であり、先の男性の進学率の高さに関連しているだろう。

表 18 青森へのU J I ターンの年齢

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	合計
男性	20 6.3%	179 56.1%	77 24.1%	28 8.8%	14 4.4%	1 0.3%	319 100.0%
女性	29 9.3%	190 60.9%	64 20.5%	19 6.1%	9 2.9%	1 0.3%	312 100.0%
合計	49 7.8%	369 58.5%	141 22.3%	47 7.4%	23 3.6%	2 0.3%	631 100.0%

注：n.s.

図1 U J I ターンの年齢の分布（男性）

(ケース数)

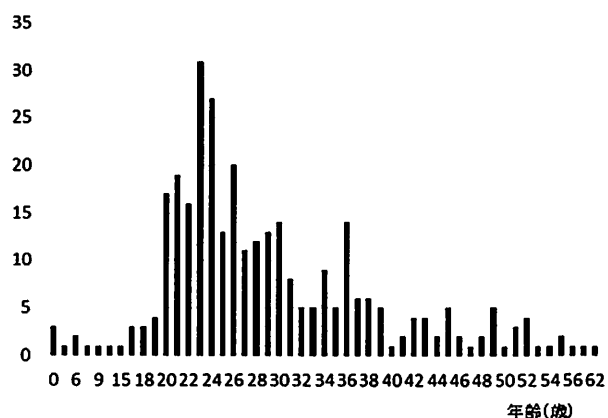
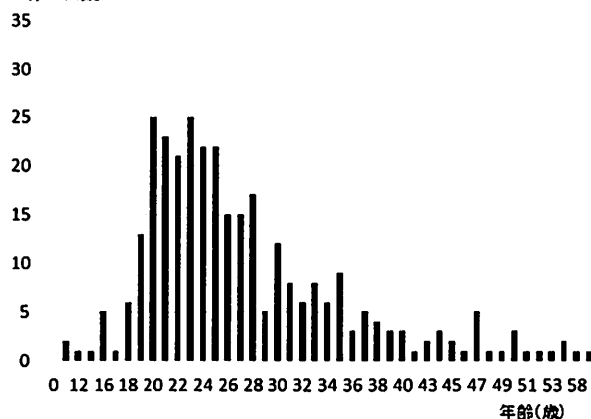


図2 U J I ターン年齢の分布（女性）

(ケース数)



4. 青森県内で生活することへの意識

こうした県外での生活経験者であるが、青森県内に引っ越す以前に、将来の青森での生活はどのように意識されていたのだろうか。表 19 は県内に引っ越す以前の青森生活への望みを示している。男性に比べて女性は青森で生活したいとは思っていなかったという回答が 46.1%と高くなっている。

表19 県内に引っ越す以前の青森生活への望み

	いつかは生活したかった	すぐにも生活したかった	生活したいとは思っていなかった	合計
男性	155 48.4%	62 19.4%	103 32.2%	320 100.0%
女性	139 43.3%	34 10.6%	148 46.1%	321 100.0%
合計	294 45.9%	96 15.0%	251 39.2%	641 100.0%

注：p<.01

表20は、このなかで、青森で「いつかは生活したかった」と回答した人々の、その理由を示している。なお、以下のすべての複数回答の表の項目については、男性・女性のどちらからでも5%以上の回答があったもののみを提示し、少数意見は省いている。

男性・女性とも最も多いのは「親の近くにいたほうが安心だから」であり、とくに女性は55.5%と半数強の人がこの点を重視している。そのほか、男女で傾向がかなり異なっており、男性は「実家やお墓を継ぐため」「親の面倒を見たり、介護したりするため」という家の継承への志向が強いことが分かる。女性は、「青森に友人や恋人がいた」「親の面倒を見たり、介護したりするため」「青森のほうが、生活環境がよさそうだった」および男性と比べると「青森のほうが、子どもを育てるのによいと思っていた」などの回答が多い。

表20 青森で生活したいという望みを持っていた理由（複数回答）

	男性		女性		
	ケース	%	ケース	%	
実家やお墓を継ぐため	81	36.7%	20	11.6%	**
家業を継ぐため	15	6.8%	2	1.2%	**
親の面倒を見たり、介護したりするため	72	32.6%	42	24.3%	+
親の近くにいたほうが安心だから	88	39.8%	96	55.5%	**
青森でやりたい仕事があった	16	7.2%	12	6.9%	
地域に貢献したいという気持ちがあった	14	6.3%	11	6.4%	
青森に友人や恋人がいた	26	11.8%	46	26.6%	**
青森のほうが、生活環境がよさそうだった	46	20.8%	40	23.1%	

青森のほうが、子どもを育てるのによいと思っていた	12	5.4%	29	16.8%	**
都会の生活が自分に合わなかった	10	4.5%	17	9.8%	*

注:** $p<.01$ 、* $p<.05$ 、+ $p<.10$

逆に表 21 は「青森で生活したいとは思っていなかった」と回答した人々のその理由である。これについては男女差は小さく、最も多いのは、「以前いた地域のほうが、生活環境がよかった」という回答で男女とも 4 割強を占めている。そのほか、「青森には仕事がなさそうだった」「青森のほうが、労働環境が悪そうだった」などの仕事関係の懸念が高い比率を占めていた。

表21 青森で生活したいと思っていなかった理由（複数回答）

	男性		女性		
	ケース	%	ケース	%	
家業を継ぎたくなかった	6	6.1%	2	1.4%	*
親から離れていたかった	10	10.2%	25	17.4%	
青森にはやりたい仕事がなかった	26	26.5%	35	24.3%	
仕事以外の、やりたいと思う活動が青森にはなかった	24	24.5%	27	18.8%	
青森には仕事がなさそうだった	35	35.7%	59	41.0%	
青森のほうが、労働環境が悪そうだった	30	30.6%	47	32.6%	
以前にいた地域に貢献したいという気持ちがあった	6	6.1%	5	3.5%	
青森には友人や恋人がいなかった	8	8.2%	12	8.3%	
以前いた地域のほうが、生活環境がよかった	41	41.8%	65	45.1%	
以前いた地域のほうが、子どもを育てるのによかった	6	6.1%	11	7.6%	
以前いた町自体に魅力があった	16	16.3%	32	22.2%	

注:** $p<.01$ 、* $p<.05$ 、+ $p<.10$

5. U J I ターンの理由や条件について

最後に、U J I ターンの理由や条件を男女別に検討しよう。まず、現在の地域に住むことになった理由であるが、表 22 によると、性別にかかわらず圧倒的に多いのは「実家に戻ったから」という理由であり、およそ半数を占めている。男女差があるのは、男性は「仕事場・通学先に近い」という比率が高く、逆に女性は「配偶者の仕事場・通学先に近い」という比率が高い。同様に女性は「配偶者の実家で同居」も高いことから、男性の都合で地域が決まる傾向が強いことが分かる。

表22 現在の地域に住むことになった理由（複数回答）

	男性		女性		
	ケース	%	ケース	%	
実家に戻ったから	167	50.0%	151	45.5%	
実家に近いから	35	10.5%	30	9.0%	
配偶者の実家で同居するから	8	2.4%	33	9.9%	**
配偶者の実家に近いから	16	4.8%	23	6.9%	
仕事場・通学先に近いから	117	35.0%	61	18.4%	**
配偶者の仕事場・通学先に近いから	7	2.1%	56	16.9%	**
子どもの学区や通学の便を考えて	19	5.7%	22	6.6%	

注：** $p<.01$ 、* $p<.05$ 、+ $p<.10$

では青森へのU J I ターンの直接のきっかけは何であろうか。表23によると回答は多岐にわたっているが、男女差があるのは、男性が「転勤や配置転換」「転職先が青森県内で見つかった」などの仕事の理由で、女性は「自分が結婚した」という婚姻の理由である。

表23 青森県内に引っ越してきた直接のきっかけ（複数回答）

	男性		女性		
	ケース	%	ケース	%	
家族が怪我や病気をした	14	4.2%	23	6.9%	
特に問題はないが、親に実家に戻るよう言われた	40	12.0%	44	13.3%	
自分が結婚した	8	2.4%	42	12.7%	**
学校を卒業した	46	13.9%	46	13.9%	
今の地域、またはそこから通える範囲に就職した	43	13.0%	33	10.0%	
転勤や配置転換	88	26.5%	55	16.6%	**
転職先が青森県内で見つかった	40	12.0%	17	5.1%	**
仕事を自分から辞めた	53	16.0%	61	18.4%	

注：** $p<.01$ 、* $p<.05$ 、+ $p<.10$

これらのきっかけに加えて、引っ越すことが可能となった具体的な条件を示しているのが、表24である。男女とも最も多いのは「実家に住むことができた」で、半数強を占めている。先に続いて実家の影響はやはり大きいことが分かる。

男女差があるのは、男性が「勤務先に、支店や支部があった」という点、女性は「引越すことについて、家族の理解があった」「家族から生活について援助が受けられた」「定職に就けなくても、生活していける見込みがあった」という点である。やはり男性は仕事の条件を挙げ、女性は家族の条件をあげる傾向が強いことが分かる。

表24 青森に引越すことを可能にした条件（複数回答）

	男性		女性		
	ケース	%	ケース	%	
実家に住むことが出来た	168	50.8%	180	55.6%	
実家以外に、住む家や土地があった	18	5.4%	25	7.7%	
家族から生活について援助が受けられた	16	4.8%	39	12.0%	**
引越すことについて、家族の理解があった	30	9.1%	56	17.3%	**
勤務先に支店や支部があった	77	23.3%	52	16.0%	*
転職して定職に就く見込みがあった	51	15.4%	37	11.4%	
定職に就けなくても、生活していける見込みがあった	10	3.0%	30	9.3%	**

注：** $p < .01$ 、* $p < .05$ 、+ $p < .10$

6. 小括

以上をまとめよう。まず、前半の現在の生活状況である。女性は婚姻状態において離別・死別の比率がやや高く、住まい方は男性は実家暮らしの比率が高いが、逆に女性は30分未満の近居の比率が高い。学歴は男性の方が大学・大学院進学の高比率が高く、逆に女性は短大・高専や専門学校の高比率が高い。就業状況については、女性は非正規雇用で働く比率や収入になる仕事をしていない比率が圧倒的に高く、職種についても、男性は管理職や技能職、保安職、製造・生産職の比率が高く、女性は専門・技術職、事務職、販売職、サービス職の比率が高い。以上のような男女差は、基本的に全国的な動向とも軌を一にするものである。

その上で、現在の生活状況について女性の移動パターンで際立った特徴がみられるのはIターン者であり、当然ではあるが実家が遠く、持家（一戸建て）比率が低い。そして高学歴で専門・技術職にはついているが、正規雇用の比率は高くない。ただし生活の満足度は高い。そのやや逆に近い傾向を示すのが女性のJターン者であった。Jターン者は人数が少ないので留保が必要であるが、傾向としては離婚・死別がやや多く、非正規雇用で働き、生活への不満が大きいという点が気になるところである。他の移動タイプに比べて中

高年層が多く年齢との関係も考えられるが、いずれにしても彼女たちの生活歴においてJターンという地域移動がどのように位置づいているのか、聞き取りなどからその様相はより詳しく検討される必要があるだろう。

次に、後半の定住者を除いたU J Iターンの者の移動経験についてである。

移動経験の概要では、男性の方に圧倒的に県外生活経験者が多く、その県外生活の理由は男女ともに就業・就学の理由が多いが、男性は自分の仕事の理由、女性はパートナーの仕事の理由をあげるところで男女差がある。U J Iターンの年齢は男女ともに30代までで9割弱を占めるが、男性は大学・大学院を卒業した頃の年齢である22～24歳頃がやや抜きん出ていた。

青森県内で生活することの意識は、女性は男性に比べて青森で生活したいとは思っていなかった人が多い。その望みを持っていた人の理由は、親の近くにいることの安心を上げるものが男女ともに圧倒的に多かったが、加えて、男性は家の継承の志向が強くみられ、女性は友人・恋人・親、子どもなどの人間関係を考慮した志向が強かった。逆に青森で生活したいと思っていなかった人の理由については男女差がほとんどなく、総じて仕事への懸念が高かった。

最後に、U J Iターンの理由や条件について、現在の地域に住むことになった理由や青森に引っ越すことを可能にした条件は、男女に関わらず圧倒的に実家の影響が大きい。そのうえで、男性は自分の仕事の都合の条件をあげるものが多く、逆に女性は夫や家族の条件を上げる傾向が強かった。

[参考文献]

貴志匡博、2014「非大都市圏出生者の東京圏転入パターンと出生県への帰還移動」『人口問題』70(4)、441-460

永井暁子、2010「釜石の結婚問題」『社会科学研究』61(5・6)、87-99

西野淑美、2009「岩手県釜石市出身女性の地域移動とライフコース」『都市政策研究』3、203-231

白波瀬佐和子、2005『少子高齢社会の見える格差——ジェンダー・世代・階層のゆくえ』東京大学出版会

山本努、2013『人口還流（Uターン）と過疎農山村の社会学』学文社

山口恵子、2015「地域移動におけるジェンダーと経済格差——青森県のUターン移動に関する住民調査から」『家計経済研究所』107、36-44

第7章 夫婦の出生順位はUJIターンに影響したのか

李 秀 眞

1. 研究の背景および目的

本章では、夫婦の出生順位とUJIターンの関係について注目する。出生順位は親世代への支援および規範意識を決定する主な要因の一つであると考えられる。世代間支援に関する研究では、経済的支援において夫方の親を優先する傾向があることが指摘され、男性は自分の親の世話しかしない傾向が強いことが明らかになっている（岩井・保田 2009）。また、世代間支援に関する研究で父系と母系を区別していないことを指摘しながら、世代間支援を観察する際に、父系か母系かを区別しないことは大きな制限点になると強調する研究もある（韓・金, 2010）。本章では、親扶養への規範意識がUJIターンと関係があると考え、親扶養への規範意識指標として出生順位に着目し、夫婦の出生順位とUJIターン地域移動との関係を明らかにすることを目的とする。分析に際して、本人の出生順位と配偶者の出生順位を同時に考慮し、夫婦ともに長男・長女、自分のみ長男か長女、配偶者のみ長男か長女、両方とも長男・長女ではないという4区分にした。また、夫方の親と妻方の親との関わり方の格差があると推測されることから、男女別分析を試みる。白波瀬（2005）は、兄弟姉妹の有無が親への支援に影響することを明らかにしたが、本研究では、データの制約上、兄弟姉妹の有無は考慮に入れず、‘あなたは長男、または長女ですか’、‘配偶者は長男、または長女ですか’の質問項目を分析に用いる。

2. 分析結果

2-1. 夫婦の出生順位および年齢階層による特性

(1) 夫婦の出生順位とUJIターンの形態

表7-1 夫婦の出生順位と U J I ターンの形態

(単位: %、N=812)

		定住者	Uターン者	Jターン者	Iターン	県内からの流入者	合計
男性	夫婦ともに長男・長女	35.5	35.5	1.4	9.2	18.4	100
	自分のみ長男か長女	18.8	42.0	5.8	13.0	20.3	100
	配偶者のみ長男か長女	26.0	35.1	5.2	7.8	26.0	100
	夫婦ともに長男・長女ではない	34.2	29.3	0.0	9.8	26.8	100
女性	夫婦ともに長男・長女	44.4	15.1	2.7	11.1	26.7	100
	自分のみ長男か長女	37.2	23.4	5.3	8.5	25.5	100
	配偶者のみ長男か長女	45.0	22.0	3.0	9.0	21.0	100
	夫婦ともに長男・長女ではない	35.9	32.8	3.1	14.1	14.1	100

表7-1には、出生順位とU J I ターンの形態の関係を示した。男性においては、夫婦ともに長男・長女の場合、定住者が35.5%、Uターン者が35.5%で約7割を占めている。男性が長男で配偶者は長女でない場合には、定住者が18.8%、Uターン者が42.0%を占めている。Jターン、Iターンに注目しても、男性が長男で配偶者は長女でない場合のJターン者、Iターン者の割合が多いことが確認できる。

一方、女性については、夫が長男で自分は長女ではない場合に定住者の割合が45.0%でもっとも多く、その次は夫婦ともに長男・長女の場合で、定住者の割合が44.4%であった。しかし、Uターン者を見ると、夫婦ともに長男・長女の場合に15.1%でもっとも少ない割合であったのに対し、夫婦ともに長男・長女ではない場合に32.8%でもっとも多い傾向にある。

(2) 夫婦の出生順位と親との同居状態

本節では、分析対象者の夫婦の出生順位による特性についてみていく。夫婦の出生順位と年齢階層別の特性を検討する。親と同居している世帯のみを対象として、親との同居状態を自分の親と同居しているのか、配偶者の親と同居しているのかを男女別に確認した。また、年齢階層は、2~30代、40代、5~60代に分類した(表7-2参照)。

表7-2 夫婦の出生順位と親との同居状態

(段位: %, N=489)

親との同居状態			自分の親と同居する	配偶者の親と同居する
男性 (N=196)	夫婦ともに長男・長女	2~30代	85.7	14.3
		40代	61.5	38.5
		5~60代	95.0	5.0
	自分のみ長男か長女	2~30代	60.0	40.0
		40代	100.0	0.0
		5~60代	100.0	0.0
	配偶者のみ長男か長女	2~30代	50.0	50.0
		40代	50.0	50.0
		5~60代	33.3	66.7
	夫婦ともに長男・長女ではない	2~30代	50.0	50.0
		40代	0.0	100.0
		5~60代	0.0	100.0
女性 (N=296)	夫婦ともに長男・長女	2~30代	33.3	66.7
		40代	17.2	82.8
		5~60代	17.7	82.4
	自分のみ長男か長女	2~30代	50.0	50.0
		40代	71.4	28.6
		5~60代	70.0	30.0
	配偶者のみ長男か長女	2~30代	14.3	85.7
		40代	0.0	100.0
		5~60代	5.6	94.4
	夫婦ともに長男・長女ではない	2~30代	50.0	50.0
		40代	100.0	0.0
		5~60代	66.7	33.3

注:親と同居している世帯のみ対象として集計

男性についてみると、夫婦ともに長男・長女である場合にどの年齢層でも自分の親と同居する割合が多く、5~60代では95.0%がそれに該当する。40代においては夫が長男であっても、妻も長女の場合に、妻の親と同居する割合が約4割を占めていることが特徴的である。配偶者のみ長女である場合、5~60代の男性の約7割は、自分の親でなく、配偶者の親と同居している。

女性についてみると、夫婦ともに長男・長女の場合、2~30代の約3割は妻の親と同居しているが、約7割の女性は自分が長女であっても夫の親と同居していることが確認できる。自分のみ長女である場合、40代の71.4%、5~60代の70.0%が自分の親と同居していることが確認できる。

夫婦ともに長男・長女の場合には、夫の出生順位が優先されるが、妻のみが長女である場合には、そのことを考慮し妻方親との同居が行われていると推察される。

(3) 地域移動パターンと親との同居状態

表7-3は、地域移動パターン別に親との同居状態を検討したものである。表2と同様、現在、親と同居している人のみを分析対象とした。

夫婦ともに長男・長女である場合、定住者とUターン者の男性はそれぞれ85.7%、82.4%が自分の親と同居している。女性は自分も長女でありながら、夫が長男である場合は自分の親と同居する割合は定住者とUターン者それぞれ17.1%、36.4%である。また、自分が長女で、配偶者は長男でない場合に配偶者の親の同居する割合が定住者で25%、Uターン者で12.5%を占めている。

表7-3 地域移動パターン別親との同居状態

(単位:%, N=489)

地域移動パターン別親との同居状態		自分の親と同居する		配偶者の親と同居する	
		男性	女性	男性	女性
夫婦ともに長男・長女	定住者	85.7	17.1	14.3	82.9
	Uターン者	82.4	36.4	17.7	63.6
	Jターン者	0.0	0.0	0.0	100.0
	Iターン	0.0	42.9	0.0	57.1
	県内からの流入者	0.0	10.5	100.0	89.5
自分のみ長男か長女	定住者	100.0	75.0	0.0	25.0
	Uターン者	100.0	87.5	0.0	12.5
	Jターン者	100.0	0.0	0.0	0.0
	Iターン	33.3	0.0	66.7	100.0
	県内からの流入者	100.0	0.0	0.0	100.0
配偶者のみ長男か長女	定住者	0.0	5.9	100.0	94.1
	Uターン者	80.0	14.3	20.0	85.7
	Jターン者	0.0	0.0	100.0	100.0
	Iターン	0.0	0.0	0.0	100.0
	県内からの流入者	0.0	0.0	100.0	100.0
夫婦ともに長男・長女ではない	定住者	33.3	50.0	66.7	50.0
	Uターン者	0.0	100.0	100.0	0.0
	Jターン者	0.0	0.0	0.0	0.0
	Iターン	0.0	0.0	0.0	0.0
	県内からの流入者	0.0	0.0	0.0	100.0

注:親と同居している世帯のみ対象として集計

2-2. 夫婦の出生順位および年齢階層別地域移動の理由にみられる特性

本節では、県外の生活経験者を対象とし、夫婦の出生順位および年齢階層別に、地域移動の理由に関する特徴を検討する。

(1) 夫婦の出生順位と年齢階層別にみる青森県内に引っ越してくることを可能にした条件

表7-4は 夫婦の出生順位と年齢階層別にみる青森県内に引っ越してくることを可能にした条件を示したものである。夫婦ともに長男・長女の場合、年齢階層に関わらず「実家に住むことができた」ことをあげた人がもっとも多く、男女でも共通している結果であったが、これらは2-30代で目立つ特徴であった。続いて「引っ越すことについて、家族の理解があった」ことを条件としてあげた人が多くみられた。

他方、「実家から、生活について援助が受けられた」ことを条件としてあげた人は、夫婦の出生順位および年齢階層に関わらず、女性において多くあげられた条件であった。ただ、夫婦ともに長男・長女ではない40代の男性は、夫婦ともに長男・長女である40代の女性に比べて、これを条件にあげた人が多いことが分かる。また、夫婦ともに長男・長女でない2-30代の女性の16.7%が実家から支援があったことを条件としてあげていて、夫婦の出生順位は世代間支援の方向を決定する要因として作用していることが伺える。

表7-4 夫婦の出生順位と年齢階層別にみる青森県内に引っ越してくることを可能にした条件

(段位: %, N=489)

青森県内に引っ越してくることを可能にした条件		実家に住むことができた		実家以外に、住む家や土地があった		実家から、生活について援助が受けられた		引っ越すことについて、家族の理解があった	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
夫婦ともに長男・長女	2-30代	57.1	48.4	0.0	3.2	0.0	12.9	14.3	16.1
	40代	54.2	28.1	8.3	6.3	8.3	15.6	16.7	18.8
	5-60代	44.2	42.4	7.0	12.1	2.3	15.2	4.7	21.2
自分のみ長男か長女	2-30代	50.0	60.0	3.3	0.0	0.0	6.7	16.7	13.3
	40代	47.1	60.0	0.0	20.0	5.9	10.0	5.9	0.0
	5-60代	61.5	45.0	11.5	10.0	3.9	15.0	7.7	20.0
配偶者のみ長男か長女	2-30代	22.2	33.3	11.1	0.0	11.1	11.1	11.1	33.3
	40代	34.8	58.3	0.0	0.0	4.4	8.3	8.7	0.0
	5-60代	47.4	81.0	5.3	4.8	5.3	4.8	5.3	23.8
夫婦ともに長男・長女ではない	2-30代	66.7	50.0	0.0	16.7	0.0	16.7	33.3	16.7
	40代	66.7	41.7	0.0	16.7	16.7	8.3	0.0	16.7
	5-60代	50.0	47.1	8.3	11.8	0.0	11.8	8.3	0.0

注: 各項目について、当てはまると回答した人の割合を示したものである。

(2) 夫婦の出生順位と年齢階層別にみる現在の地域に住むことになった理由

表7-5には夫婦の出生順位と年齢階層別にみる現在の地域に住むことになった理由を示した。ここでは、現在の地域に住むことになった理由について、夫婦の出生順位と年齢階層別に確認した。男性についてみると、夫婦ともに長男・長女での場合、「実家に戻ったから」という理由をあげたひとがもっとも多いが、その中でも2-30代が57.1%でもっとも多く、40代で50.0%、5-60代で48.8%を占めている。その次に多くあげられた理由は「仕事先/通学先に近いから」であり、2-30代の42.9%、40代の33.3%、5-60代の41.9%がこの理由をあげている。

表7-5 出生順位と年齢階層別にみる現在の地域に住むことになった理由

(段位：%, N=489)

現在の地域に住むことになった理由		実家に戻ったから		実家に近いから		配偶者の実家で同居するから		配偶者の実家に近いから		仕事先/通学先に近いから		配偶者の仕事場/通学先に近いから	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
夫婦ともに長男・長女	2-30代	57.1	38.7	0.0	6.5	0.0	6.5	0.0	6.5	42.9	19.4	0.0	41.9
	40代	50.0	34.4	4.2	12.5	4.2	12.5	4.2	12.5	33.3	34.4	8.3	25.0
	5-60代	48.8	20.0	9.3	14.3	4.7	20.0	4.7	5.7	41.9	17.1	4.7	11.4
自分のみ長男か長女	2-30代	33.3	46.7	16.7	0.0	16.7	13.3	0.0	6.7	50.0	13.3	16.7	26.7
	40代	33.3	40.0	16.7	10.0	0.0	10.0	5.6	10.0	55.6	20.0	5.6	0.0
	5-60代	50.0	45.0	7.7	0.0	0.0	5.0	7.7	0.0	34.6	10.0	3.9	30.0
配偶者のみ長男か長女	2-30代	11.1	33.3	22.2	0.0	11.1	0.0	11.1	33.3	44.4	11.1	0.0	44.4
	40代	30.4	50.0	26.1	16.7	0.0	8.3	13.0	8.3	56.5	25.0	0.0	33.3
	5-60代	34.6	50.0	10.5	4.6	5.3	31.8	0.0	4.6	42.1	13.6	0.0	4.6
夫婦ともに長男・長女ではない	2-30代	33.3	50.0	33.3	16.7	0.0	0.0	33.3	0.0	66.7	16.7	0.0	16.7
	40代	33.3	38.5	16.7	15.4	0.0	7.7	0.0	15.4	50.0	0.0	0.0	23.1
	5-60代	46.2	41.2	7.7	5.9	0.0	17.7	15.4	0.0	15.4	5.9	0.0	23.5

注：各項目について、当てはまると回答した人の割合を示したものである。

女性についてみると、夫婦ともに長男・長女での場合、男性同様「実家に戻ったから」という理由をあげたひとがもっとも多いが、その中でも2-30代が38.7%でもっとも多く、40代で34.4%、5-60代で20.0%を占めている。その次に多くあげられた理由は配偶者の仕事先/通学先があることであるが、2-30代女性の41.9%、40代の25.0%、5-60代の11.4%がこの理由をあげている。

夫婦ともに長男・長女であっても夫の実家に戻ること、さらに夫の仕事場があることが、現在の地域に住むことになった大きな理由となっていることが伺え、夫の事情

が妻の事情より優先される傾向があると推察される。

他方、夫婦ともに長男・長女でない場合の特徴として、「仕事先/通学先に近いから」という回答が夫婦ともに長男・長女である場合により多いことがあげられる。特に2~30代の男性の約7割、40代男性の5割がこの理由をあげている。自分が長男であったり、配偶者が長女であったりする場合は、夫婦ともに長男・長女である場合に比べ、親扶養の規範意識や親からの支援を受けられるという可能性より仕事場が優先的に考慮されている様子が伺える。

2-3. 夫婦の出生順位および年齢階層別にみた青森県内での生活への望み

(1) 長男・長女は青森県内で生活したいという望みが強いのか？

夫婦ともに長男・長女であることは、青森県内で生活したいという望みを強くするのだろうか。表7-6には、夫婦の出生順位および年齢階層別にみた青森県内での生活への望みが示されているが、「いつかは青森で生活したいと望んでいた」という回答に注目すると、男女別、年齢階層別によりかなり相違がみられる。夫婦ともに長男・長女の場合、2~30代の男性の35.7%が「いつかは青森で生活したいと望んでいた」と回答しているが、2~30代の女性の回答は58.1%であった。また、「青森で生活したいと思っていなかった」との回答は2~30代男性で42.9%、2~30代女性で32.3%であった。自分が長男である2~30代男性の約7割は、「青森で生活したいと思っていなかった」と回答しているのに対し、自分が長女である2~30代女性の53.3%は、「いつかは青森で生活したいと望んでいた」と回答し、男女差がみられる。

一方、夫婦ともに長男・長女ではない場合、2~30代、40代女性のそれぞれ83.3%、75.0%が「青森で生活したいと思っていなかった」と回答していて、夫婦ともに長男・長女である場合の女性の回答と大きな相違がみられる。

表7-6 出生順位および年齢階層別にみた青森県内での生活への望み

(段位: %, N=489)

青森県内で生活したいという望み		いつかは青森で生活したいと望んでいた	すぐにも青森で生活したいという望みがあった	青森で生活したいと思っていなかった	
男性 (N=196)	夫婦ともに長男・長女	2~30代	35.7	21.4	42.9
		40代	50.0	8.3	41.7
		5~60代	46.2	28.2	25.6
	自分のみ長男か長女	2~30代	16.7	16.7	66.7
		40代	47.1	17.7	35.3
		5~60代	51.9	25.9	22.2
	配偶者のみ長男か長女	2~30代	44.4	11.1	44.4
		40代	40.9	31.8	27.3
		5~60代	52.9	11.8	35.3
	夫婦ともに長男・長女ではない	2~30代	33.3	33.3	33.3
		40代	66.7	0.0	33.3
		5~60代	41.7	33.3	25.0
女性 (N=296)	夫婦ともに長男・長女	2~30代	58.1	9.7	32.3
		40代	32.3	16.1	51.6
		5~60代	47.1	11.8	41.2
	自分のみ長男か長女	2~30代	53.3	13.3	33.3
		40代	40.0	0.0	60.0
		5~60代	11.1	22.2	66.7
	配偶者のみ長男か長女	2~30代	66.7	0.0	33.3
		40代	58.3	0.0	41.7
		5~60代	71.4	4.8	23.8
	夫婦ともに長男・長女ではない	2~30代	16.7	0.0	83.3
		40代	16.7	8.3	75.0
		5~60代	81.3	6.3	12.5

注:各項目について、'当てはまる'と回答した人の割合を示したものである。

(2) 夫婦の出生順位と年齢階層別にみる青森県内での生活を望んだ理由

夫婦の出生順位と年齢階層別に、青森県内での生活を望んだ理由を確認した(表7-7参照)。

夫婦ともに長男・長女である場合、5~60代男性の71.0%、2~30代男性の半数が「実家やお墓を継ぐため」と回答していた。さらに、2~30代の男性では「家業を継ぐため」という回答も12.5%あり、若い世代の「家」意識が伺えるところである。一方、夫婦ともに長男・長女である場合の2~30代の女性は、「親の近くにいたほうが安心だから」という回答が71.4%を占めており、40代で40.0%、5~60代で35.0%であった。長男はお家を継承するという意識があるとみられるが、長女は親との情緒的関係を重視している様子が伺える。

また、2~30代で「青森でやりたい仕事があった」と回答した男性は12.5%、女性は19.1%であった。生活の安定のためにもっとも重要な要因として働く場が必要であるが、さらにやりがいがある仕事があったとの回答は今後のUJIターン促進政策を考える上でポイントになると考える。

表7-7 出生順位と年齢階層別、青森県内での生活を望んだ理由

(段位: %, N=255)

青森県内で生活したいという 望みがあった理由		実家やお墓を継ぐため		家業を継ぐため		親の面倒をみたり、介護 したりするため		親の近くにいたほうが 安心だから		青森でやりたい 仕事があった	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
夫婦ともに長男・長女	2~30代	50.0	4.8	12.5	0.0	25.0	19.1	37.5	71.4	12.5	19.1
	40代	28.6	20.0	7.1	0.0	35.7	20.0	35.7	40.0	0.0	0.0
	5~60代	71.0	20.0	9.7	0.0	38.7	45.0	32.3	35.0	6.5	5.0
自分のみ長男か長女	2~30代	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.0	0.0	50.0	0.0	10.0
	40代	45.5	25.0	9.1	0.0	36.4	25.0	45.5	100.0	90.9	0.0
	5~60代	33.3	16.7	9.5	0.0	57.1	16.7	33.3	66.7	9.5	16.7
配偶者のみ長男か長女	2~30代	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	16.7	20.0	50.0	20.0	0.0
	40代	18.8	0.0	0.0	0.0	12.5	42.9	62.5	57.1	25.0	0.0
	5~60代	20.0	25.0	0.0	0.0	30.0	25.0	70.0	50.0	0.0	6.3
夫婦ともに長男・長女ではない	2~30代	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	50.0	100.0	0.0	0.0
	40代	25.0	25.0	0.0	0.0	50.0	0.0	25.0	50.0	25.0	0.0
	5~60代	10.0	7.1	0.0	0.0	10.0	24.4	50.0	57.1	0.0	0.0

注:各項目について、当てはまると回答した人の割合を示したものである。

(3) 実家に戻ることは地域移動をさせる要因になるのか。

ここでは、前項で取り上げた回答のうち、「青森で生活したいと思っていなかった」と回答した人のみを対象として、実家、あるいは配偶者の実家で親と同居することが、地域移動をさせる要因になったのかを検討する(表7-8参照)。

夫婦ともに長男・長女である場合、青森で生活したいと思っていなかったのに、実家に戻った割合は46.2%であったが、配偶者の実家に同居する人はいなかった。一方、女性では、自分も長女でありながら配偶者の実家に同居する割合は12.5%であった。

妻のみが長女である男性においても、6.7%が配偶者の実家で同居しているのに対し、夫のみが長男である女性の約3割が配偶者の親と同居していることが確認できる。

実家に戻ることが、地域に戻ってくるのに、どれぐらいの影響をもったのかはこ

の数値から明言することは難しい。ただ、実家に戻って生活するということは、地域移動を説明する一つの要因として位置づけることは可能であろう。さらに、付け加えると長女に比べ、長男にかかる親扶養意識はかなりの影響力をもつと推察できよう。

表7-8 青森で生活したいと思っていなかった人が戻った理由

(段位: %, N=156)

青森で生活したいと思っていなかった人が戻った理由	実家に戻ったから		配偶者の実家で同居するから	
	男性	女性	男性	女性
夫婦ともに長男・長女	46.2	20.0	0.0	12.5
自分のみ長男か長女	25.0	39.1	6.3	4.4
配偶者のみ長男か長女	33.3	30.8	6.7	30.8
夫婦ともに長男・長女ではない	0.0	31.3	0.0	12.5

注: 各項目について、'当てはまる'と回答した人の割合を示したものである。

3. 小括

本章では、親扶養への規範意識を表す指標として夫婦の出生順位に着目し、夫婦の出生順位とU J Iターン地域移動との関係を明らかにした。本章での結果をもとに、特に夫婦ともに長男・長女の場合の地域移動および地域定着について考察を行いたい。第1に、夫婦ともに長男・長女の場合、2~30代の約3割は妻の親と同居しているが、約7割の女性は自分が長女であっても夫の親と同居していることが確認できた。他方、自分のみ長女である場合、40代の71.4%、5~60代の70.0%が自分の親と同居していることが確認できた。夫婦ともに長男・長女の場合には、夫の出生順位が優先されるが、妻のみが長女である場合には、そのことを考慮し妻方親との同居が行われていると推察される。第2に、夫婦の出生順位と年齢階層別にみる青森県内に引っ越してくることを可能にした条件をみると、夫婦ともに長男・長女の場合、年齢階層に関わらず「実家に住むことができた」ことをあげた人がもっとも多く、男女でも共通している結果であった。他方、夫婦ともに長男・長女でない2~30代の女性の16.7%が実家から支援があったことを条件としてあげていた。夫婦の出生順位は、世代間支援において支援する側、支援される側という方向を決定する要因として作用していることが伺える。第3に、夫婦ともに長男・長女である場合、2~30代の男性では「家業を継ぐため」という回答も12.5%であり、また、夫婦ともに長男・長女である場合の2~30代の女性

は、「親の近くにいたほうが安心だから」という回答が71.4%を占めていることが分かった。長男はお家を継承するという意識があるとみられるが、長女は親との情緒的関係を重視している様子が伺える。最後に、2-30代で「青森でやりたい仕事があった」と回答した男性は12.5%、女性は19.1%であることに注目したい。生活の安定のためにもっとも重要な要因として働く場が必要であるが、さらに、やりがいがある仕事があったとの回答は今後のUJIターン促進政策を考える上でポイントになると考える。

【参考文献】

- 岩井紀子・保田時男，2008，「世代間支援における夫側と妻側のバランスについての分析—世代間関係の双系化論に対する実証的アプローチ」『家族社会学研究』20(2)：34-47.
- 韓ギョンヘ・金サンウク，2010，“世代間支援交換の説明要因における父系と母系の比較，” 韓国社会学，44(4)，1-31.
- 白波瀬佐和子，2005，「少子高齢社会の世代間支援」『少子高齢社会のみえない格差—ジェンダー・世代・階層のゆくえ—』東京大学出版会，135-160.

第8章 東青津軽地域住民の仕事と学歴について

飯田清子

1. はじめに

本章では、学歴と地域移動の関係について注目する。

近年、日本では人口減少と少子高齢化の進展による労働力人口の低下が予想される中、人的資本を高めることで、労働生産性を高め、経済成長率を維持することが必要であるとされている。地方では、教育機会に限られるため、高度な専門知識や技能を身につけるために、進学時に、多くの若者が地方から都市への移動を行う。したがって、教育機会の格差が地域間労働移動に影響を及ぼす(李(2010))。結果として、地域の人口減少問題や衰退に対し、「人材」を、地域移動(UJIターン)によっていかに勧誘するかという側面が強くなっている(石倉(2009))。そこで、地域移動により地域活性化を促進させるためには、地域移動(UJIターン)によって得られる仕事上の満足度を高めることが重要であるとされる。これに対して大谷(2013)では、引っ越しに伴って仕事を決定するタイミングによって異なる政策の実施必要性と指摘している。さらに、李(2010)は、東北地方のデータを用いて、人的資本レベルの違いによって、賃金と就業機会が異なるため移動の形態が異なり、地方から都市への移動による経済的な利益が、大学卒においては大きく、高卒や大学院卒では小さいことを確認している。

これを踏まえて、本章では、人口流出が進行する地域で、労働生産性を高める高度な専門知識や技能を持つ人材、すなわち学歴取得者が地域に流入しにくいのは、移動に伴う労働環境の変化によって、満足度が低下しているという理由にあるのではないか、という問題意識のもと、東青津軽地域で生活する学歴取得者に、地域間移動がどのように影響を及ぼしているのかについて分析する。

2. 分析結果

(1) 移動の分類について

本章における移動については、第3章の分類を用いる。

また、学歴分布における調査対象者の中には、短大・高専・専門学校在学中と大学・大学院在学中の回答者がいるが、UJIターンに関する実態の調査のために、これら15名は、分析対象者からは除外することとする。また、高校中退者については中卒者、短大・高専・専門学校、大学・大学院の中退者については、いずれも高卒者、として分析することとした。したがって、①中卒者層、②高

卒者層、③短大・専門学校卒者層、④大学・大学院卒者層の4つに分類し、分析する。

(2) 移動形態と学歴の分布

はじめに、回答者全体の、移動形態と学歴の分布について概観する。

表1 移動形態別学歴構成比

		中卒	高卒	短大・専門学 校卒	大学・大学院 卒	合計
定住	人	22	289	126	51	488
	(%)	4.5	59.2	25.8	10.5	100.0
UJターン	人	28	174	109	101	412
	(%)	6.8	42.2	26.5	24.5	100.0
Iターン	人	4	27	34	47	112
	(%)	3.6	24.1	30.4	42.0	100.0
県内流入	人	6	95	76	68	245
	(%)	2.5	38.8	31.0	27.8	100.0
合計	人	60	585	345	267	1,257
	(%)	4.8	46.5	27.5	21.2	100.0

$$\chi^2_{(9)} = 98.9743, p < .01$$

表1には、移動形態と学歴の分布の関係を示した。回答者全体の構成比からみると、高卒者層が46.5%と最も多い。大学・大学院卒者層は、21.2%であるが、2010年の国勢調査における人口に占める学歴獲得者の割合は、それぞれ中学校卒業者層25%、高卒者層47%、短大・専門学校卒業者層12%、大学・大学院卒者層15%であるので、東青津軽地域は、高学歴層が多い地域であるといえることができる。

移動形態でみると、定住者の学歴は、それほど高くなっていない。移動形態で、高学歴の比率が高くなるが、Iターン者層である。

(3) 就業形態

次に、東青津軽地域において、移動形態と学歴の異なる労働者が、どのような就業形態で働いているのかについてみることにする。本節では、前節の移動形態を、その移動の性質から、定住者、県外からの移動者(UJターン者)、県外からの移動者(Iターン者)、県内流入者の4つに分け、それぞれの就業形態を学歴ごとに比較した。また、県外からの移動者と県内流入者については、移動の前後において、その就業形態が変化しているかどうかを分類した。したがって、移動経験者については、移動の前後での就業形態の回答が得られたものを用いた。

図1には、東青津軽地域における定住者の就業状態を示した。中卒者層の中の無業者の割合が高いのが特徴である。また、パート・アルバイトの占める割合が最も多いのは、高卒者層23.2%で、また、定住者の高学歴者は、正社員比率が高く、パート・アルバイトに就く割

合が低くなっていることも、特徴の1つであるといえる。

図1 定住者の学歴別就業形態 (N=481)

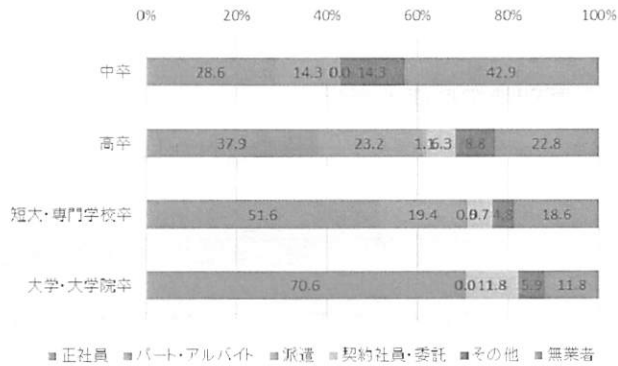


図2では、U J ターン者における学歴別の就業形態を、移動前と移動後の割合で比べている。移動後の就業形態の比率については、定住者と大きく変わらないが、移動前は、高学歴者層で無業者の割合が 37.4%と、多い傾向がある。これは、次節の移動理由で確認できるが、地域外にいたとき学生で、就職のために移動してくるパターンがあるためであると考えられる。

移動前に比べ、移動後で正社員の割合が増えるのは大学・大学院卒者のみで、それ以外は、正社員の割合が減少する。正社員の割合に限ってみると、特に学歴の低い層においては職の獲得に関して、移動が必ずしも有利に働いていない可能性があるということを示唆している。

図2 県外からの移動者 (U J ターン者) の学歴別就業形態の変化

(移動前N=397)

(移動後N=407)

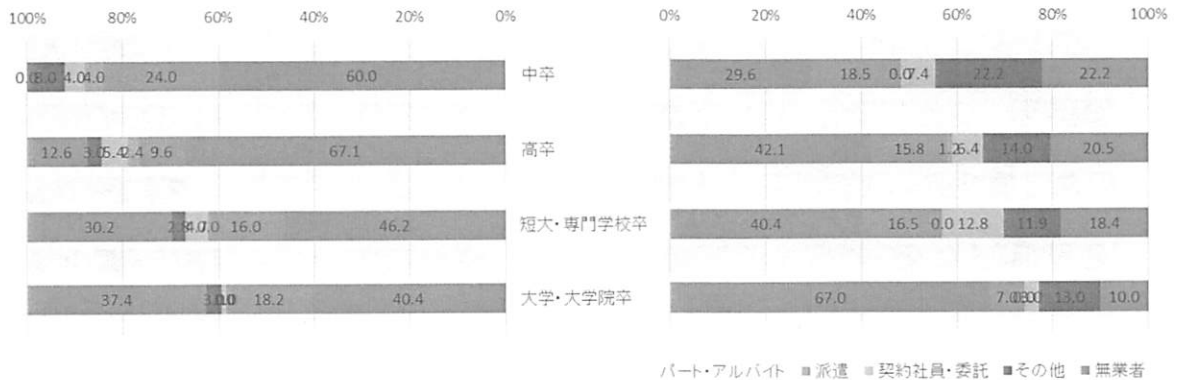
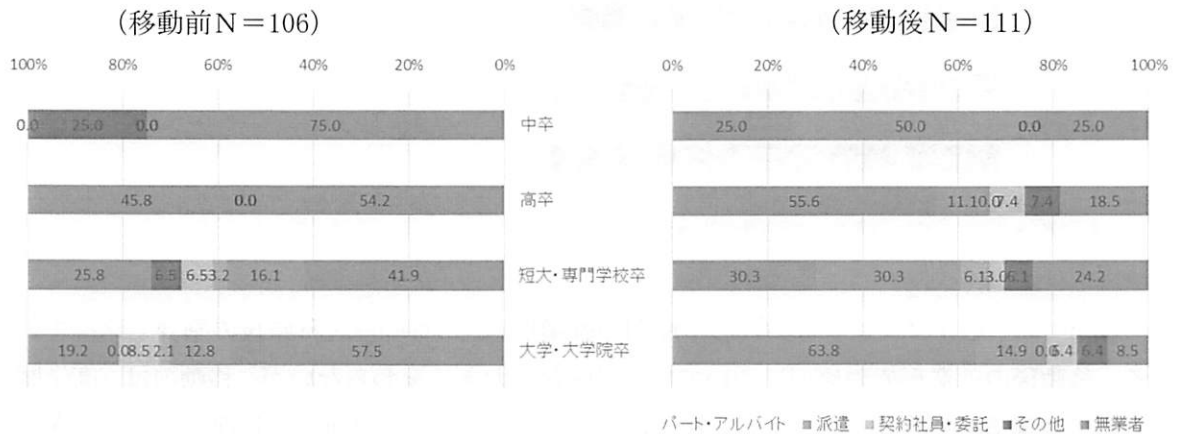


図3は、I ターンによる移動者の就業形態の変化を表したものである。移動後の短大・専門学校卒者層をみると、パート・アルバイトの割合が高くなっている。これは、次でみる収入に影響を及ぼしていることを示唆している。正社員の割合が高い層では、収入が高くなり、

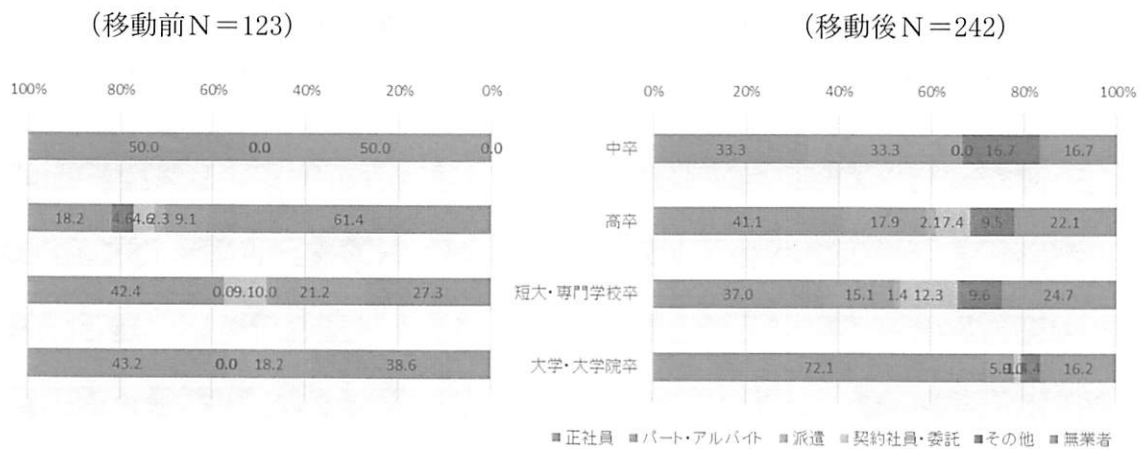
パート・アルバイトの割合が高くなっている層では、収入が低くなる傾向がみられる。高卒者層のIターン者の収入はパート・アルバイトの割合の割合は低くなっている。それとは逆に、短大・専門学校卒者層では、Iターン者層のパート・アルバイトの割合が高く、収入が低い傾向にある。

図3 県外からの移動者（Iターン者）の学歴別就業形態の変化



県内流入者層の就業形態は、県外からの移動者と同様、無業者の割合が、高学歴者層で移動後減少するのに対し、低学歴者層では増加する。正社員の割合についてみると、移動後、正社員の割合は増加しているが、高卒者層だけは、減少しており、その比率は移動前61.4%から移動後は41.1%にまで減少する。

図4 県内流入者の学歴別就業形態の変化



(4) 移動に伴う離職

次に、東青津軽地域での移動を行った層について、移動の際の離職の状況を見てみる。

表2をみると、全体としては、離職し、職を決めずに移動を行った者の割合が35.1%と最も高くなっている。その割合は、低学歴層ほど高く、中でも、中卒者の場合、6割合を超える者が離職しているのである。前もって職を決めてから移動をしたのは、全体では、9.3%と割合が低くなっている。移動前は、就業しておらず、移動後に職につく割合は、短大・専門学校卒者層、大学・大学院卒者層で高くなっているが、これは、卒業し、就職のために移動してくる場合があることからであると考えられる。

表2 移動における離職の分類

(単位：%)

	中学校卒業	高校卒業	短大・高専・ 専門学校卒	大学・大学 院卒業	合計
	N=19	N=246	業N=171	N=190	N=626
離職・引越し前	10.5	8.5	7.0	12.1	9.3
離職・手伝い	10.5	5.7	5.3	3.7	5.1
離職・未定	63.2	44.3	35.7	20.0	35.1
転勤・配置転換	0.0	25.6	11.1	19.5	19.0
就職	15.8	15.9	40.9	44.7	31.5
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

$$\chi^2_{(12)} = 85.3449, p < .01$$

(5) 収入

① 収入

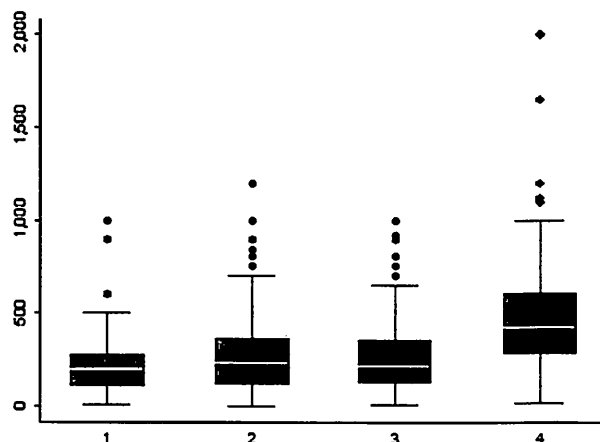
移動によって離職をする比率が高い中、収入に対する変化はどのようになっているのだろうか。次に、移動タイプ別の収入（年収）について、見ていく。

表3と図4は、どちらも収入を学歴別に表したものである。収入が最も高いのが大学・大学院卒者の層、次いで高卒者層、中卒業者層で、最も低いのが、短大・専門学校卒者層である。年収の散らばりをはかる標準偏差を見ても、短大・専門学校卒者層が最も低く、収入についてみると、通学歴が長くなると収入が高くなるという関係が、東青津軽地域においては、必ずしも成り立っているというわけではないということがいえる。大学・大学院卒者層は、平均値、中央値とも、ほかの層と比べて高くなっている。一方で、レンジも大きくなっていることから、大学・大学院卒者層は、ほかの学歴層以上に就業形態によって得られる収入の差が大きいということがいえる。

表3 学歴別の収入

	N	平均値	中位値	標準偏差	最大値	最小値	レンジ
中卒	38	241.3158	200	209.173	1000	10	990
高卒	435	271.9586	230	191.3093	1200	0	1200
短大・専門学校卒	259	260.3861	216	176.1764	1000	10	990
大学・大学院卒	225	470.6711	420	271.6437	2000	20	1980
合計	957	314.3292	250	227.0343	2000	0	2000

図4 学歴別の収入



(凡例) 1: 中卒者, 2: 高卒者, 3: 短大・専門学校卒者, 4: 大学・大学院卒者

② 学歴と移動タイプによる収入

表4は、表3で示した学歴別の収入の違いを、それぞれ移動形態別に分類したものである。また、図5～図8は、表4をグラフに書き換えたものである。

それぞれの学歴層における収入の特徴を概観すると、中卒者層では、収入の大きな差はないが、定住者層と県内流入者層の収入が高い。高卒者層では、U J ターン者に比べ、I ターン者の収入が高くなっている。短大・専門学校卒者層で最も低いのはI ターン者の収入で、大学・大学院卒者層では、U ターン者の収入が高くなっている。これらについて、次節で述べる移動の理由で、転勤や配置転換が多いことから、それぞれの学歴層で、青森県内に支店・支部がある全国規模の大企業に就職し、いったん県外で生活した後に転勤などにより戻ってきたケースが一定数あり、収入にも影響していると考えられる。

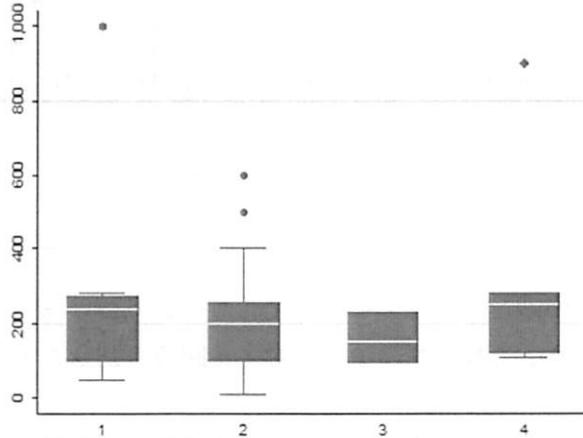
移動形態別にみると、定住者では、学歴が高くなるにつれて収入は高くなるが、移動の形態に関わらず、移動をした、短大・専門学校卒者層の収入は低くなる。

表4 学歴で分類した移動タイプ別年収

(単位:万円)

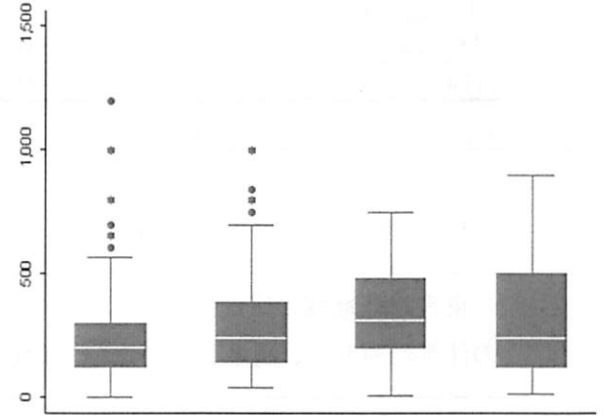
		平均	平均	下位 10%点	下位 25%点	上位 25%点	上位 10%点	標準偏差	最大値	最小値	n
中卒	定住	270.2	235	72	98	270	640	270.2	1000	48	10
	UJターン	216.7	200	58	100	255	450	152.8	600	10	20
	Iターン	158.7	150	96	96	230	230	67.4	230	96	3
	県内流入	331.6	250	108	120	280	900	326.8	900	108	5
高卒	定住	240.2	200	84	120	300	500	173.5	1200	0	213
	UJターン	293.5	240	96	144	384	600	198.1	1000	40	129
	Iターン	346.9	312	96	200	480	600	203.7	750	6	22
	県内流入	304.8	240	80	120	500	600	211.6	900	12	71
短大・ 専門学校 卒	定住	248.7	218	108	147.5	300	420	141.9	750	36	96
	UJターン	267.5	225	80	130	355	480	190.3	1000	24	84
	Iターン	200.4	140	60	84	250	480	161.7	600	10	25
	県内流入	297.9	230	98	132	400	600	207.4	1000	78	54
大学・ 大学院卒	定住	408.3	365	180	256	550	690	195.0	840	130	40
	UJターン	495.2	455	144	300	600	800	316.0	2000	84	88
	Iターン	460.0	400	110	240	600	960	304.3	1200	20	41
	県内流入	484.5	500	240	351	600	750	210.2	1000	70	56

図5 中卒者層収入



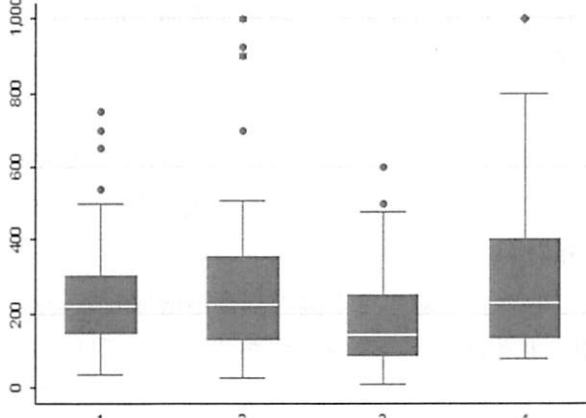
(凡例) 1: 定住者, 2: UJ ターン者,
3: I ターン者, 4: 県内流入者

図6 高卒者層収入



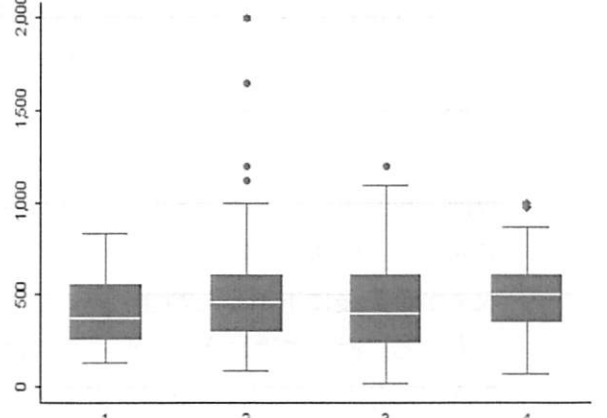
(凡例) 1: 定住者, 2: UJ ターン者,
3: I ターン者, 4: 県内流入者

図7 短大・専門学校卒者層収入



(凡例) 1: 定住者, 2: UJ ターン者,
3: I ターン者, 4: 県内流入者

図8 大学・大学院卒者層収入



(凡例) 1: 定住者, 2: UJ ターン者,
3: I ターン者, 4: 県内流入者

③ 収入の変化

表5は、移動を行った結果、収入に変化があったかどうかを示している。学歴に関わらず、「かなり下がった」とする回答が多い。特に中卒者層では、「かなり下がった」51.5%と、「少し下がった」21.2%との回答が合計で7割を超える。前節の移動による離職とあわせてみると、学歴が低い層ほど、離職による移動が多く、移動後就職したとしても、収入には負の効果が大きいと考えられる。反対に学歴が高い層ほど移動により収入が増加する傾向があることがわかる。

表5 移動による収入の変化

(単位：%)

	中卒 N=33	高卒 N=223	短大・専門 学校卒 N=146	大学・大学院 卒 N=166	合計 N=568
かなり下がった	51.5	40.8	41.1	27.7	37.7
少し下がった	21.2	16.1	15.1	10.8	14.6
ほとんど変わっていない	18.2	35.4	31.5	33.1	32.8
少し上がった	6.1	5.4	8.9	7.8	7.0
かなり上がった	3.0	2.2	3.4	20.5	7.9
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

$$\chi^2_{(12)} = 61.4076, p < .01$$

(6) 仕事に対する満足度について

東青津軽地域の住民は、仕事に対して、どの程度満足しているのだろうか。表6は、現在の仕事に対して、満足しているか、不満であるか、それぞれの項目に対する回答の割合を示している。

満足度について、全体的には、不満であるとする回答よりも、満足しているとする回答が多い。最も満足度が高いのは「自宅と勤務地の距離」である。反対に、最も満足度が低かったのは「収入」である。

「やりがい」は、「自宅と勤務地の距離」に次ぎ、満足度が高い。高学歴者層で高くなる傾向があり、特にIターン者層の大学・大学院卒者層では、3割以上が満足であると回答している。

最も満足度の低い「収入」についてみてみると、UJターン者層と、県内流入者層の短大・専門学校卒者に、不満であるという回答が多かった。前にもみたように、短大・専門学校卒者層では、移動後に勤務形態が正社員の割合が減り、パート・アルバイトの割合が増える。収入が移動後に下がった割合も高いことから、「収入」に対する不満の割合が増加していると考えられる。次いで満足度が低かったのは「仕事と私生活のバランス」である。この項目での不満であるとの回答は、高学歴者層で多くなっている。

高卒者層も、移動の直接のきっかけは、勤務に関連したことが多い。中でも最も多いのが、「転勤や配置転換」28.8%である。また、「仕事を自分から辞めた」24.3%と、「解雇された／契約が切れた」2.5%と、失業による移動も、一定数の回答あった。高卒者層で特徴的なのは、家族に関連した回答数も一定の回答があり、「特に問題はないが、親に実家に戻るように言われた」14.4%は、4グループ中、最も高い割合となっている。

短大・専門学校卒者層は、勤務による移動、「転勤や配置転換」15.0%や、失業による「仕事を自分から辞めた」12.7%という仕事に関連した理由への回答もあるが、最も多いのは「学校を卒業した」22.5%、次いで「今の地域、またはそこから通える範囲に就職した」15.6%となっている。家族に関連した理由もこの層についても一定数の回答があった。

大学・大学院卒者層も、「学校を卒業した」24.4%、次いで「今の地域、またはそこから通える範囲に就職した」20.7%と、進学先からの移動したことを理由とする回答が多く、割合、実数ともに短大・専門学校卒者層を上回っている。仕事に関連した理由として、「転勤や配置転換」23.8%である。失業による移動、「仕事を自分から辞めた」10.4%、「転職先が青森県内で見つかった」11.9%もそれぞれ1割を超える回答があった。この層で特徴的なのは、家族に関連した回答が比較的少ないということである。「特に問題はないが、親に実家に戻るように言われた」10.4%については、ほかの層とあまり変わりはないが、それ以外では、ほかの層の半分ほどの回答数になっている。

表8 青森県内に引っ越してくるようになった直接のきっかけ（複数回答）

	中卒 N=33		高卒 N=243		短大・専門学校卒 N=173		大学・大学院卒 N=193	
	(%)	ケース	(%)	ケース	(%)	ケース	(%)	ケース
1. 家族が怪我や病気をした	9.1	3	16.0	1	6.36	11	3.1	6
2. 家族の介護が必要になった	3.0	1	12.0	2	3.47	6	2.1	4
3. 実家の家業に問題が発生した	3.0	1	5.0	3	2.31	4	0.0	0
4. 特に問題はないが、親に実家に戻るように言われた	6.1	2	35.0	4	13.29	23	10.4	20
5. 自分が結婚した	12.1	4	11.0	5	8.67	15	9.3	18
6. 子どもが産まれた	6.1	2	2.0	6	1.73	3	0.5	1
7. 子どもが小学校や中学校にあがった	3.0	1	2.0	7	0	0	0.0	0
8. 子どもが高校に進学した	0.0	0	0.0	8	0	0	0.0	0
9. 家を買った	3.0	1	3.0	9	2.89	5	0.5	1
10. 学校を卒業した	0.0	0	4.0	10	22.54	39	24.4	47
11. 今の地域、またはそこから通える範囲に就職した	0.0	0	5.0	11	15.61	27	20.7	40
12. 転勤や配置転換	3.0	1	70.0	12	15.03	26	23.8	46
13. 転職先が青森県内で見つかった	12.1	4	16.0	13	8.09	14	11.9	23
14. 自分が怪我や病気をした	3.0	1	9.0	14	5.2	9	3.1	6
15. 仕事を自分から辞めた	27.3	9	59.0	15	12.72	22	10.4	20
16. 解雇された／契約が切れた	12.1	4	6.0	16	1.16	2	1.6	3
17. 友人や仲間に誘われた	0.0	0	2.0	17	0	0	0.0	0
18. 親戚に誘われた	3.0	1	2.0	18	1.73	3	0.0	0
19. その他の知人に誘われた	0.0	0	0.0	19	0	0	0.5	1
20. 移住支援事業など、自治体の働きかけがあって	0.0	0	0.0	20	0	0	0.0	0
21. その他	12.1	4	33.0	21	10.98	19	13.5	26

(2) 移動を可能にした条件

表7は、東青津軽地域に移動をすることを可能にした具体的な条件についての回答をまとめたものである。「実家に住むことが出来た」(中学校卒業者層:45.5%、高卒者層:56.7%、短大・専門学校卒業者層:61.1%、大学・大学院卒業者層:41.7%)を、移動を可能にした条件としての回答が、すべての層で、最も多くなっている。移動の理由として、家族に関する回答が最も低かった大学・大学院卒業者層でも、移動することができる条件として、4割以上が実家の存在をあげている。

また、先にも述べたが、「勤務先に支店や支部があった」という回答が、大学・大学院卒業者層で29.2%と、実家に住む理由に次いで多くなっている。また、高卒者層20.2%、短大・専門学校卒業者層13.4%も一定数の回答があり、勤務形態との関連を示唆している。

表7 青森県内に引っ越してくるようになった直接のきっかけ(複数回答)

	中卒 N=33		高卒 N=238		短大・専門学校卒 N=172		大学・大学院卒 N=192	
	(%)	ケース	(%)	ケース	(%)	ケース	(%)	ケース
1. 実家に住むことが出来た	45.5	15	56.7	135	61.1	105	41.7	80
2. 実家以外に、住む家や土地があった	12.1	4	7.6	18	7.0	12	4.2	8
3. 家族から、生活について援助が受けられた	0.0	0	8.8	21	8.1	14	9.9	19
4. 親戚から、生活について援助が受けられた	3.0	1	0.4	1	0.6	1	0.5	1
5. 友人、知人、恋人から、生活について援助が受けられた	3.0	1	0.8	2	0.6	1	1.6	3
6. 引っ越すことについて、家族の理解があった	6.1	2	11.8	28	17.4	30	13.0	25
7. 勤務先に、支店や支部があった	3.0	1	20.2	48	13.4	23	29.2	56
8. 転勤して、定職に就く見込みがあった	24.2	8	13.5	32	15.1	26	10.9	21
9. 定職に就けなくても、生活していける見込みがあった	9.1	3	3.4	8	9.3	16	5.7	11
10. 子どもが自立していた	0.0	0	0.4	1	4.7	8	0.5	1
11. 生活のコストが安かった	3.0	1	2.5	6	0.0	0	0.0	0
12. 自治体による移住支援があった	0.0	0	0.0	0	0.6	1	0.0	0
13. その他	15.2	5	10.1	24	10.5	18	17.2	33

4. 小括

本章では、地域移動が東青津軽地域のさまざまな学歴層の住民について、地域移動と労働環境との関係について注目して分析を行った。ここでは、主な結果をまとめておく。予想とは反対に、①移動後、労働形態や収入が悪化するの、高学歴層ではなく低学歴層である。②満足度について高学歴層は「ほぼ満足している」「満足している」の割合が全体的に多い。これに対し、低学歴層では「あまり満足していない」や「満足していない」と回答する割合が多くなっている。③移動を行う理由が、家族における理由よりは仕事の理由によるものが多く、この傾向は高学歴層ほど明確である。

今後、同県他地域と比較・分析や、就職している企業の青森県内の支店の有無に関する比較や分析を行うことで、青森県のUJIターン者の現状と特徴をより理解し、UJIターン者勧誘のための、教育補助政策や仕事を決定するタイミングによる支援策など、政策検討を

促すことができるのではないかと考えられる。

【参考文献】

李永俊（2012）「地域間移動から若者が得る経済的な利益」『「東京」に出る若者たち—仕事・社会関係・地域間格差』、ミネルヴァ書房 47 - 70。

石倉義博（2009）「地域からの転出と『Uターン』の背景」東大社研・玄田有史・中村尚史編『希望学 [3] 希望をつなぐ—釜石からみた地域社会の未来』東京大学出版会 163 - 204。

大谷剛（2012）「U・Jターン時の仕事決定タイミングと正社員就職、報酬、仕事上の満足度の関連」Discussion Paper Series 12-01、労働政策研究・研修機構。

回答者集計表

まず、結果の整理に必要な、いくつかの点についてお聞きします

n=1288		
計画数	対象者不在	サンプリング・ミス 38
回収率	/1288=	

問1 あなたの性別を教えてください 40.8 1. 男 59.1 2. 女 DKNA 0.1

問2 あなたの生年月をおうかがいします。 西暦 () 年 () 月
年齢平均 45.3 歳 median 46 歳 min.20 歳 max.70 歳 DKNA 2.4

問3 あなたは、現在結婚していますか。
66.5 1. 結婚している 9.0 2. 離別・死別した 24.4 3. 結婚していない DKNA 0.1

問4 お子さんはいますか。
該当者 848 名中
34.1 1. いない 65.8 2. いる → 一番下のお子さんは () 歳 DKNA 0.1
平均 16.3 歳 median 17 歳 min 0 歳 max 41 歳 DKNA 1.4

問5 現在、あなたはどなたと同居していますか。一緒に暮らしている方すべてに○をつけてください。一人暮らしの方は、「14. 一人暮らし」に○をつけてください。

62.5 1. 夫や妻 17.1 2. 自分の父 26.6 3. 自分の母 3.4 4. 舅(夫や妻の父)
9.0 5. 姑(夫や妻の母) 8.2 6. 兄弟姉妹 32.1 7. 息子 31.0 8. 娘
1.6 9. 祖父 3.6 10. 祖母 2.7 11. 孫 1.9 12. 嫁・娘婿
2.7 13. その他(具体的に:)
9.5 14. 一人暮らし DKNA 0.2

問6 現在、住んでいる家の世帯主はどなたですか。

40.5 1. 自分 35.5 2. 夫や妻 19.1 3. 自分の父母 2.3 4. 舅・姑(夫や妻の父母)
0.5 5. 兄弟姉妹 0.3 6. 息子・娘 0.5 7. 祖父母 0.2 8. 夫や妻の祖父母
0.8 9. その他(具体的に:)
DKNA 0.3

問7 あなたの現在の住居は次のどれですか。

71.0 1. 持家(一戸建て) 1.8 2. 分譲マンション 2.6 3. 公営住宅
18.0 4. 民間・公団の賃貸住宅 2.5 5. 社宅・社員寮 3.7 6. その他
DKNA 0.3

問8 実家まで帰るのに、どのくらい時間がかかりますか。

32.5 1. 今は実家で暮らしている
 29.9 2. 30分未満 13.7 3. 30分～1時間未満 11.6 4. 1～2時間未満
 4.1 5. 2～3時間未満 6.4 6. 3時間以上 DKNA 1.9

問9 (1) あなたは長男、または長女ですか。 66.2 1. はい 33.4 2. いいえ DKNA 0.5

(2) 配偶者は長男、または長女ですか。 42.9 1. はい 21.0 2. いいえ

32.2 3. 配偶者はいない DKNA 4.0

問10 現在、お住まいの地域はどこですか。

91.9 1. 青森市 3.8 2. 平内町 0.9 3. 今別町 1.0 4. 蓬田村 2.4 5. 外ヶ浜町
 0.0 6. その他(具体的に:) DKNA 0.0

問11 あなたが通った、または現在通っている学校についてお聞きします。

(1) あなたが卒業した中学校の所在地はどこですか。

60.8 1. 青森市 4.2 2. 平内町 1.7 3. 今別町 1.7 4. 蓬田村 3.5 5. 外ヶ浜町
 2.3 6. 弘前市 1.7 7. 八戸市 15.1 8. それ以外の青森県内
 8.8 9. 青森県外(都道府県名:) 0.0 10. 国外 DKNA 0.0
 該当者 113 名中

12.4 01 北海道	02 青森県	15.9 03 岩手県	14.2 04 宮城県	15.0 05 秋田県
3.5 06 山形県	7.1 07 福島県	0.9 08 茨城県	1.8 09 栃木県	1.8 10 群馬県
2.7 11 埼玉県	2.7 12 千葉県	8.0 13 東京都	1.8 14 神奈川県	0.0 15 新潟県
0.0 16 富山県	0.9 17 石川県	0.0 18 福井県	0.0 19 山梨県	0.9 20 長野県
0.9 21 岐阜県	0.0 22 静岡県	0.9 23 愛知県	0.0 24 三重県	0.0 25 滋賀県
0.0 26 京都府	2.7 27 大阪府	0.0 28 兵庫県	0.9 29 奈良県	0.0 30 和歌山県
0.0 31 鳥取県	0.0 32 島根県	0.0 33 岡山県	2.7 34 広島県	0.0 35 山口県
0.0 36 徳島県	0.0 37 香川県	0.0 38 愛媛県	0.0 39 高知県	0.0 40 福岡県
0.0 41 佐賀県	0.0 42 長崎県	0.0 43 熊本県	0.0 44 大分県	0.0 45 宮崎県
0.9 46 鹿児島県	0.0 47 沖縄県			DKNA 1.8

(2) あなたが最後に通った、または通っている学校は、次の中のどれにあたりますか。

3.2 1. 小学・中学校 44.4 2. 高校 11.8 3. 短大・高専
 23.5 4. 大学・大学院 16.8 5. 専門学校 DKNA 0.3

(3) その学校は、どこにありますか (ありましたか)。

49.7 1. 青森市 1.1 2. 平内町 1.6 3. 今別町 0.0 4. 蓬田村 0.5 5. 外ヶ浜町
 11.0 6. 弘前市 1.9 7. 八戸市 8.5 8. それ以外の青森県内
 25.6 9. 青森県外 (都道府県名：) 0.1 10. 国外
 該当者 330 名中 DKNA 0.1

12.7	01 北海道	02 青森県	7.6	03 岩手県	18.2	04 宮城県	5.5	05 秋田県
1.5	06 山形県	1.2	07 福島県	1.8	08 茨城県	0.3	09 栃木県	1.2
2.7	11 埼玉県	1.5	12 千葉県	30.0	13 東京都	3.6	14 神奈川県	0.6
0.0	16 富山県	0.3	17 石川県	0.3	18 福井県	0.6	19 山梨県	0.0
0.9	21 岐阜県	0.3	22 静岡県	1.5	23 愛知県	0.0	24 三重県	0.6
1.5	26 京都府	0.9	27 大阪府	0.3	28 兵庫県	0.6	29 奈良県	0.0
0.0	31 鳥取県	0.0	32 島根県	0.0	33 岡山県	0.6	34 広島県	0.0
0.0	36 徳島県	0.0	37 香川県	0.0	38 愛媛県	0.0	39 高知県	0.0
0.0	41 佐賀県	0.0	42 長崎県	0.0	43 熊本県	0.0	44 大分県	0.0
0.3	46 鹿児島県	0.0	47 沖縄県					DKNA 2.7

(4) その学校を卒業しましたか、それとも中途退学しましたか。

93.6 1. 卒業した 5.1 2. 中途退学した 1.2 3. 現在通っている DKNA 0.3

問 12 現在の仕事についてお聞きします。

(1) 家業の手伝いも含めて、ふだん何か収入になる仕事をしていますか。

20.1 1. 仕事をしていない → (2) ~ (12) は飛ばして、5 ページの間 13にお進みください

78.8 2. 仕事をしている → (2) ~ (12) にお答えください DKNA 1.0

(2) 先週一週間で働いたのは何日で、労働時間は合計すると何時間ですか。

() 日働いて、労働時間は合計 () 時間くらい

該当者 1,015 名中

平均	5.2 日	平均	42.0 時間
1 日以下	1.1	median	40.0 時間
2 日	0.8	min.	0.0 時間
3 日	2.3	max.	100.0 時間
4 日	5.1		DKNA 2.4
5 日	59.6		
6 日	0.1		
7 日	5.2		
DKNA	0.7		

(3) 通勤時間は、往復で何分くらいですか。

該当者 1,015 名中

4.5 1. 自宅で仕事をしている

94.5 2. 通勤には往復で () 分くらいかかる DKNA 1.0

該当者 959 名中

平均 37.6 分 Median 30 分 min. 0 分 max. 240 分 DKNA 2.4

(4) 現在の仕事で得られる収入はどれくらいですか。月収と年収の両方を、税引き前の金額でお答えください。

月 () 万円くらいで、年 () 万円くらい

該当者 1,015 名中

平均 月 22.2 万円

平均 年 312.9 万円

Median 30 万円

Median 250 万円

min. 0 万円

min. 0 万円

max. 130 万円

max. 2000 万円

DKNA 4.7

(5) 現在の仕事の勤務先（職場）はどの地域にありますか。

該当者 1,015 名中

88.8 1. 青森市 2.9 2. 平内町 0.5 3. 今別町 0.8 4. 蓬田村 1.6 5. 外ヶ浜町

1.9 6. 弘前市 0.3 7. 八戸市 2.7 8. それ以外の青森県内

0.2 9. 青森県外（都道府県名：) 0.0 10. 国外 DKNA 0.0

(6) 現在の仕事について、次のようなことに満足していますか、不満ですか。

該当者 1,015 名中

	満足	まあ満足	どちらとも いえない	やや不満	不満	DKNA
	↓ 1	↓ 2	↓ 3	↓ 4	↓ 5	
a. 総合的に	12.8	42.4	24.4	12.1	7.5	0.8
b. 収入	9.9	29.6	20.6	22.4	17.0	0.7
c. やりがい	16.4	38.8	27.3	9.8	6.9	0.9
d. 労働時間	16.6	33.4	25.7	14.2	8.5	1.7
e. 福利厚生	15.8	30.4	28.6	12.2	10.4	2.6
f. 自宅と勤務地の距離	37.8	34.6	16.1	6.5	3.7	1.3
g. 仕事と私生活のバランス	13.6	33.9	26.7	16.0	9.1	0.8

(7) あなたの仕事は、次のどれに当たりますか。複数の仕事についている方は、**もっとも近い職種に○をつけてください。**

該当者 1,015 名中

- 7.5 1. 管理職……………会社・官庁・団体の役員や管理職など
- 21.0 2. 専門・技術職……………専門的で高度な知識や技術が必要な仕事
法律家、医師・看護師、芸術、教育・保育職、研究・開発、
技術者・エンジニア、プログラマ、パイロットなど
- 18.5 3. 事務職……………会社・官庁・団体などの事務職
- 8.6 4. 販売職……………店員、販売員など、直接個人のお客と接する仕事
- 4.3 5. 営業職……………会社、営業所などとの交渉や販売に関わる仕事
- 14.7 6. サービス職……………ウェ이터、調理、接客担当、美容師、介護など
- 4.8 7. 技能職……………整備士、大工、左官、配管工、技能工など
- 3.2 8. 保安職……………自衛官、警察官、消防士、警備員など
- 6.0 9. 製造・生産職……………工場勤務者、建設作業者
- 3.1 10. 農林水産関係……………農業、林業、水産業、食品加工
- 2.6 11. 運輸業……………タクシー、バス、トラックなどの運転手
- 2.4 12. その他の仕事（具体的に： _____)

DKNA 2.1

(8) あなたのお仕事は、勤めでしょうか、自営でしょうか。

該当者 1,015 名中

- 1.8 1. 家業の手伝い
- 8.2 2. 自営業または会社経営 } → 5 ページの間 1 3 にお進みください
- 89.7 3. 雇われている → (9) にお進みください

DKNA 0.4

(9) 勤め先での立場を教えてください。

該当者 910 名中

- 61.7 1. 正規の職員・従業員
- 2.1 2. 会社役員
- 23.6 3. パート、アルバイト
- 1.1 4. 派遣社員
- 9.2 5. 契約社員・委託
- 2.1 6. その他（具体的に： _____)

DKNA 0.3

(10) 勤め先の企業全体の従業者数を教えてください。

該当者 910 名中

- 4.2 1. 1～4名
- 22.8 2. 5～29名
- 18.4 3. 30～99名
- 19.0 4. 100～299名
- 34.1 5. 300名以上

DKNA 1.0

(11) 今の職場に勤め始めてどれくらいになりますか。

() 年と () ヶ月くらい

該当者 910 名中

平均 142.1 ヶ月 Median 109 ヶ月 min. 0 ヶ月 max. 516 ヶ月 DKNA 0.1

(12) 今の仕事をどうやって見つけましたか (〇はいくつでも)。

該当者 910 名中

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 10.9 1. 新聞・雑誌・チラシの求人広告 | 4.1 2. ネットの求人情報 |
| 32.1 3. ハローワーク、ジョブカフェなど | 1.2 4. 民間の職業紹介所 |
| 2.3 5. 合同会社説明会のようなイベントで | 14.3 6. 学校の紹介 |
| 6.7 7. 両親の紹介 | 5.3 8. 両親以外の家族、親戚の紹介 |
| 9.2 9. 親しい友人の紹介 | 2.9 10. あまり親しくない知りあいの紹介 |
| 8.9 11. 前の職場でできた知りあいの紹介 | |
| 8.9 12. その他 (具体的に : |) |

DKNA 1.1

ここからは、すべての方に生活経験のある地域についてお聞きします

問 13 青森県外で生活した経験はありますか。

- | | | | |
|----------------|---|----------------------|----------------------|
| 47.6 1. ない | } | →9 ページの間 16 にお進みください | |
| 33.0 2. 一回だけある | | } | →問 14 と問 15 にお答えください |
| 11.0 3. 二回ある | | | |
| 8.0 4. 三回以上ある | | | |
| → () 回 | | DKNA 0.5 | |

該当者 103 名中 平均 4.3 回 min.3 回 max.20 回 Median 4.0 回 DKNA 24.3
不合理に長い回数を回答し、かつ、その解釈が不可能である回答を欠損とした。

問 14 県外での生活経験についてお聞きします。

(1) そのとき住んでいた地域はどこですか。二回以上経験がある方は、もっとも最近生活していた地域についてお答えください。

該当者 668 名中

98.2 1. 国内 () 都道府県 () 市区町村

該当者 656 名中

7.9 01 北海道	0.0 02 青森県	7.5 03 岩手県	16.8 04 宮城県	5.0 05 秋田県
2.0 06 山形県	2.1 07 福島県	1.7 08 茨城県	0.3 09 栃木県	1.8 10 群馬県
4.9 11 埼玉県	3.5 12 千葉県	26.4 13 東京都	7.9 14 神奈川県	0.6 15 新潟県
0.3 16 富山県	0.3 17 石川県	0.3 18 福井県	0.2 19 山梨県	0.8 20 長野県
0.8 21 岐阜県	0.9 22 静岡県	2.7 23 愛知県	0.3 24 三重県	0.3 25 滋賀県
0.5 26 京都府	1.1 27 大阪府	0.2 28 兵庫県	0.5 29 奈良県	0.2 30 和歌山県
0.0 31 鳥取県	0.0 32 島根県	0.0 33 岡山県	0.3 34 広島県	0.2 35 山口県
0.2 36 徳島県	0.3 37 香川県	0.0 38 愛媛県	0.0 39 高知県	0.0 40 福岡県
0.0 41 佐賀県	0.0 42 長崎県	0.0 43 熊本県	0.0 44 大分県	0.0 45 宮崎県
0.0 46 鹿児島県	0.0 47 沖縄県			DKNA 1.5

0.9 2. 国外

DKNA 0.9

(2) その県外の地域で生活していた理由はなんですか。下に挙げた理由の中から、あなたご自身の場合に当てはまるものをいくつでも選んで○をつけてください。

該当者 668 名中

- 7.5 1. 自分がその地域の出身だから
- 31.9 2. 自分がその地域の学校に通っていたから
- 41.9 3. 自分がその地域で働いていたから
- 0.8 4. 妻や夫がその地域の出身だから
- 0.5 5. 妻や夫がその地域の学校に通っていたから
- 8.5 6. 妻や夫がその地域で働いていたから
- 3.1 7. 両親の仕事などの都合
- 10.0 8. 子どもの通学、仕事などの都合
- 10.0 9. その他（具体的に：) DKNA 1.2

(3) その地域で生活していたときに、どのような働き方をしていましたか。

該当者 668 名中

- 5.3 1. その当時は働いていなかった
- 49.6 2. 正規の職員・従業員 13.3 3. パート、アルバイト 1.4 4. 派遣社員
- 4.0 5. 契約社員・委託 2.7 6. その他（具体的に：) DKNA 3.7

問 15 その地域から、現在お住まいの地域に移ってきたときのことについてお聞きします。

(1) 現在の地域に移ってきたのはいつごろですか。 西暦 () 年ごろ

該当者 668 名中 min. 1963 年 max. 2015 年 DKNA 5.5

(2) 現在の地域に住むことになったのはなぜですか。あてはまる理由すべてに○をつけてください。

該当者 668 名中

- 47.2 1. 実家に戻ったから
- 9.7 2. 実家に近いから
- 6.1 3. 配偶者の実家で同居するから
- 5.8 4. 配偶者の実家に近いから
- 26.7 5. 仕事場・通学先に近いから
- 9.4 6. 配偶者の仕事場・通学先に近いから
- 3.4 7. 買い物に便利だから
- 0.9 8. 娯楽施設があるから、趣味の活動に便利だから
- 4.3 9. 交通の便がよいから
- 6.1 10. 子どもの学区や通学の便を考えて
- 3.3 11. その他、子どものことを考えて
- 2.5 12. 友人や恋人がいた
- 0.8 13. 地域の活動や行事に参加していた、してみたかった
- 1.1 14. 地域の住民に魅力があった
- 3.0 15. 自然環境、居住環境に魅力があった
- 12.4 16. その他（具体的に：) DKNA 0.8

(3) 以前にいた県外の地域を離れて、青森県内に引っ越してくるようになった、直接のきっかけはなんでしたか。あてはまる理由すべてに○をつけてください。

- 5.5 1. 家族が怪我や病気をした
- 3.6 2. 家族の介護が必要になった
- 1.5 3. 実家の家業に問題が発生した
- 12.4 4. 特に問題はないが、親に実家に戻るよう言われた
- 7.3 5. 自分が結婚した
- 1.2 6. 子どもが産まれた
- 0.5 7. 子どもが小学校や中学校にあがった
- 0 8. 子どもが高校に進学した
- 1.7 9. 家を買った
- 13.8 10. 学校を卒業した
- 11.4 11. 今の地域、またはそこから通える範囲に就職した
- 21.4 12. 転勤や配置転換
- 8.5 13. 転職先が青森県内で見つかった
- 4.2 14. 自分が怪我や病気をした
- 17.1 15. 仕事を自分から辞めた
- 2.4 16. 解雇された／契約が切れた
- 0.3 17. 友人や仲間に誘われた
- 0.9 18. 親戚に誘われた
- 0.2 19. その他の知人に誘われた
- 0.0 20. 移住支援事業など、自治体の働きかけがあつて
- 13.2 21. その他（具体的に：) DKNA 1.2

(4) あなたが青森県内に引っ越してくることを可能にした条件はなんだったでしょうか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

- 51.7 1. 実家に住むことが出来た
- 6.4 2. 実家以外に、住む家や土地があった
- 8.2 3. 家族から、生活について援助が受けられた
- 0.6 4. 親戚から、生活について援助が受けられた
- 1.2 5. 友人、知人、恋人から、生活について援助が受けられた
- 12.9 6. 引っ越すことについて、家族の理解があった
- 19.3 7. 勤務先に、支店や支部があった
- 13.2 8. 転職して、定職に就く見込みがあった
- 6.0 9. 定職に就けなくても、生活していける見込みがあった
- 0.3 10. 子どもが自立していた
- 2.4 11. 生活のコストが安かった
- 0.2 12. 自治体による移住支援があった
- 12.7 13. その他（具体的に：) DKNA 2.4

(5) 青森県内に引っ越してくるときに、離職や転職をしましたか。

- 8.7 1. 離職し、転職先を決めてから引っ越してきた
- 17.8 2. 離職せず、転勤や配置転換で引っ越してきた
- 4.9 3. 離職し、家業や親戚、知り合いの仕事を手伝う約束をして引っ越してきた
- 34.0 4. 離職し、転職先が決まる前に引っ越してきた
- 30.8 5. 当時は、そもそも仕事に就いていなかった

DKNA 3.7

(6) 青森県内に引っ越してくるときに、収入の変化はありましたか。

- 7.0 1. かなり上がった
- 6.1 2. 少し上がった
- 28.0 3. ほとんど変わっていない
- 12.9 4. 少し下がった
- 32.6 5. かなり下がった

DKNA 13.3

(7) 県内に引っ越してくる以前から、青森県内で生活したいという望みはありましたか。

- 43.9 1. いつかは青森で生活したいと望んでいた
 - 14.2 2. すぐにでも青森で生活したいという望みがあった
 - 37.4 3. 青森で生活したいとは思っていなかった
- } →(8)と(9)にお答えください
→(10)にお答えください

DKNA 4.5

(8) (望みがあった方に) それはなぜですか。あてはまる理由すべてに○をつけてください。
該当者 388 名中

- 25.0 1. 実家やお墓を継ぐため
- 4.4 2. 家業を継ぐため
- 29.4 3. 親の面倒を見たり、介護したりするため
- 46.7 4. 親の近くにいたほうが安心だから
- 7.2 5. 青森でやりたい仕事があった
- 3.1 6. 仕事以外に、青森でやりたい活動があった
- 3.4 7. 青森のほうが、仕事が見つかりやすかった
- 2.6 8. 青森のほうが、労働環境がよさそうだった
- 6.4 9. 地域に貢献したいという気持ちがあった
- 1.0 10. 青森に通いたい学校があった
- 18.6 11. 青森に友人や恋人がいた
- 22.2 12. 青森のほうが、生活環境がよさそうだった
- 10.6 13. 青森のほうが、子どもを育てるのによいと思っていた
- 0.5 14. 今いる町自体に魅力があった (どのような :)
- 0 15. 自治体の移住支援が充実していた
- 7.0 16. 都会の生活が自分に合わなかった (どのように :)
- 8.3 17. その他 (具体的に :)

DKNA 0.5

(9) (望みがあった方に) どのくらい前から、青森県内での生活を考えていましたか。

該当者 388 名中

西暦 () 年ころから

min. 1958 年

max. 2014 年

DKNA 1.4

(10) (望みがなかった方に) それはなぜですか。あてはまる理由すべてに○をつけてください。

該当者 250 名中

- 1.6 1. 実家やお墓を継ぎたくなかった
- 3.2 2. 家業を継ぎたくなかった
- 2.0 3. 親の面倒を見たり、介護したりするのが嫌だった
- 14.0 4. 親から離れていたかった
- 24.4 5. 青森にはやりたい仕事になかった
- 20.4 6. 仕事以外の、やりたいと思う活動が青森にはなかった
- 37.6 7. 青森には仕事になさそうだった
- 30.8 8. 青森のほうが、労働環境が悪そうだった
- 4.4 9. 以前にいた地域に貢献したいという気持ちがあった
- 3.2 10. 青森には通いたいと思える学校になかった
- 8.0 11. 青森には友人や恋人がいなかった
- 42.0 12. 以前いた地域のほうが、生活環境がよかった
- 6.8 13. 以前いた地域のほうが、子どもを育てるのによかった
- 19.2 14. 以前いた町自体に魅力があった (どのような :)
- 18.4 15. その他 (具体的に :)

DKNA 3.6

ここからは、すべての方に携帯電話や SNS の利用についてお聞きします

問 16 携帯電話やスマートフォンについてお聞きします。

(1) あなたは携帯電話やスマートフォンを使っていますか。

95.2 1. 使っている 4.5 2. 使っていない

DKNA 0.3

(2) (使っている方のみ) 携帯電話やスマートホンの「アドレス帳」に登録されている番号とメールアドレスは、何人分くらいありますか。お店や会社などは除いて考えてください。

該当者 1,226 名中

96.7 1. () 人分くらい登録されている

平均 73.7 人 min. 2 人 max. 2500 人 Median 人 DKNA 0.2

4.5 2. 一人も登録されていない

DKNA 2.2

問 17 SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の利用についてお聞きします。

(1) あなたがふだん利用している SNS は、以下のどれですか。利用している SNS すべてに○をつけてください

10.9	1. Twitter	18.8	2. Facebook	4.6	3. Mixi	43.9	4. LINE
5.8	5. Instagram	2.3	6. その他				
46.4	7. 使っていない→(2)は飛ばして、問 18にお進みください					DKNA	4.5

(2) SNS 上でのやりとりをするのは、ふだんから実際に顔を合わせる人たちと、ふだんは顔を合わせない人たちの、どちらが多いでしょうか。

該当者 691 名中

45.2	1. ふだんから実際に顔を合わせる人たちがほとんど		
14.5	2. ふだんから実際に顔を合わせる人たちとのやりとりが多い		
14.8	3. どちらも同じくらい		
9.4	4. ふだんは顔を合わせない人たちとのやりとりが多い		
4.5	5. ふだんは顔を合わせない人たちとのやりとりがほとんど		
0.3	6. SNS は使っていない		DKNA 11.4

ここからは、あなたの人間関係についてお聞きします

問 18 次のような学校や機会でも知りあった、今でも**仕事以外の理由で、月に一度は会ったり連絡したりする人**は、それぞれ何人くらいいますか。

	1. () 人 くらい 平均値のみ表示	2. いない	DKNA
a. 小学校時代やそれ以前に知りあった人	25.6 (3.0) 人	72.7	17.1
b. 中学校時代に知りあった人	30.7 (3.3) 人	67.6	1.71
c. 高校時代に知りあった人	39.4 (3.3) 人	58.9	1.79
d. 大学・短大・専門学校等で知りあった人	18.6 (5.1) 人	79.6	1.79
e. 今の仕事やアルバイトで知りあった人	38.5 (6.3) 人	59.8	1.71
f. 以前の仕事やアルバイトで知りあった人	29.7 (3.6) 人	68.6	1.71
g. インターネットやメールで知りあった人	4.7 (6.3) 人	93.5	1.79
h. 町や遊び場で知りあった人	8.3 (7.5) 人	89.9	1.79
i. 祭や青年団など地域の活動で知り合った人	6.4 (6.5) 人	94.8	1.86
j. ボランティア活動で知り合った人	4.4 (8.3) 人	93.8	1.79
k. その他、社会人になってから知り合った人	38.7 (9.2) 人	59.5	1.79

問 19 今お住まいの場所から 30 分以内に会える距離に、家族や親戚を含めて、次のような相手は何人くらいいますか。

	1. () 人 くらい 平均値のみ表示	2. いない	DKNA
a. 困ったときに相談に乗ってくれる人	79.4 (3.3) 人	19.3	1.2
b. 個人的な悩みを話せる人	73.1 (2.5) 人	25.6	1.2
c. 生活の中で、具体的な手助けをしてくれる人	65.1 (2.3) 人	33.1	1.3
d. 必要なら、まとまったオカネを貸してくれる人	42.8 (1.7) 人	56.0	1.2
e. 同じ目標を目指して一緒に何かしている人	30.4 (3.9) 人	68.4	1.2
f. 一緒に遊ぶ人	68.8 (3.9) 人	30.0	1.2
g. 必要なら就職の世話をしてくれる人	23.9 (2.2) 人	74.8	1.2
h. 必要なら就職活動についてアドバイスしてくれる人	35.6 (2.6) 人	63.2	1.2

問 20 では、会うのに 1 時間以上かかる距離には何人くらいいますか。

	1. () 人 くらい 平均値のみ表示	2. いない	DKNA
a. 困ったときに相談に乗ってくれる人	57.6 (3.0) 人	39.7	2.7
b. 個人的な悩みを話せる人	53.6 (2.7) 人	43.7	2.7
c. 生活の中で、具体的な手助けをしてくれる人	34.2 (2.4) 人	63.1	2.7
d. 必要なら、まとまったオカネを貸してくれる人	24.9 (2.0) 人	72.4	2.7
e. 同じ目標を目指して一緒に何かしている人	16.5 (5.8) 人	80.8	2.7
f. 一緒に遊ぶ人	44.9 (4.7) 人	52.4	2.7
g. 必要なら就職の世話をしてくれる人	15.6 (2.7) 人	81.7	2.7
h. 必要なら就職活動についてアドバイスしてくれる人	22.1 (3.2) 人	75.1	2.8

問 21 あなたは、次にあげる団体・組織に加入していますか。(1)～(10)のそれぞれについて、「1. 非加入」「2. 加入」「3. 加入して積極的に参加」のなかから1つずつ選んでください。

	1 非加入	2 加入	3 積極的に参加	DKNA
(1) 町内会・自治会	38.0	55.9	3.0	3.1
(2) PTA	71.9	18.9	3.4	5.8
(3) 氏子会	90.8	2.1	0.3	6.8
(4) 地域の子ども会	88.3	4.0	1.0	6.7
(5) 地域の婦人会	91.2	1.8	0.6	6.4
(6) 学童保育クラブ・幼児保育クラブ	90.0	3.0	0.5	6.5
(7) 宗教団体	88.2	4.7	0.9	6.1
(8) 商店会・同業組合・労働組合	83.7	9.6	0.8	6.0
(9) ボランティア組織・社会奉仕団体	87.0	4.5	2.4	6.0
(10) 趣味やスポーツのサークルや団体	74.8	12.6	7.4	5.3

問 22 先週一週間を振り返って、次のような活動に何日関わって、合計何時間を費やしましたか。仕事の時間は除いて考えてください。

a. 介護

	() 日	() 時間くらい
平均	0.4 日	42.0 時間
	1 日以下 1.1	median 40.0 時間
	2 日 0.8	min. 0.0 時間
	3 日 2.3	max. 100.0 時間
	4 日 5.1	DKNA 2.4
	5 日 59.6	
	6 日 0.1	
	7 日 5.2	
	DKNA 0.0	

b. 自治会、PTA、町おこしなどの地域活動

	() 日	() 時間くらい
平均	0.2 日	0.5 時間
	1 日以下 1.1	median 40.0 時間
	2 日 0.8	min. 0.0 時間
	3 日 2.3	max. 100.0 時間
	4 日 5.1	DKNA 2.4
	5 日 59.6	
	6 日 0.1	
	7 日 5.2	
	DKNA 0.0	

最後に、あなたの物事についての考え方、感じ方についてお聞きします

問 23 現在、あなたはどの程度幸せですか。「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字を選んで○をつけてください。

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	DKNA
1.0	1.5	2.3	6.6	5.4	18.5	10.1	18.1	19.5	6.7	9.5	0.9

問 24 あなたは、生活全般に満足していますか、それとも不満ですか。

40.6 1. 満足している

33.5 2. 不満だが、これ以上はあきらめている

23.7 3. 不満なので、なんとか改善しようとしている

DKNA 2.2

問 25 青森県や、現在住んでいる地域について、次のように思いますか (○はそれぞれ1つずつ)。

	あてはまる ↓ 1	ややあてはまる ↓ 2	あまりあてはまらない ↓ 3	あてはまらない ↓ 4	DKNA
a. 今の地域はとても暮らしやすい	24.4	50.6	18.7	5.3	1.0
b. 今の地域がとても好きだ	25.0	49.2	18.6	6.0	1.3
c. 今住んでいる地域は、工夫次第でもっと活気を出すことができると思う	31.0	36.1	24.3	7.1	1.6
d. ずっと今の地域にいらればいいと思う	26.7	37.8	22.0	12.0	1.6
e. 今住んでいる地域に貢献したい	18.5	39.9	28.9	10.8	1.9

問 26 あなたは、あなたご自身について、次のように思いますか。思ったとおりにお答えください (○はそれぞれ1つずつ)。

	あてはまる ↓ 1	ややあてはまる ↓ 2	あまりあてはまらない ↓ 3	あてはまらない ↓ 4	DKNA
a. 将来を考えて不安になることが多い	40.8	38.7	14.4	4.8	1.2
b. 自分の健康に不安がある	25.7	40.5	24.8	7.8	1.2
c. 自分の将来が今よりいいとは思えない	27.4	33.1	27.7	10.4	1.4
d. 親や親戚はわずらわしい	5.7	19.3	37.7	35.3	2.0

問 27 過去1ヶ月の間に、次のように感じたことがどれくらいありましたか (○はそれぞれ1つずつ)。

	あては まる ↓ 1	ややあ てはま る ↓ 2	あまり あては まらない ↓ 3	あては まらな い ↓ 4	まった くない ↓ 5	DKNA
a. 神経過敏に感じた	6.6	9.0	25.7	28.0	29.3	1.5
b. 絶望的だと感じた	3.7	5.0	13.4	19.5	56.8	1.6
c. そわそわ、落ち着かなか く感じた	3.3	5.3	18.8	27.3	43.9	1.5
d. 気分が沈み込んで、何 が起こっても気が晴 れないように感じた	4.6	5.8	20.3	29.5	38.3	1.5
e. 何をするのも骨折りだ と感じた	3.3	6.0	16.4	29.0	43.9	1.4
f. 自分は価値のない人間 だと感じた	4.6	3.3	14.8	20.4	55.1	1.2

長い間のご協力、本当にありがとうございました

回答者用質問紙

東青地域住民の仕事と生活に関する調査

弘前大学地域未来創生センター

この調査は、弘前大学地域未来創生センターと青森市の連携による調査・研究事業の一環として行うもので、東青地域にお住まいの皆さまの働き方や現在の生活状況について調査し、今後の地域振興、特に若者の地域定着やUターンを推進する政策の提案を行うべく、基礎資料として利用するものです。この調査の結果や内容は統計的に処理し、地域全体としての傾向を把握することだけを目的として利用されますので、皆様のご回答が個々に分析されることは絶対にありません。

お忙しい中、誠に恐縮ですが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

ご記入に当たってのお願い

1. 2015年7月時点でお答え下さい。
2. 回答は、あなたご自身に当てはまる選択肢を選び、番号を○で囲んでいただく形式がほとんどです。設問によっては直接ご記入をいただいたり、具体的な内容を文章でご記入いただくところもあります。
3. ご記入済みのアンケート用紙は、同封しました返信用封筒に入れて、

2015年7月20日（月）までに

投函していただけますようお願いいたします。

4. 本調査についてご不明な点がございましたら、電話やメールにて下記にお問い合わせ下さい。

弘前大学地域未来創生センター
電話・ファクス : 0172-39-3198
E-mail : irrc@hirosaki-u.ac.jp

お電話の受付は月曜日から金曜日の10時より17時までとなっております。

なにとぞご了承ください。

○この調査に含まれている内容以外で、政府や行政、当センターへのご意見、ご要望がございましたら、この欄にお書きください。

まず、結果の整理に必要な、いくつかの点についてお聞きします

問1 あなたの性別を教えてください。 1. 男 2. 女

問2 あなたの生年月をおうかがいします。 西暦 () 年 () 月

問3 あなたは、現在結婚していますか。
1. 結婚している 2. 離別・死別した 3. 結婚していない

問4 お子さんはいますか。
1. いない 2. いる → 一番下のお子さんは () 歳

問5 現在、あなたはどなたと同居していますか。一緒に暮らしている方すべてに○をつけてください。一人暮らしの方は、「14. 一人暮らし」に○をつけてください。
1. 夫や妻 2. 自分の父 3. 自分の母 4. 舅 (夫や妻の父)
5. 姑 (夫や妻の母) 6. 兄弟姉妹 7. 息子 8. 娘
9. 祖父 10. 祖母 11. 孫 12. 嫁・娘婿
13. その他 (具体的に:) 14. 一人暮らし

問6 現在、住んでいる家の世帯主はどなたですか。
1. 自分 2. 夫や妻 3. 自分の父母 4. 舅・姑 (夫や妻の父母)
5. 兄弟姉妹 6. 息子・娘 7. 祖父母 8. 夫や妻の祖父母
9. その他 (具体的に:)

問7 あなたの現在の住居は次のどれですか。
1. 持家 (一戸建て) 2. 分譲マンション 3. 公営住宅
4. 民間・公団の賃貸住宅 5. 社宅・社員寮 6. その他

問8 実家まで帰るのに、どのくらい時間がかかりますか。
1. 今は実家で暮らしている
2. 30分未満 3. 30分～1時間未満 4. 1～2時間未満
5. 2～3時間未満 6. 3時間以上

問9 (1) あなたは長男、または長女ですか。 1. はい 2. いいえ
(2) 配偶者は長男、または長女ですか。 1. はい 2. いいえ 3. 配偶者はいない

問10 現在、お住まいの地域はどこですか。
1. 青森市 2. 平内町 3. 今別町 4. 蓬田村 5. 外ヶ浜町
6. その他 (具体的に:)

問 11 あなたが通った、または現在通っている学校についてお聞きします。

(1) あなたが卒業した中学校の所在地はどこですか。

1. 青森市 2. 平内町 3. 今別町 4. 蓬田村 5. 外ヶ浜町
6. 弘前市 7. 八戸市 8. それ以外の青森県内
9. 青森県外（都道府県名： ） 10. 国外

(2) あなたが最後に通った、または通っている学校は、次の中のどれにあたりますか。

1. 小学・中学校 2. 高校 3. 短大・高専
4. 大学・大学院 5. 専門学校

(3) その学校は、どこにありますか（ありましたか）。

1. 青森市 2. 平内町 3. 今別町 4. 蓬田村 5. 外ヶ浜町
6. 弘前市 7. 八戸市 8. それ以外の青森県内
9. 青森県外（都道府県名： ） 10. 国外

(4) その学校を卒業しましたか、それとも中途退学しましたか。

1. 卒業した 2. 中途退学した 3. 現在通っている

問 12 現在の仕事についてお聞きします。

(1) 家業の手伝いも含めて、ふだん何か収入になる仕事をしていますか。

1. 仕事をしていない→(2)～(12)は飛ばして、5 ページの間 13にお進みください
2. 仕事をしている →(2)～(12)にお答えください

(2) 先週一週間で働いたのは何日で、労働時間は合計すると何時間ですか。

() 日働いて、労働時間は合計 () 時間くらい

(3) 通勤時間は、往復で何分くらいですか。

1. 自宅で仕事をしている
2. 通勤には往復で () 分くらいかかる

(4) 現在の仕事で得られる収入はどれくらいですか。月収と年収の両方を、税引き前の金額でお答えください。

月 () 万円くらいで、年 () 万円くらい

(5) 現在の仕事の勤務先（職場）はどの地域にありますか。

- | | | | | |
|----------------------|--------|--------------|--------|---------|
| 1. 青森市 | 2. 平内町 | 3. 今別町 | 4. 蓬田村 | 5. 外ヶ浜町 |
| 6. 弘前市 | 7. 八戸市 | 8. それ以外の青森県内 | | |
| 9. 青森県外（都道府県名：_____） | | 10. 国外 | | |

(6) 現在の仕事について、次のようなことに満足していますか、不満ですか。

	満足	まあ満足	どちらとも いえない	やや 不満	不満				
	↓	↓	↓	↓	↓				
a. 総合的に.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
b. 収入.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
c. やりがい.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
d. 労働時間.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
e. 福利厚生.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
f. 自宅と勤務地の距離.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
g. 仕事と私生活のバランス.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5

(7) あなたの仕事は、次のどれに当たりますか。複数の仕事についている方は、**もっとも近い職種**に○をつけてください。

1. 管理職.....会社・官庁・団体の役員や管理職など
2. 専門・技術職.....専門的で高度な知識や技術が必要な仕事
法律家、医師・看護師、芸術、教育・保育職、研究・開発、
技術者・エンジニア、プログラマ、パイロットなど
3. 事務職.....会社・官庁・団体などの事務職
4. 販売職.....店員、販売員など、直接個人のお客と接する仕事
5. 営業職.....会社、営業所などとの交渉や販売に関わる仕事
6. サービス職.....ウェイター、調理、接客担当、美容師、介護、清掃など
7. 技能職.....整備士、大工、左官、配管工、技能工など
8. 保安職.....自衛官、警察官、消防士、警備員など
9. 製造・生産職.....工場勤務者、建設作業員
10. 農林水産関係.....農業、林業、水産業、食品加工
11. 運輸業.....タクシー、バス、トラックなどの運転手
12. その他の仕事（具体的に：_____）

(8) あなたのお仕事は、勤めでしょうか、自営でしょうか。

- | | |
|---------------|-------------------------|
| 1. 家業の手伝い | } → 5 ページの間 13 にお進みください |
| 2. 自営業または会社経営 | |
| 3. 雇われている | → (9) にお進みください |

(9) 勤め先での立場を教えてください。

- | | |
|--------------|---------------------|
| 1. 正規の職員・従業員 | 2. 会社役員 |
| 3. パート、アルバイト | 4. 派遣社員 |
| 5. 契約社員・委託 | 6. その他（具体的に： _____） |

(10) 勤め先の企業全体の従業者数を教えてください。

1. 1～4名 2. 5～29名 3. 30～99名 4. 100～299名 5. 300名以上

(11) 今の職場に勤め始めてどれくらいになりますか。

（ ）年と（ ）ヶ月くらい

(12) 今の仕事をどうやって見つけましたか（○はいくつでも）。

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1. 新聞・雑誌・チラシの求人広告 | 2. ネットの求人情報 |
| 3. ハローワーク、ジョブカフェなど | 4. 民間の職業紹介所 |
| 5. 合同会社説明会のようなイベントで | 6. 学校の紹介 |
| 7. 両親の紹介 | 8. 両親以外の家族、親戚の紹介 |
| 9. 親しい友人の紹介 | 10. あまり親しくない知りあいの紹介 |
| 11. 前の職場でできた知りあいの紹介 | |
| 12. その他（具体的に： _____） | |

ここからは、すべての方に生活経験のある地域についてお聞きします

問 13 青森県外で生活した経験はありますか。

- | | |
|------------|-------------------------|
| 1. ない | } → 9 ページの問 16 にお進みください |
| 2. 一回だけある | |
| 3. 二回ある | |
| 4. 三回以上ある | |
| →（ ）回 | } → 問 14 と問 15 にお答えください |

問 14 県外での生活経験についてお聞きします。

(1) そのとき住んでいた地域はどこですか。二回以上経験がある方は、もっとも最近生活していた地域についてお答えください。

1. 国内 （ ）都道府県 （ ）市区町村
2. 国外

(2) その県外の地域で生活していた理由はなんですか。下に挙げた理由の中から、あなたご自身の場合に当てはまるものをいくつでも選んで○をつけてください。

1. 自分がその地域の出身だから
2. 自分がその地域の学校に通っていたから
3. 自分がその地域で働いていたから
4. 妻や夫がその地域の出身だから
5. 妻や夫がその地域の学校に通っていたから
6. 妻や夫がその地域で働いていたから
7. 両親の仕事などの都合
8. 子どもの通学、仕事などの都合
9. その他（具体的に： _____）

(3) その地域で生活していたときに、どのような働き方をしていましたか。

1. その当時は働いていなかった
2. 正規の職員・従業員
3. パート、アルバイト
4. 派遣社員
5. 契約社員・委託
6. その他（具体的に： _____）

問 15 その地域から、現在お住まいの地域に移ってきたときのことについてお聞きます。

(1) 現在の地域に移ってきたのはいつごろですか。 西暦（ _____ ）年ごろ

(2) 現在の地域に住むことになったのはなぜですか。あてはまる理由すべてに○をつけてください。

1. 実家に戻ったから
2. 実家に近いから
3. 配偶者の実家で同居するから
4. 配偶者の実家に近いから
5. 仕事場・通学先に近いから
6. 配偶者の仕事場・通学先に近いから
7. 買い物に便利だから
8. 娯楽施設があるから、趣味の活動に便利だから
9. 交通の便がよいから
10. 子どもの学区や通学の便を考えて
11. その他、子どものことを考えて
12. 友人や恋人がいた
13. 地域の活動や行事に参加していた、してみたかった
14. 地域の住民に魅力があった
15. 自然環境、居住環境に魅力があった
16. その他（具体的に： _____）

(3) 以前にいた県外の地域を離れて、青森県内に引っ越してくるようになった、直接のきっかけはなんでしたか。あてはまる理由すべてに○をつけてください。

1. 家族が怪我や病気をした
2. 家族の介護が必要になった
3. 実家の家業に問題が発生した
4. 特に問題はないが、親に実家に戻るよう言われた
5. 自分が結婚した
6. 子どもが産まれた
7. 子どもが小学校や中学校にあがった
8. 子どもが高校に進学した
9. 家を買った
10. 学校を卒業した
11. 今の地域、またはそこから通える範囲に就職した
12. 転勤や配置転換
13. 転職先が青森県内で見つかった
14. 自分が怪我や病気をした
15. 仕事を自分から辞めた
16. 解雇された／契約が切れた
17. 友人や仲間に誘われた
18. 親戚に誘われた
19. その他の知人に誘われた
20. 移住支援事業など、自治体の働きかけがあつて
21. その他（具体的に： _____)

(4) あなたが青森県内に引っ越してくることを可能にした条件はなんだったでしょうか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. 実家に住むことが出来た
2. 実家以外に、住む家や土地があった
3. 家族から、生活について援助が受けられた
4. 親戚から、生活について援助が受けられた
5. 友人、知人、恋人から、生活について援助が受けられた
6. 引っ越すことについて、家族の理解があった
7. 勤務先に、支店や支部があった
8. 転職して、定職に就く見込みがあった
9. 定職に就けなくても、生活していける見込みがあった
10. 子どもが自立していた
11. 生活のコストが安かった
12. 自治体による移住支援があった
13. その他（具体的に： _____)

(5) 青森県内に引っ越してくるときに、離職や転職をしましたか。

1. 離職し、転職先を決めてから引っ越してきた
2. 離職せず、転勤や配置転換で引っ越してきた
3. 離職し、家業や親戚、知り合いの仕事を手伝う約束をして引っ越してきた
4. 離職し、転職先が決まる前に引っ越してきた
5. 当時は、そもそも仕事に就いていなかった

(6) 青森県内に引っ越してくるときに、収入の変化はありましたか。

1. かなり上がった
2. 少し上がった
3. ほとんど変わっていない
4. 少し下がった
5. かなり下がった

(7) 県内に引っ越してくる以前から、青森県内で生活したいという望みはありましたか。

1. いつかは青森で生活したいと望んでいた
 2. すぐにでも青森で生活したいという望みがあった
 3. 青森で生活したいとは思っていなかった
- } →(8)と(9)にお答えください
→(10)にお答えください

(8) (望みがあった方に) それはなぜですか。あてはまる理由すべてに○をつけてください。

1. 実家やお墓を継ぐため
2. 家業を継ぐため
3. 親の面倒を見たり、介護したりするため
4. 親の近くにいたほうが安心だから
5. 青森でやりたい仕事があった
6. 仕事以外に、青森でやりたい活動があった
7. 青森のほうが、仕事が見つかりやすかった
8. 青森のほうが、労働環境がよさそうだった
9. 地域に貢献したいという気持ちがあった
10. 青森に通いたい学校があった
11. 青森に友人や恋人がいた
12. 青森のほうが、生活環境がよさそうだった
13. 青森のほうが、子どもを育てるのによいと思っていた
14. 今いる町自体に魅力があった (どのような:)
15. 自治体の移住支援が充実していた
16. 都会の生活が自分に合わなかった (どのように:)
17. その他 (具体的に:)

(9) (望みがあった方に) どのくらい前から、青森県内での生活を考えていましたか。

西暦 () 年ころから

(10) (望みがなかった方に) それはなぜですか。あてはまる理由すべてに○をつけてください。

1. 実家やお墓を継ぎたくなかった
2. 家業を継ぎたくなかった
3. 親の面倒を見たり、介護したりするのが嫌だった
4. 親から離れていたかった
5. 青森にはやりたい仕事なかった
6. 仕事以外の、やりたいと思う活動が青森にはなかった
7. 青森には仕事がなさそうだった
8. 青森のほうが、労働環境が悪そうだった
9. 以前にいた地域に貢献したいという気持ちがあった
10. 青森には通いたいと思える学校がなかった
11. 青森には友人や恋人がいなかった
12. 以前いた地域のほうが、生活環境がよかった
13. 以前いた地域のほうが、子どもを育てるのによかった
14. 以前いた町自体に魅力があった (どのような:)
15. その他 (具体的に:)

ここからは、すべての方に携帯電話や SNS の利用についてお聞きします

問 16 携帯電話やスマートフォンについてお聞きします。

(1) あなたは携帯電話やスマートフォンを使っていますか。

1. 使っている 2. 使っていない

(2) (使っている方のみ) 携帯電話やスマートホンの「アドレス帳」に登録されている番号とメールアドレスは、何人分くらいありますか。お店や会社などは除いて考えてください。

1. () 人分くらい登録されている
2. 一人も登録されていない

問 17 SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) の利用についてお聞きします。

(1) あなたがふだん利用している SNS は、以下のどれですか。利用している SNS すべてに○をつけてください。

1. Twitter 2. Facebook 3. Mixi 4. LINE
5. Instagram 6. その他
7. 使っていない→(2)は飛ばして、問 18 にお進みください

(2) SNS 上でのやりとりをするのは、ふだんから実際に顔を合わせる人たちと、ふだんは顔を合わせない人たちの、どちらが多いでしょうか。

1. ふだんから実際に顔を合わせる人たちがほとんど
2. ふだんから実際に顔を合わせる人たちとのやりとりが多い
3. どちらも同じくらい
4. ふだんは顔を合わせない人たちとのやりとりが多い
5. ふだんは顔を合わせない人たちとのやりとりがほとんど
6. SNS は使っていない

ここからは、あなたの人間関係についてお聞きします

問 18 次のような学校や機会を知りあった、今でも**仕事以外の理由で、月に一度は会ったり連絡したりする人**は、それぞれ何人くらいいますか。

- | | | |
|-----------------------------|-----------------|--------|
| a. 小学校時代やそれ以前に知りあった人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| b. 中学校時代に知りあった人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| c. 高校時代に知りあった人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| d. 大学・短大・専門学校等で知りあった人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| e. 今の仕事やアルバイトで知りあった人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| f. 以前の仕事やアルバイトで知りあった人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| g. インターネットやメールで知りあった人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| h. 町や遊び場で知りあった人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| i. 祭や青年団など地域の活動で知り合った人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| j. ボランティア活動で知り合った人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| k. その他、社会人になってから知り合った人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |

問 19 今お住まいの場所から 30 分以内に会える距離に、家族や親戚を含めて、次のような相手は何人くらいいますか。

- | | | |
|-------------------------------------|-----------------|--------|
| a. 困ったときに相談に乗ってくれる人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| b. 個人的な悩みを話せる人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| c. 生活の中で、具体的な手助けをしてくれる人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| d. 必要なら、まとまったオカネを貸してくれる人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| e. 同じ目標を目指して一緒に何かしている人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| f. 一緒に遊ぶ人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| g. 必要なら就職の世話をしてくれる人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |
| h. 必要なら就職活動についてアドバイスして
くれる人…………… | 1. () 人くらい | 2. いない |

問 20 では、会うのに1時間以上かかる距離には何人くらいいますか。

- a. 困ったときに相談に乗ってくれる人…………… 1. () 人くらい 2. いない
- b. 個人的な悩みを話せる人…………… 1. () 人くらい 2. いない
- c. 生活の中で、具体的な手助けをしてくれる人…… 1. () 人くらい 2. いない
- d. 必要なら、まとまったオカネを貸してくれる人… 1. () 人くらい 2. いない
- e. 同じ目標を目指して一緒に何かしている人…… 1. () 人くらい 2. いない
- f. 一緒に遊ぶ人…………… 1. () 人くらい 2. いない
- g. 必要なら就職の世話をしてくれる人…………… 1. () 人くらい 2. いない
- h. 必要なら就職活動についてアドバイスして
くれる人…………… 1. () 人くらい 2. いない

問 21 あなたは、次にあげる団体・組織に加入していますか。(1)～(10)のそれぞれについて、「1. 非加入」「2. 加入」「3. 加入して積極的に参加」のなかから1つずつ選んでください。

	1 非加入	2 加入	3 積極的に参加
(1) 町内会・自治会	1	2	3
(2) PTA	1	2	3
(3) 氏子会	1	2	3
(4) 地域の子ども会	1	2	3
(5) 地域の婦人会	1	2	3
(6) 学童保育クラブ・幼児保育クラブ	1	2	3
(7) 宗教団体	1	2	3
(8) 商店会・同業組合・労働組合	1	2	3
(9) ボランティア組織・社会奉仕団体	1	2	3
(10) 趣味やスポーツのサークルや団体	1	2	3

問 22 先週一週間を振り返って、次のような活動に何日関わって、合計何時間を費やしましたか。仕事の時間は除いて考えてください。

- a. 介護 () 日 () 時間くらい
- b. 自治会、PTA、町おこしなどの地域活動 () 日 () 時間くらい

最後に、あなたの物事についての考え方、感じ方についてお聞きします

問 23 現在、あなたはどの程度幸せですか。「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字を選んで○をつけてください。

0 — 1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 — 8 — 9 — 10

問 24 あなたは、生活全般に満足していますか、それとも不満ですか。

- 1. 満足している
- 2. 不満だが、これ以上はあきらめている
- 3. 不満なので、なんとか改善しようとしている

問 25 青森県や、現在住んでいる地域について、次のように思いますか(○はそれぞれ1つつ)。

- | | あては
まる | やや
あては
まる | あまり
あては
まらない | あては
まらない |
|--|-----------|-----------------|--------------------|-------------|
| | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| a. 今の地域はとても暮らしやすい…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| b. 今の地域がとても好きだ…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| c. 今住んでいる地域は、工夫次第でもっと活気を
出すことができると思う…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| d. ずっと今の地域にいらればよいと思う…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| e. 今住んでいる地域に貢献したい…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |

問 26 あなたは、あなたご自身について、次のように思いますか。思ったとおりにお答えください(○はそれぞれ1つつ)。

- | | あては
まる | やや
あては
まる | あまり
あては
まらない | あては
まらない |
|---------------------------|-----------|-----------------|--------------------|-------------|
| | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| a. 将来を考えて不安になることが多い…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| b. 自分の健康に不安がある…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| c. 自分の将来が今よりいいとは思えない…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |
| d. 親や親戚はわずらわしい…………… | 1 | 2 | 3 | 4 |

問 27 過去1ヶ月の間に、次のように感じたことがどれくらいありましたか(○はそれぞれ1つつ)。

- | | いつも | たい
てい | とき
どき | 少し
だけ | まった
く
ない |
|--|-----|----------|----------|----------|----------------|
| | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| a. 神経過敏に感じた…………… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| b. 絶望的だと感じた…………… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| c. そわそわ、落ち着かなく感じた…………… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| d. 気分が沈み込んで、何が起こっても気が晴れ
ないように感じた…………… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| e. 何をするのも骨折りだと感じた…………… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| f. 自分は価値のない人間だと感じた…………… | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

長い間のご協力、本当にありがとうございました

執筆担当者

氏名	所属	担当章
李 永 俊	弘前大学	第1章
	人文学部 教授・地域未来創生センター長	第2章
		第3章
		第4章
石 黒 格	日本女子大学	第5章
	人間社会学部 准教授	
山 口 恵 子	東京学芸大学	第6章
	教育学部 准教授	
李 秀 眞	弘前大学	第7章
	教育学部 准教授	
飯 田 清 子	弘前大学	第8章
	地域社会研究科 博士後期課程	集計表

青森市移住・定住意識調査報告書

2015年11月

編集・発行

弘前大学地域未来創生センター

〒036-8560 青森県弘前市文京町1

電話 0172-39-3198

Email: irrc@hirosaki-u.ac.jp

<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/irrc/>